

記 錄

第三期小樽運河研究講座全7回

「どのように小樽運河の再生をすすめるか」

昭和56年5月16日～6月29日

小樽運河研究講座実行委員会

第3回 小樽運河研究講座のご案内

小樽は、港町として発展成長し、北海道開拓の歴史のなかで重要な役割を果たしてきました。山・坂・海の豊かな自然を背景に、人々が歴史をとおして築いてきた町並みは、その栄光の時代を今に伝え、町に住むものの誇りとなっています。

しかし、一世紀におよぶ小樽繁栄の歴史をささえてきた諸条件にも近年大きな変化がみられ、さまざまな意味で、町の転換期を迎えてます。小樽の新しいまちづくりに向けて、市民一人一人が知恵をだしあい、自立する町のすがたを真剣に考えなければならない時期にさしかかっているのです。

港町小樽を象徴する小樽運河——その保存、再生をめぐる問題も、このような時代を背景として、小樽の豊かな環境づくり、まちづくりという広い視野から検討すべきものです。運河問題に密接にかかわる経済・文化・交通・市民生活等々の複雑な問題を解決する手だても、その広い視野の中からしか決して生まれてはこないでしょう。

本講座は、そのような課題にこたえるために、各地で実践的なまちづくり運動をおこなっている住民や自治体の方々、さまざまな分野の専門家を招き、市民をまじえた総合的な学習、研究の場をつくりだすことをめざすものです。講師の方々との充実した討論をつうじて、小樽のまちづくりの課題や可能性がうきぼりにされ、「運河学」ともいうべき、まちづくりの視点にたった運河問題解決の指針が生みだされるものと考えます。

3回目をむかえた今回は、前2回の成果をふまえ、「どのように小樽運河の再生をすすめるか」をテーマに、運河再生のより実践的な課題の検討を中心として討論をすすめていきたいと思っています。

多くの市民の方々の参加を期待します。

目 次

ページ

第1回 5月16日(土) にぎわいの広場の創造 1

—保存と経済の調和をめざして—

浜野 安宏 (浜野商品研究所・代表取締役社長)

歴史的環境の保存・再生を考える場合、いかにして経済との調和をはかるかが大きな課題となっています。小樽運河もその例にもれません。

異人館のある神戸・北野地区の歴史的環境を舞台に、ユニークなアイデアでもってこの課題にこたえ、人々の活気であふれた、にぎわいのある広場をつくりだされてきた浜野氏をむかえ、実現までの経緯を語っていただき、歴史的環境の再生の道を探っていきたいと思います。

第2回 5月29日(金) 土地買い上げ運動の展開 15

—知床の環境保護に学ぶ—

高橋 春雄 (斜里町助役)

貴重な自然や歴史的環境を守るには、時として人々が身銭を切ることも必要です。斜里町ではそれを実践に移し、「知床に夢を買いませんか」と全国に土地買い上げを呼びかけ、植林、保護によって美しい自然を取り戻そうとしています。

斜里町の 高橋助役 をむかえ、運動の経緯を語っていただき、知床の実践的な環境保全に学ぶと同時に、小樽におけるトラスト運動の可能性を探っていきたいと思います。

第3回 6月2日(火) 町並み保存事業 29

—事業化の手法をさぐる—

川端 直志 (Kプランナーズ・代表取締役)

町並み保存が、現在、まちづくりの中心的な課題となってきたにもかかわ

らず、なかなか実現しないのは、事業化の手立てが今だ整備されていないことが大きな理由としてあげられます。

計画家として、この問題にとりくまれている川端氏をむかえ、山積する事業化の課題をこえて、町並み保存のあたらしい事業手法の可能性を探っていきたいと思います。

第4回 6月12日(金) 歴史的建造物の保存・再生 43

—制度的、技術的、経済的な課題をこえて—

広田 基彦 (北海道建築設計監理・取締役・技術相談役)

越野 武 (北海道大学助教授)

小島 一郎 (舞踏家)

佐々木興次郎 (喫茶叫兒樓店主)

歴史的建造物の保存・再生を実践するには、法制度上の制約や保存技術上の難しさなど、多くの課題をこえなければなりません。その課題解決の道を、旧小樽新聞社社屋など、道開拓の村に移築された歴史的建造物の補修、構造補強等々、保存工事の設計を手がけられた広田氏、越野氏の体験談の中から探っていきたいと思います。

第5回 6月20日(土) 風景の創造 75

—社会と文化の再建をめざして—

花崎 勝平 (評論家)

まちづくりを考える場合、実現に向けての実践活動はもちろん必要ですが、理論的な検討もたえずおこなっていく必要があります。

伊達火発に反対する運動をはじめとして、全国各地でおこっている反公害、反開発の住民運動との連帯をもとめ、理論と実践とをむすびつけた活動をなさっている花崎氏をむかえ、「風景の創造 —社会と文化の再建をめざして—」とい

うテーマで、広く環境問題についての考え方を語っていただきます。

第6回 6月25日(木) 地域での試み 89

—小樽を生きる場として—

浅原千代治(ザ・グラススタジオ・イン・オタル)

佐々木謙二(北海道現代作家)

佐渡美二夫(同上)

落 希一郎(シーガル・コーポレーション)

渡辺真一郎(小樽青年版画協会)

まわりを海と山のゆたかな自然に囲まれ、町の中心部には歴史につちかわれた建物や町並みが残っている小樽。他のどこにもない、すぐれた環境をもつこの小樽を生きる場として、環境にふさわしい経済活動や文化活動を実践している若者がいます。彼らの目からみた小樽の良さ、そして、その良さを生かした将来のすがたについて、共に語り合いたいと思います。

第7回 6月29日(月) 総括討論会 109

前6回にわたる講演、討論をふまえ、運河再生の実践的、具体的な課題についてのより深い、建設的な議論の場として、多数の市民の自由な意見交換がおこなわれることを期待します。

第3回 小樽運河研究講座 を終えて 123

第1回 にぎわいの広場の創造 —保存と経済の調和をめざして—

講師 池野 安宏氏

昭和26年5月16日
小樽市労働会館

講師紹介が終わって、

—僕は、釣りキチ少年にとりましては、釣りの神で、建築家にとっては建築プロデューサーで、宝石デザイナーにとては、宝石デザインのプロデューサーで、カメラ業界にとては新しいカメラを開発した人で、いろんな事をやっております。

最近、力を入れているのは、地方都市の新しい経済基盤を作るための、産業博覧とか、市街地区や商店街の開発なんです。

で、私は、みんなでやろうというやつ方、あまり好みないんで。

日本は、自由主義社会なんですから、コンセンサスなんか、得られないんですけど。

それを得ようとするから、日本全国、どこへ行っても商店街というと、アーケードがかかるいて、造花があり、ガス灯の照明が付いて、音楽が、かなり立てている。

結局、失敗も成功もせず、何となくみんなでやった、と実感を持つために、無駄に金を使っているわけです。

それでは町は変えられないんで。自分自身が命かけて何かをやり出さなければ、状況は良くならない。

神戸の北野地区も、委員会とかではなく、金のない熱意だけはある若い人たちが、やり始めたんのです。

僕は、神戸のファッショングループ化に取り組んで来たわけです。

これから地方都市は、自立できるようなテーマなり、産業を持たなければ、やって行けない。主体性を持たなければならぬ。

それじゃ、神戸に何があるのか。ファッショングループが急成長していた。広域的な意味での、ライフスタイル全体を新しくしていくような産業が、沸き起こって来た。

これを何とか走らせてせねばならない。

そこで、構想を立て、地元の連合会、KFA、市長とも話し合って、結果的に、ポートアイランドの中に、ファッショングループが出来ることになりました。

僕は神戸といつ町が好きで子供の頃、写真によく来ていた

た。プランナーとして来てみると、昔あった、素晴らしい家々が、ほとんど崩壊寸前でそれに変わって、非常にけばけばしいラブホテルとか、安普請のマンションが、軒を連ねていだ。これじゃ、いかんのではなないか。

そこで、いろんな人を集めて、何とかしよう。で、一番良く建物が残っている、山の手通りという通りに目をつけたわけです。

ラブホテルの隣りにあつた空き地を若者たちが買って、フレッシュなムードの異人館風のボキャブラリーを残したショッピングフロアのようものが出来れば、ラブホテルは、立ち退いてくれる。

立ち退くような要素を作ってしまえば良いわけです。2軒あつたラブホテルが、1軒になりました。その1軒も、回りが、ファシショナブルでステキなので、ネオンを変えた。

ラブホテルでも、センスが良くて、町並みに合っていいれば良いんですけど。必要なものなんですから、堂々とやれば良いんですけど。

異人館通りは、三浦さんという人が、先行してスペイン風の中庭のある白い漆喰作りのショッピングセンターを建てた。

その一軒隣りに私たちが、コースガーデンを建てた。

その向に、私たちと同じ張

り方のレニガ張りの建物が出来た。

家を建て直すんだけど、どうしたら良いか、といふ事で異人館風の建物が出来た。

昔からある異人館は、市によって買上げられだ。

回りが段々、カッコ良くなり、僕も、僕も、という事で何軒か出来た。

非常に良い環境になり、地元の人にも定着し、すごく良い界隈が出来た。

この場合、一番良かったのは、行政の対応です。二軒出来た段階で、高度制限と用途制限をかけた。

これは非常に素晴らしい。民間が先駆して、行政が対応する。久しぶりですね。

高度制限によって、安普請のマンションはもう、建たないですね。

用途制限によって風俗営業は一昔やれない。ラブホテルは出来ない。

大手の資本も進出出来ない。結局、適当な大きさの地元の人がやれる。

非常に理想的な複合商業施設が、建ち並ぶ事にならぬけです。

おまけに、片側歩道を両側歩道にして、道を狭くして、車が追い越せないようにした。

一車線通行しか出来ないようにして。

こうして、きれいな町にして行けた。非常に良いセンスで出来てくれました。

最初、地元の商店街が、みんな街で商売が流行るわけないと、見向きもしなかった所で、若者たちが、色々とやってペーラインにある。

これは、神戸だから出来たと思わないでほしい。

命がけでやる人が、何人かいれば、それが通じれば、協力者も集まると思うんです。

これからは、文明有利の社会から、文化有利の社会へ切り換えて行く。狩猟型の発想から耕作型の発想に、転換していくなければならないと思うんです。

ハニティニグ型の発想で行くと、非常に大臣に物事を考えがちになって、育つべきものが育たない。

町づくりには、黒川紀章先生のような大先生の、自立つ建物なんて、いるわけですよ。

地図を広げて線を引くような都市計画は、もう終わりなんですね。

これからは、手でさわったり、目で見極める型で、コツコツと町を耕やしていく時代に入った。まさに、都市計画耕作時代だと、思うわけです。

商店の立地も耕作できるという事を先程、述べました。駄菓子といふ言葉がありますが、そこだけが商業立地ですか。

人によっては、駄菓子

所ではなく、静かな所で買物をしたい。センスの良い環境の中で、おいしい物を飲みたいし、食べたい。そういう人もいる。

デパートの食堂で毎日、飯食って、そこが一番えーと思は人はいないと思うんです。

そういう環境を、こさえるのが、町の任務だと思うんです。

都市に係わる人の作法だと思うんです。

風景を壊してはいけないんです。自分の建物が、どういう建物として存在するか、という事を、いつも考えなければいけない。

パブリックとプライベートの間にあり、コモンスペースを忘れてはいけないんです。

その認識がないから、変わ建物が建ったりするわけなんです。

僕は、青山に、コロンファーストという建物を建てました。

新しい土地での住み方のモチーフを、建物で発言したりつむりなんですね。

その街区全体を茶系統でいこうという事で、新しいビルを建てる人には、何となく、下打ち合わせをして、赤茶系統で、街区が整って来たんですね。

ところが、紺色のパッケージのヨックホップというお菓子ありますか、そのヨックホップのカヤが、紺色の建物

オ1回-4

を建てやがって、目暮苦茶にしてしまったんです。1個です。たった1個です。

全く、作法がないんです。日本人は、戦後、無作法になつてます。

満員電車の中では、足踏まれても、謝りもしないし、別に謝ってほしくもなさうだし、要するに、家と会社の間では、人間として、存在してないんです。

家が良い子であれば、会社で良い子であれば、何やっても許されるみたいだ、風土が、日本の中に出て来ているんではないか。

それは、建物の外観に表われるし、景観を壊すという事になつて来る。

今日、あの運河を歩かせてもらいまして、鬼ったんですが、運河界隈という言葉を使ってみたらどうか。

運河を、石造倉庫を残すんじゃなくて、運河界隈をどういう型で残して行くか。

生きたものとして、どう保存するか。どうがに移転してしまっては、何の得にもならないわけです。

ただ、あのままでは汚ないでしょ。生活排水、生活廢棄物が、平気で流されて来るというのには、是正しなきやいけないと思うんです。

臭いから埋めろ、になつてしまふのを、恐れるわけなんですね。

道路自体を、通す事に決定

したんではあれば、問題なのは道路の有り方ですね。

道路を界隈の一環として扱えられないか。

車が、速いスピードで走られよいような道路に出まらないか。

そうする事で、積極的に保存する方法が、あるんではないか。

2年前に言ってもらえば、僕なりにグリラ岸野など、道路を避けられていましたけど。

新しいものを生み出すにはやはり、2年位、かかりますからねえ。

建物と車道と歩道のつながり具合で、良い例は、パリです。

カフェテラス。路面に張り出す方法です。ある場所に限らず容認する。そのかわり、税金を余分に納める。

カフェテラスは、法律では禁止されているんですけど。ところが、市民に歓迎している。市の側では、税金が次山、入る。商業の側では、それが儲かる。

みんなにとって良い。という事が認め合っている。

それが、パリを美しくしている。楽しくしている。

小樽には、非常に良いハスカライアンを持った倉庫群があるわけです。

老朽化している物についてどうするか。保存が出来る物についてはどうするか。その後利用、持ち主との折衝、そ

の他、色々な細かな事を、組み上げていってやれば、相当面白いものになると思うんで

す。道の問題ですが、僕はない方がええと思うんですよ。運河をきれいにして、全体を公園のようにしたら、ええと思うんです。

聞いた限りでは、道幅が先の方で狭くなっているようですから、ずっと狭い道幅で通じたらどうなんだろうという気がします。

水の問題について触れてみたいと思います。

日本の河川、湖沼、溺死の状態にあるんです。

重化学工業偏重の社会ですから、どんどん電力開拓やつて、山村の奥深くまで、道路通されています。

そして、護岸工事をやって河が死んでしまう。日本の河は、ないがしろにされて来たわけです。

僕は、フレンズオブリバーという団体を、釣り仲間と一緒にやっているんです。最初は、ゴミ拾っていたんです。

どんな人がゴミを捨てるかというと、一流銀行の宣伝に出て来るような、典型的なサラリーマン家族なんですね。

コモンセニス。この湖は共有のものなんだ。他の人が来て、焚火するかもしれない、御飯を食べるかもしれない、そういう意識が全くない。

ある川で、釣り人が、田んぼを踏みつけで行くというので、橋を作つて寄付した。

ある時、そこへ行くと、それを壊して焚火している家族がある。あんた、何しているんだですか?と言つたら、遙に何ぞあんたが怒る権利あるんですね。とにかくみんなです。

涙ぐましい程、墮落してるでしょう。共有意識といふものか。

だから、小樽運河界隈を、どう保存して行くかという場合、市民に、あるレベルまで現実のイメージを示さないといわかってくれない。

海猫屋という喫茶店がありますが、特殊な人が入るかと思われるような店じやなく、ファミリーレストランのような店を作るとか。

空き地がありますが、そこに、統合的モダン建築を建てるとか。

ペイライニに乗るかどうかという店舗がありますが、僕は、基本的に、乗ると思います。

最初に、誰かがそういう事をやつて行なければ、行政の方も動きようがないという事です。

店が満員になって、マスクも取り上げる。市民がそれ程、望んでいるのか、となれば、それを援助しよう、となれわけです。

その動きを作るために、基本的な歩道だと思うんです。

そのために、どうしたらペイするか、色々計算してやらなければいけない。

ネガティブな要因が出て来ても、どうしたら、ポジティブなものに置き換えられるのか、という事が進めなければいけない。

どうしたら儲かるかという事は、何を纏していくかという事です。いつも、それを確認しながら、やるという事が大切だと思うんです。

もう、今や小樽は、運河を残さざるを得ないとこうまで来ていると思っています。

今度、小樽へ行くんだというと、ああ運河ね、と来る。

たとえば、TVで小樽が出て来るとすると、最初の下やはり運河ですよ。運河以外に最初に写すべきもの、ありますか?

あれがなくなったら、NHKのティレワター困りますよ。最初にどこを写したら良いかと。

それから、旅行者の寄り付き所ですね。外来者が、気軽にに行ける場所が必要だと思っています。外来者に対して、寛容な町っていうのは、鹿川町の典型なんです。

で、ちょっと歩いて見ついたんですが、ゴミが一杯、落ちていてるんですね。汚ないと言つて立っているだけじゃなくて、ゴミを拾ってやろうという、積極的な動きが、ほしいと思っていますね。

運河界隈の保存、育成という意味を考えてみますと、線ではなく、面じゃないといがんと思うんですけど。一部残っていて、色色な要素が面として、複合的に組み合わさってなきゃいけない。

ギャラリーがあつたリ、レストラン、アティックがあつたリ、色々なタイプの喫茶店がある。

観光客が行つても、地元の人が行つても面白い。

そういう要素を非常に沢山持つていると思っています。

で、今のところ、充分に再利用の力で単位で残っていると思います。

そして、充分にペイラインに乗ると見ました。

大切なのは、博物館的保存ではなく、ポジティブ保存です。市民が、生き生きと、そこを楽しんで、充分に愛する事ができる界限を作る事が大切なんです。

そのためには、道路があつてはならないから、反対すべきだし、道路の在り方について徹底的に検討すべきだと思いません。

休憩が終わって、

— 山口氏

運河の場合、6車線の道路で、主要幹線道路なわけです。

すると、石造倉庫の再利用をして、商業地域にして行こ

うとしても、6車線の道路が通るんじゃ、せいかい、工場くらいしかないと、考える傾向が強いんです。

車がびくんびくん走るような地域の中で、再利用を許しても、あくまでもいいんです。

たとえば、自分がます、やるという事になつても、後から続いて来る人がいるのが心配なんですよ。

— 沢野氏

道路がどういう形でつくのか、絵としてわがうなじんで判断できないんですが。

後に続く人がいるかないかという問題ですが、それは車両次第だと思っています。

ただ、闇雲にやつたらええという事じゃなくて、慎重に出来なきゃいけん。

僕は、裏のことが、よくわかる人間ではありませんが、表と裏とあると思うんです。表にFDTとFDTとFDTと二人で、右往左往しながら、最終的に良いものをすれば良いと思うんです。

方法と目的を分けて考えた方が良いんです。

沢野商品研究所といらのは割と物を作つて来ました。それは、営業的に頭の回る人と非常に同じ向きに突っ走る人がうまく、バランスを取り合えてからです。

そういう体制を作らなきゃいけんのです。

で、状況を詳しく説明して

便がないとわからんの? すが高速公路になると、どういう形で残るのかを、よく検討して、保存を考えたらええと思つんですね。

たた、車なんか、町の中をゆっくり走らせれば良いんです。

小樽市内に入つても、そんなに連く走りたいのか、そこでの価値判断なんですか。

どうしても、車がバスローダー風にしなきゃならないような道路にしちゃえは良い。

そして路面駐車を可能にする。

そうすると、道路と歩道と店との取り付け関係が、非常にスムーズになります。

世界中にある良い例を見てほしいんです。

アメリカにも、ヨーロッパにも、沢山、モデルケースがあります。

人は、必ずしも、まっすぐな道を快適とは考えません。

道の演出というのが色々あります。

車は、市街地に入つたら、ゆっくり走らせれば良いんです。

— 山口氏

これは、片側3車線、もう片側3車線、中央分離帯のあるまっすぐの道路に決定しているんです。

— 沢野氏

それは、基本的に非常に

まずは「プラン」ですね。

—山口氏

山側に道路をといふ代替案、を提案して来たんですが、運河の部分に道路は必要ないといふ事で、運動会を開催して来たんです。ですから、道路をこういう方に、といふ提案はしてないんです。

ただ、行政の方も、運河講座にいらして、岡並木先生の居住される空間としての道の考え方を、聞いてご存知の人はいるんですか。

—猪野氏

イメージとして、それはなかなかたんじようね。

ボテンチャルを引き上げて行く道作りがあるんですか。ボテンチャルのない開発は、どの町を、悪くするんです。

日本の道路を作った人たちの頭の中から、気が、すっと抜けていよいよですね。

建築家は、みんな自分のモニュメントを建てたがる。名前は、それを作品という言葉を使う。町に対する、昌といたと思ふんですか。町に自分の作品なんか、建ててもらわんともええですか。

つまり、快適な、居心地の良い町を作ってもらえはえんじや。

あの町、俺が作ったんだ。非常にそういう人が多い。そして、強制に派手な建物を建ててる。

道路にしても、原始時代に森をまっすぐに突き切って作つたような道路で、平気で作る神经、どつが病んでると見えんのです。

まさに、狩猟型飛想なんですね。

ハニティンク」というのは、沢山、人がいるから、店出をう。

どうじやなくて、人を呼ぶには、どういう種を植えたら良いか、とこうとこうから、じわじわやる。

エネルギーの問題にしても、耕作型エネルギーに転換しなければちがん。その代表選手は、太陽です。これ程、有効、効率的なエネルギーはないんですよ。

ところが、国は、原子力発電だけ作りたがる。それなぜか。太陽エネルギーにはメーターが取り付けられないからです。

行政がエネルギーもコントロールできまい。そういう悲劇感があらがら、必ずしも、原子力発電所、作ってあるわけです。

ところが、あれは、100のエネルギー作り出すのに、350のエネルギーを投入しにやいかん。そんな馬鹿げた話、ないわけですか。

ところが、それを建設する事によって、ユニクリートが売れます。人間の労働機会が拡大します。だから、地方政府体は、それが潤つたように

見えるわけです。

本当に、無駄な事ばかり、やってるんですね。

道路にしても、そうです。まっすぐ道路作るから、スピード出す。それで、ハトカーが出て、ねずみ取りやる。ドライバーは、ねずみ取り防止のレーダー付ける。

そんな事ばかり、やってるわけです。

ここでは、飛想切り換えて、みんな、のんびりやつたらええんですわ。

ところが、ハニティンク型飛想、情性ついて走りますからね。それか、小樽まで、来てしまってるわけですね。

ただ、僕が言いたいのは、あきらめない事です。道路に反対するなら、最後まで反対する。

そのうちに、段々と、道路と歩道の関係はこういう風にとか、街並みはこうして、道路は直く走れないように、色々と向かっていく。

やっぱり、僕は、運河にこだわらずに、運河のある生き生きとした界隈を残す、といふ事を最終目標にしたら良いと思うんです。

運河が、どの位のスペースを残るのか。どの位、きれいになれるのか。道路がどう付くのか。

人間と建物と運河と道が織り成す、ひとつ的世界を、イメージとして、じこまり、描いて行かなければならぬ。

ひとつのモデルケースを示して、積極的にやって行く努力が必要だと思っています。僕は、用人棒ですから、地元の人がやってくれないと、出来がないわけです。

で、大事なのは、臨機応変に対応する事。左から押されたら、右の方に、アゴを出すとかね。簡単には、つぶされないよう、ソフトな運動ををしていかにゃいけん。ハードで考へても、うまい事、いかんのぞみます。

ついでに、三星壇の反対抗争の話をします。僕は、用人棒ですから、空港が出来てしまつた、じゃどうしようかとい立場でやりました。

地元の人、すごく頑張りましたから、A、B、Cの滑走路のうち、Bは危いし、Cは決定的に出来ない。

どこかで手打ちをしないと、空港公園も運輸省も、面倒絶くすれというところまで来ています。

地元の農民、本当に頑張りました。

それと、農民の「えんた」気持ちを復元するために、元農場にて連中がいます。

花の企画社といふんです。花を買って、都会へ直送するんです。プラスターをリースして、カセットを入れ換えるんです。

花を育り手すと、どんどん大地から土が消えて行く。それを防ぐために、土を必ず回

収する。非常にあたっていいます。

今では、花の連中、すっかり地元民です。誰かが、地元民になれば良いわけです。

—下沢氏

守る会の方、実に一生懸命運動をやっておられる。しかし、埋められるものは、埋められるものとして、考えても良いんじゃないかと思うわけです。

それと、今の行政が、強引にやった事が、いけなかったと、市民全体にわかるような事を徐々に押して行く。

小樽の人たち、あるいは良いとか、悪いとか、元に戻すべきだという運動もそのうち、起つて来ると思うんです。

そういう型で進るべきだと考えます。

—浜野氏

1回、道路が出来ても、車線にして曲げらやうとか出来ますしね。

道を作る時、景観を壊してはいけないという見方を作らなければなりません。

景観というのは、町の、通行人の安全性です。

市街地を通過させるわけですから、基準がくずれたら、批判されますよ。1950年代とは違うんですから、非常に批判されます。

—下沢氏

時代が変わっても、役人というのには、面子にかけて、押し通そうとする。実は馬鹿げた事をしながら、本人たちはそれに気づいていない。

だから、運河の方々は、非常に苦労なってる。

—浜野氏

あざわしいですね。

—山口氏

運動が始ま、同時に、全面埋立の都市計画決定がなされました。それを変更させたわけです。

散策路を付けました。環境への配慮は致しました。と言ひながら、道路自体は、6車線とのままであります。

行政のオも、歴史的環境だと認めてある。商人たちも、価値があると認め始めた。

運河に近い所で、新しい形で商店をやってみようという人も出でてます。

そういう可能性を持つてると思っています。僕らは、あきらめたりけりはありませんし、何とかなると思ってます。

一回道路が出来てしまったら、もう一度、掘り返すなんて事は、小樽の体質から考えて無理な事です。気安くにすぎません。

たとえば、山回りの道があれば良いんじゃないか、と言うと、それは夢みたいな話だ

と言つておちながら、現実には、道は小樽仁木線というのが、国道に昇格するんです。2車線の道路ですが、山回りバイパスとしての立派な用が出て来るんです。

それともう1本、広域農道としてあちこち道路を、バイパス的な効果を持たせて作ろう、という計画も決定したわけです。

そういう、色々な新しい要素が出て来る。

ところで、浜野さんが、おしゃったように、僕らが、当事者になって、反対すれば、極端が変わると思うんです。

そういう方向で、最後まで残すためにやらなきゃ、絶対にいがんのです。

—浜野氏

詳しい状況がよくわからないうえ、こうなったらこうというお話ををして来ました。

言いたい事は、どんな状態になってしまっても、目的と方法を向違わないでやってほしいという事です。

自分たちは、こういう町がほしい、それを実現させて行く事が基本にあるわけですから、道路が出来たから、もうあがんでは駄目なんですね。

成田空港が、近隣住民の反対によつて、滑走路が出来なくなつたという事があるんですね。

こうなつたら、何でもがんばり、ストローダウンさせたら

ええんですね。

地方自治体が、大きな開発によつて、潤つて赤字を解消するなんてのは、もう時代遅れなんですね。

陳腐な癡想ですね。

公共投資という名の下で、意味のない砂防ダム、道路、河山あります。

たとえば、温泉地。ひばりに温泉なんか、結構、税金納めてる。納めてるんだから、道路を立派にしろ、といふ事で、道路作つて、立派な建物を建ててる。すると、逆に人が全然来なくなる。そういう事が沢山あるんですね。

結局は、住民、一人一人のライフスタイルの問題にかかるで来ません。

自分たちの生き方の問題なんですね。

我々は、贅沢になつてます。これだけの国で、これだけ失業者がいるのは、めずらしくないです。そのため、道路作る、タム作るといって、公共投資をして、労働の機会を拡大する。

そういう考え方ではなくて、農耕の癡想に切り換えるべきかん。

都会の人間が、トマトやピーマン、1年中、食べ正がるから、ビニールハウスで栽培する。すると害虫が出る。だから、農業かける。

都会の人間が、1年中ほしがるのをやめない事には、ビニールハウスはよくならない

ですよ。

プラス、プラスの方向に走るから、被害が出て来る。軽根を切り換えれば、結構、幸せにやつて行けるんですね。

一生懸命走ってるのに、急に止まつたら死ぬんじやないか、と思って前へ前へと走るんじます。よを見したり、わき見したり、ちょっとぐうたらして、運営した方が良いんじます。

小樽でも、駅前に長崎屋さんじ、走ってますね。あんな駅前、ええのかな。

小樽の人口、何ぞ増やさないかんのやうか。増えなくて見えじやないか。そういう考え方もあると鬼うんじます。

小さなコミュニティだけじゃなくていいいけば、それで良いじやないか。

生き方を変えるという事。幸せって感じるベルを違うところに持つてたまる。

そうしないと、日本は、やって行けないじます。

問題は、地球上にあって、いかに被害な川、生物になれるかという事です。

それが、今のテーマです。そうしないと、人類の滅亡へ向かってしまう。

僕は、今度、アラスカへ釣りに行くんじます。

川をびっしり埋めてる鮭を見ると、自然とは、素晴らしいなあと思ひますよ。生産力がありりますがうね。

日本の川に昔のように、鮭

が上げたら、工場を何軒減らせるか。自動車を何台作らずに済みか。考えますよ。

今、日本は、川を殺して、車を作って輸出してる。そして鮭を買ってる。何で馬鹿な事を繰り返すのか。そんじますよ。

本当に、きれいな自然を見ないとわからないかもしちゃせんがね。

まあ、鮭とか鳥とか、花、緑なんか、昔の北海道には、アラスカと同じ程度ある丘と鬼うんじます。

内地の人間から見れば、北海道の人たちには、自然の恩恵を受けている。

だからが、荒廃が激し過ぎると思うんじます。まだまだ、北海道には自然があるんだという認識なんじょ。

それと、一般の人が、生態系について無知なんじゅう、変な事に喜んでるだけです。

たとえば、蟹が飛ぶようになつた、水がきれいになり、たと喜んだりする。

数は増えにけり、小さくなっている。されば、種類が違うんじます。

川の汚染が進行しにけり、別の種類の蟹が発生しにれどす。

それを地元の人は、源氏蟹の姿が消えて、再び出て来にもんだから、水がきれいになつたと思いつぶつてあります。

もっと勉強せんとあがんと思うんですけど。

自然が先生であつた頃というのがあつたはずなんじますがね。

自然を先生として、自然の成り行きを大切にしなければいけない。

自然の成り行きを、町の中など、どういう風に作り出すかという事なんじます。

今の運河問題にしても、道路、道路と言っている人たちが、自然の成り行きとして、曲げなければならぬまい、やめた方が良さそうだ、という事にあつたら、そういう成り行きに正直にするべきだと思うんじます。

何かを保存する、再生するという場合、知恵といふものを大切にすべきだと見うんじます。

知恵といふのは、自然から学んだものなんじます。

知識といふのは、本から得るものじます。

たとえば、アラスカじね、川を見た時、瀧り切れの川かどうか、判断しなきやべらない。その時、ぱっと判断出来ないと、死んでしまうんじます。

熊を見て、襲って来る熊がどうか、判断しなきやべらない。さなかくわげます。さなかくわげます。釣り出まんわげます。

自然の中にいる熊といふのは、人間の姿を見ただけで逃げて行きます。

ヒコが、国立公園の熊といふのは、逃げないんじます。釣り人のところへ来る。鮭を取りに来る。誰かが、餌を、やつたんじます。

人が、自然を改ざんしてしまふと、そういう熊が出現して来るわけじます。

だから、野生のままじ、おいておいた方が良い。

日本には、本当の意味での大自然、なくなつてますね。

ウイザーネス。原野といふか、荒野といふか、人がとても踏み込めないような自然ですね。それを残さなければならぬ。

運河を残す事も、大事なんじすけど、日本のビニール、大自然、残してみきたいじますね。

北海道に1本ぐらい完璧な川を残してみきたいじますね。鮭が音附して、大きくなり、海に帰り、4年間して又、戻ってきてという風に繰り返せます。

そういう川が1本くらいないと、子供に証明できないわけじます。生命の大しさ。自然の素晴らしさ。自然との一体化。

バードサンクチュアリーといふのをやってますか、鳥が棲むのじは、割と簡単なんじますよ。魚は、あずかしいんじますね。

川といふのは、幾つかの市とか、県とかにまたがりますし、漁協がからんだりじ、む

すかしいんです。

しかし、サーモンサニフチニアリーといふのもやらないと、自然保護にならぬと思うわけです。

それが出来るのは、もう、北浦通りにしか、ないと思ひますね。

そして、良い町並みを作りたい事は、自然を残すという事と、共通していると思ひます。

町並みを作つて行く。生活を作つて行く。新しい生活の在り方を提案する事につながると思ひます。

パンクーバーでのガスタンクの保存の時、色々と問題があつた。でも、踏み切つて、結局、素晴らしい成功を見たわけです。

ミアトルでは、倉庫が、ヨッピングセンターに、改修された。あいは、スペゲティ屋さんにちつた。

サユフラ・ラスユでは、工場が、ショッピングセンターになった。デュコレート工場が、ショッピングセンターになった。

ビニも、非常に良い環境になつてます。

世界中、あちこちに、良い例があります。

道路沿つて、今からでも、スローダウンさせる方法、あると思ひます。

残らざる、代表があると思うんです。どれも違ひが、住民の実感

として、どういう戦略を持つのか。そういうところ、考えてほしいですね。

今日は、暗示といふか、ヒントだけ言ったわけですが、戦略が、かたまつたら、又、用人轍として、呼んで頂けたらと思います。

今日は、これで終わります。

第2回 土地買上げ運動の展開

—知床の環境保護に学ぶ—

昭和56年5月29日
小樽市労働会館

講師 高橋 春雄氏

講師紹介が終つて、

——ただ今、紹介にあづかりました高橋でござります。

これから、与えられました時間、我ヶ斜里町が行なつておりますところの知床100年運動につきまして、お話を申し上げたい、と考えております。

ものを嘆べて生活をしているわけではないですから、聞きやすい点があろうかと思ひますが、がまんをして頃だいお聞き取りを願いたい、と思うわけでござります。

まず、若干、我ヶ町の生い立ちなどの紹介をしながら順次、その100年運動のお話しに入つて参りたいと思うわけでござります。

斜里町といふ所は北海道の最東北端に位置しております、非常に早くから開けております。

開基100年といふのが、昭和53年に終つております。

人類の最初の棲息といふのは相当古い、約1万年前、石とか鎌、そういう風な関係で相当な昔から開かれどるちう経過が分るわけです。

で、斜里町方面に和人が入ったという記録は、寛永12年(1635)ですから、約346年前にするでに和人が足跡を残しているという経過があるわけです。

これは、松前藩の家臣が知床半島を巡回し斜里に来た、と記録をされております。

寛政3年(1791)に斜里場所が設けられ、正式に漁場が開かれた、となつております。

現在も漁業が非常に盛んなわけですけれども、斜里といふものが何から始まったかといふと、基礎産業は漁業から始まった、といわれております。

明治13年に戸長役場が置かれたわけです。

で、斜里町の歴史、開基といふものは明治13年から計算がされておるわけです。

今年で丁度103年という事になるわけでござります。

現在の斜里町の人口は非常に少なくて1万5600人でございます。

面積が742km²でございまして、農業の耕地面積が約1万ha程度ございます。

主に馬鈴薯、ビート、麦、

・KFA…神戸ファッシュ・ショッピングセンター

小麦などを耕作をしているわけでございます。

漁業につきましては、知床半島の海岸線が100kmございまして、そこで定置網漁業をしているわけです。

まあ大体、年間240万尾の鮭がとれる。

鮭鱈が主体になっておりまづから、どうしてそここの養殖事業に力を入れなきゃならんという事で、1年間に才ホーツク沿岸で約1億2千萬粒の卵をふ化して放流するわけですが、その50%を斜里町が担当しております。

4年ないし5年たつますと放流した鮭鱈が生まれた川に帰ってくる、この習性を利用して、漁業を営なんでおるわけでございます。

知床連山からオホーツク海に流れている川は、大小あわせて37条あるんですが、このうち6本程大きな川がございまして、この川から6千萬尾の稚魚を放流しております。

鮭鱈の遡上する河川というのは、非常にきれいでなければ遡上しないといわれております。

従って、斜里町にある川というのは非常にきれいな川でございます。

中でも斜里川といふのは北海道七河川のうちで最もきれいな川である、といわれております。

人家もない山の中の原始の川でBOD1.0程度というの

普通でありますけれども、斜里川には、ホクレンの精糖工場、或いは合理化澱粉工場などの工場排水、或いは都市排水などが流れ込んでおりますけれども、それでもBODが高い時で1.8、通常1.2程度ですから、非常にきれいな川なわけです。

鮭鱈が遡上するためには、という事で、いきおい、自然というものを大事にしなければならない。

川を汚すという事は、我々の生活を壊滅させる、と考えておるわけで、まあ、力を入れておるわけでございます。

斜里町の殆どを占める知床半島でござります、大部分が国有林ですが、昭和39年に国立公園の指定、その当時はこれが我が国で最後だらうといわれた指定を受けております。

知床半島は昭和30年代迄は世に知られていなかったわけです。

90年代の半ばに、戸川幸夫さんという動物作家が「オホーツクの老人」という本を書いて、これが森繁久松さんのお演で「オホーツクに生きる者」という題で映画化されました。

33年には知床半島の学術調査が行なわれて、全たく守をつけられていないう自然というのは、もう日本には知床しかないだろう、と評価をされたわけでございます。

で、次第に、そうか、北海

道の知床はそんなに自然が保たれておって、人跡未踏であるか、と中央でも評価をされる様になったわけでござります。

36年頃から離島半島ブームが来る様になりまして、政府も知床に注目していたわけです。

全国的な視野から、新しい国立公園を選定しようとしました、知床が候補地に入ったわけです。

で、我々は何の運動も起さなかつたのですが、国立公園に指定されたわけです。

これは非常に珍しい、国立公園になり方が非常に珍しいと我々は考えていました。

全国で22番目の国立公園になりますが、当時はこれが最後だといわれました。

後に、沖縄が復帰しまして西表国立公園というのが出来たわけです。

復帰前からやりとりをしておりましたが、沖縄の竹富町と斜里町は姉妹提携をしております。

どういう事かといいますと知床には尾白ワシという、尾の白いワシが非常に多くて、西表国立公園には冠ワシという頭の白いワシがおるわけです。

で、まあ、頭と尾を結ぶ縁結び。

知床から西表までは丁度、3000km離れていますが、日本の最東北端の斜里町と、最西

南端の竹富町、これぞ何かの縁ではないかという事で昭和48年に姉妹提携を結んでおります。

そんな経緯もあって、知床は国立公園になりました、今あの知床横断道路というものが新聞などでは、自然を破壊しているんではないか、と取沙汰されております。

何故あの知床横断道路をつくったかといいますと、昭和34年に知床半島をはさんで反対側の羅臼町と斜里町とで、やないかという事になりまして経済交流をするにはどうぞ道路が必要なので、道路を開削して欲しい、と国に陳情をしたわけです。

38年にこれが認められまして、知床の地下資源、森林資源、それから町の産業経済の交流を図る、というそっから開発の目的をもって着工されました。

翌39年には国立公園になつたのですが、当時は現在ほど環境問題については厳しくながったので、工事は大体順調に進んで参りました。

昭和46年に国立公園行政が厚生省から環境庁に移ったとたんに厳しくなったわけでございます。

従来は道路をつける場合、必要でない土砂は、ブルドーザーでどんどん谷底へ落とした。木は切り落し。

そういう事ですから、道路

オ2回ー4

延長は比較的のびる。

けれど、環境庁が出来てからは、そういう事は一切まかりならん。

いらない土砂は全部運搬して支障のない所へ捨てなきゃいけない。

木は最小限度しか切ってはならない。

そんな事で、両町の道路があと6kmでドッキングする段階になりましたから9年、僅か6kmに9年かかっておりま

す。昭和55年、去年の9月25日に、80億円という巨費を投じて完成したわけです。

まあそういう経過でして、長い間あの道路の完成を待つといったわけです。

開通してみたら、僅か1ヶ月の間に20万人の人があの峠を訪ねました。

このほとんどがマイカーですから、1日に6千台から8千台の車が入ってくるという事で、車公害にあって、当初の目論見とは違って、大変な後始末をしなければならんという結果を招いているわけです。

市街部では交通渋滞が起きてますし、環境破壊、つまり高山植物の盗採とかの対策、それからゴミですね、車から捨てられるゴミをどの様にするかという事、あの道路造ったおかげで地元としては、また大変な後始末をしなきゃならん、という事です。

若干、横道にそれましたけれども、その様にですね、一度破壊した自然を元に戻すという事になりますと、非常な大変な作業であるという事が身にしみておるわけでござります。

知床半島の自然生態系がそのまま保護されてる、というのに非常に珍しいわけです。

非常に多くの原生の植物がある。

野生動物も然りです。特に、尾白ワシ、それからヒグマが多いようです。

北海道全体に棲息しているヒグマのものが知床におるんではないかといわれています。

では北陸道全体で、何頭のヒグマがいるかっていうと、ヒグマの国勢調査なんてやった事がないわけで、数字的にはちょっと分らん、という事ですがね。

とにかくヒグマは多い。観光客がヒグマに遭ったという情報がたくさん入っています。

知床のヒグマは人にあまり接していないために、人間に襲いかかったという事は、まず今迄ないわけです。

然し、相手は猛獣ですからやはり、観光客には、ヒグマを見たら逃げなさい、と指導をしておるわけです。

が、どうも内地の人は、北海道のヒグマの恐しさを知らないようで、豚か何かのつもりで傍によっていくという事が

多いわけなんです。

そんな様な事なんですが、大切な国立公園を斜里町がしまもっておるわけでござりますから、斜里町における自然保護対策というものが、行政の一つの柱となっていきます。

従って、町村としては全国でも最初の自然保護条例を設けているわけです。

この様に積極的な自然保護政策の中から、現在行なっているところの、知床100km運動というものが考案出されたわけでござります。

知床国立公園内の岩尾別地区という所なわけですが、何故こうした運動を行なわなければならなかつたか、その経過を申し上げてまいりたいと思います。

戦後、日本の食糧事情というものは非常に悪かった。

戦争に敗けて、海外に行つとった日本人が皆、この四つの島に引揚げて來た。

それでなくとも永い間、戦争をやっておったので食糧事情が悪かったですから、多くの方が帰ってきて、ますます食糧事情が良くない。

従って、どんな所で農地にして、食糧の増産を圖らなければならない、という時代だったわけです。

で、斜里町にも、大型な開拓パイルット計画が3ヶ所、あったわけです。

岩尾別地区に10haという開拓計画が樹立されまして、

宮城県の次、三男を入植者として受け入れをしたわけです。この地区は前にも開墾したことがあって、バッタの襲撃があって離農したり、2度、開拓に失敗していまして、これが3度目の正直で成功するかと思ってましたら、これも失敗したわけです。

宮城県から60戸ほど入ったわけです。

当時の状況からしますと、原生木が生えております、それを切り倒して、根っこを抜いて、それを燃やして、それから開畑をして、作物をまくという作業なわけです。

内地で2反から3反の水田をやっとした人に、5町歩からの土地を開墾せいといって、これはビックリするわけで、開墾がなかなか進まない。

住宅はワラぶきですし、電気はない。道路もない。

水は川水を汲んで使う。食糧増産に来た筈の人が、食糧の配給を貰わなければ生活できない。

そんな状態がずっと続いたわけです。

作物が出来ても、50km離れた斜里町まで持つてこなければ換金できない。

そんな事で、採算がとれないと。

離農せずに残った農家が20戸ございましたが、昭和41年に斜里町が、斜里市街に住宅を建てて、全戸を移動させたわけです。

そして45、46年頃になりますと、例の日本列島改造という言葉が出て参りました。

土地ブームが起きて、不動産会社がかなり暴利を貪った時代です。

開拓者の人達は、土地は現地に残して、生活は斜里市街でしていく、もう百姓をやる気はないもんですから、非常に高値で土地が売れる、いい時代がきたもんだ、という事で、どんどん土地を処分してしまった。

斜里町としては、国立公園内でもあるし、ゴルフ場なりドライブインなりを計画でもされたら大変だ、という事で土地を売らないように指導したわけです。

ところが指導を守ったのは8人、120ha。

330haほどはすでに人手にわたって了ったわけです。

そうしているうちに49年のオイルショックが来て、50年になりますと土地の売買というものがピタッと止んで了った。

指導を守って売らずにあつた120haも当然の事に、売れなくなってしまった。

そこでその8名の方々は、我々は土地を売らないで持っていたいが、生活も楽でないし、土地を換金したい、我々が売りたい時に売らせながらたのは斜里町なんだから、斜里町これを買ってくれ、そういう申し出があった。

町としても責任もありますし、また、オ三者に売られて困る、何とかしなきゃならんという事で、講会を含めまして、どの方法をこうじて買い上げをしようか、となつたわけでございます。

国立公園内ですかう国に買い上げて貰おう、と、国に要請したんですが、色々あって國は買い上げてくれない。

斜里町自身も財政的に樂な町ではない。

何とかならないものかと考えていたんですけど、たまたま、新聞に、英國のナショナルトラストの記事が出たわけです。

それと、当時、成田で空港建設反対運動のために一坪地主運動というのをやっとったですね。

そこで考えたのが100m²運動なわけです。

100m²を本当に買って貰う、というのが最初の案です。

ところが、100m²ずつに区画割りをする、それぞれの所有権移動をする、これは大変な作業なわけです。

そこでこれは、ヨーフ醸出をして頂く、100m²8千円を醸出して頂だいて、所有権はあくまで斜里町のものにしておく、そして土地を買い上げて、木のない所には木を植えて自然の姿に戻そう、この方がいいんではないかという事になりました。

昭和52年の2月に記者会見

で発表をしてしまして、これが翌日に記事となって全国に流れたわけです。

これがキッカケで、町役場に入っていた7本の外線電話が、そうとにかく鳴りっぱなしになりまして、電話が使えないと状態が2ヶ月位、続いたわけです。

中で2割位は、何だ、俺の物にならんのなら止めたよ、という方がありました、ほんとは、知床を乱開發から守る、非常に良い企画だ、どんどん応募をしてきたわけでございます。

こうして始まった100m²運動ですが、当初、これを考えた時には、上手くいくものどうか、早くいえば、そんな物好きがおるだろうか、という考えで我々はおったんです。

当時の町長が考えたことですから、私、助役の立場として、こんな馬鹿げた事は一寸できないよ、と反対意見を出したこともあったわけです。

ha8千円ですから、120haで9千6百万円が必要になるわけですね。

いったい、いつになったら9千6百万になるか、おそらく7年から8年、10年くらいかかるんじゃないか、と。

それと、この8千円のお金というのは、土地を買ってですね、木を植えて、それから3年間くらい、ぶ質管理をしなきゃならんですね、その費用なんです。

そうすると、それに従事する職員の給料、宣伝をする費用、事務費、こういう費用をいったい誰が出すんだ、というと、これは全部、斜里町の町民が納めた税金で出すわけですね。

今までに、すでに3千万ほど出しております。

そうすると、長年かかると、年を経て、そういう費用を使つたら、町がどうするか金借りてきて、いっぺんに買った方がいいんじゃないか、私はそういう考え方を持ったわけです。

しかし、町長が、これは単に金を出して貰えればいいという事でない、これはやはり、全国の国民に、国立公園というものは国民の財産なのだから、自分の財産は自分で守らんとならん、そういう意味からいっても、みなさん、一つ関心を持ってそろおう、そういう事が一番大事だ、という事で記者会見になったわけです。

そんな事で、この100m²運動が始まったわけです。

全国的に非常に関心が寄せられて、どんどん照会がくるわけですが、宣伝のために、たとえば新聞に載せて貰うといった事に、我々は一銭も金を使つてないわけです。

マスコミがですね、無償で協力をしてくれる、ラジオ然り、新聞然り、TV然り、こ

第2回-8

ういう所が非常に協力してくれて、全国に宣伝が行き渡った。これが非常に有難たかったです。

特に朝日新聞の天声人語、昭和54年11月4日の天声人語が、国民の目に一番とまったものです。

全国からの応募がグーッと
増えたわけです。また、電話
が鳴りっぱなしになつた。
追い打ちをかけるように、

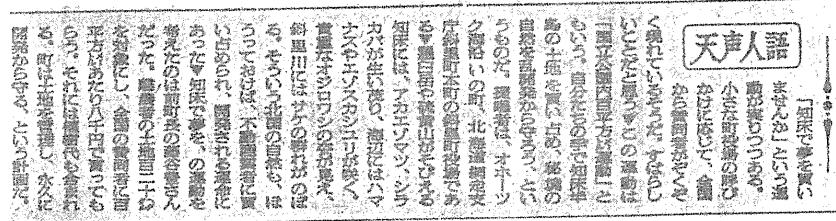
54年12月28日にも天声人譜で
とり上げて頂いた。

で、55年に至りまして10月に、120ha分が達成をしましたといふ事で、天声人語さんにお礼の手紙をさしあげました。

そうしたら10月30日に、また載せてくれたわけです。

この運動が成功したのも天
声人語さんのおかげだ、と我
我、感謝をしているわけでござ
ります。

昭和54年11月4日付



昭和55年10月30日付



ま、こういう事で才1次分
120haの買い上げは終ったわけ
ですが、才2次分として330ha
"ダメ"いきます。

このうち48haは、すでに買
い上げが終りまして、残りが
282ha、これがうやつていかな
きをなうんわけです。

4月30日現在で、151241人
金額にして1億1581万6千円
のお金が集まっております。
買い上げた土地が168haで、
75haは植林が終っています。

そして、毎年9月の20日には、100㍍運動に参加している方々の手で直接、植林をするという行事を行なっておりま

参の貸てきにを
が場を、いっア床りやつ
の方役を、いにを
の町んざれ、一緒知り
ど里さんて、お年を毎年やつ
ほ斜なつて、みへし、ついて、事を
百人て、た地をつづつて、事
もままで植林どて貰うといふ
2し、現林どて
昨され集ま
加前切
そでバス
アジ鍋な
一晚泊
頂だく、
てるわけです。

残された282haの買い上げ、
これが大変なわけです。

不動産業者の手から、オミ
者の手に渡って了っているわ
けです。

では8万円業者あたり8万円で買つて、8万円ですね。あたり8万円業者では8万円で買つて、8万円ですね。

聞いてみると、別荘地になるとか、ゴルフ場にいいとか、持つてると値上がりするとか、色々な宣伝にのせられて買つ

てるわけです。

ド入った熊が立てて立たないでがて、そこ金建しです。そして壯なです。

そんな土地を持ったっても
しょうがないんで、ぜひ100m²
運動に協力して下さい、とお
願いをしています。

それからう、この貴い土の上に立た
土地をですね、公益信託、信
託法という法律があるわけでは
すが、町の条例で守るよりは出
国の法律で守ったほうが確
実な安心でありますから公
益信託化を図ろう、と手
続きを進めております。
自治省と折衝を進めており
ます。

私は日本の海も山もどんど
んと破壊をされてる、これだけはいえる。

従つて、一つには原生の自然は厳しく保護する。

オ2回-10

二つには、破壊した自然は原生に復元する。

三つには、町の中に入工の自然を沢山つくる。

私はこの三つをスローガンにしているわけです。

で、今日ここに持って参りましたが、100m²運動に参加された方にこういう登録証書を差し上げております。

100m²を8千円で、何月何日と日付をいれて、これをひとつ、こう額に入れて飾って頂だくと、心の地主、知床半島に土地を持つとるんだよと、どこかは知らんけど100m²の土地を持つとるんだよ、という証書ですね。

それとこのバッジですね。

100m²のちょうど百石分の1の大きさ、1m²のバッジですが、これをつけて知床にこられた人は、パンフレットはただで貰えるし、旅館に泊まれば精神的なサービスが受けられる、という事でござります。

みなさんの運河を守ることに参考になったがどうか分りませんが、我々がやっておりました知床100m²運動の一端を申し上げて、何かの糧にできなれば幸いであると考えておるわけでございます。

どうも有難うございました。

10分間休憩の後

——石塚氏

大変興味深く伺いました。それにしても、日本で初めて

の土地買取り運動を自治体がなさるということで、色々と迷われたり、もし失敗した時はなど、お考えもあったと思うんです。

離農者が土地を廃分したいというのも、20年、30年先でいいから買い取って欲しいというのでは多分ないでしよう。

全部を運動で買えない場合でも、その土地を買うためのお金を自治体で用意できる可能性がバックにあったのではないかと思うんです。

それがオーネントで、もう一つは、実施にこぎつける迄には色々な手続きが必要だったと思いませんが、どの位の期間をかけられて、そこでどんな事が検討課題とされて、いたか、といった事をお話し願えればと思います。

——高橋氏

はい。この運動が成功するかしないかということは、ご質問ありましたように、非常に心配をしました。

場合によっては町の金で買ひ上げしなくてはならん、という腹は持ったわけです。

開拓者は、何年かがってもよろしいという話ではなく、即座に買ひ上げてくれと、運動のほうは9千6百石の金が集まる迄に7年、8年、或いは10年はかかるだろうという覚悟ですから、資金手当というものを事前にしなきゃならんのが当然なわけですね。

土地代と植林してあった所

の木の代金、合計5千円を用意しました。

町の一般財源からは、どこの市町村でも同じだと思いますが、出せる筈がない、従ってこれは借金をしました。

北海道が地方公共団体の事業を振興するために、振興基金というのがあるわけです。

この振興基金というのには、土地を買うというのにはなかなか貸さないようになってはいるんですが、しかしその取扱い要項の中に「その他、知事が必要と認めた場合」には貸す事になってんです。

で、たまたま知事が斜里町へ来られたものですから、知事の車に乗り込んで「その他知事が必要だと認めた場合には出せるようになつてゐるんから、その他知事が必要だと認めて下さい」とお願いしました、よし判った、と。

で事業費の8割、4千万を借りて、残りの1千円は町で用意をして、契約をして即座に払ったという事です。

この4千万は5分5厘の利子で7年で返すわけです。

もうこれで9千6百石集まりましたから返せる、だから返しますよと云つたら、繰り上げ償還は困ると、一辺に返して貰つたら困るというんですね。

運動からお金は戻って来るけど返す先がない。

戻してくれたお金でもって先程説明するのを忘れたんで

すが、100m²会館というものを作るんです。

で、7年にわたる返済は町費で支払っていくことにしました。

お金はそういう用意をしたわけです。

それから、実施する迄の期間ですね、これはそんなに長い期間ではないんです。

開拓者からの請願が議会に上ってきたの11月で、12月の議会で買うべきであると決論が出た。

議会が採決したら理事者は忠実にそれを守らなければならんという義務があります。

それから予算編成をして新聞記者発表が翌年2月ですかう、まったく短かい期間でこうした事を決定したわけです。

で、こういうものは長く検討するの結構ですが、検討という言葉は前向きも後ろ向きもあります。

役人が非常に良く使う言葉なんです、検討という言葉はやらないのも検討、やるのも検討と。

あまり期間をおさますとこれはやうない事になったかも知れません。

——北村氏

例えば知床の番屋とか漁具とかを民族資料として保存していく事、或いは小樽運河の運動のように、町並みを守っていくというような事に関してはどう考えていらっしゃい

ますでしょうか。

——高橋氏

これは非常に難かしい事でございましてね、斜里町も他の市町村の例にもれず、古いものはどんどん破壊されて新しいものに変っていってるというのが実態です。

民族資料などは、いわゆる博物館を作りましてね、集約をして保存をしていきます。

私どこの知床博物館に行きましたと一目瞭然に分るように展示されております。

ただ、番屋などはですね、昭和35年頃の番屋は、塗つ立て小屋で風が吹けば隙間風がどんどん、どんどん吹き込んでくるような番屋だったのですが、最近は本当に自家発電で水洗トイレ、TVラジオはもちろん、カラオケまで持ち込んでいる。

船だって昔は焼き玉でポンポン走らなかったけど、今はディーゼルで物凄くスピードの出るやつです。

若者向きにメーカーが作るわけです。

船体だって鋼製でない。プラスチックです。軽くて引っくり返り易いんですよ。

もうコロッヒ引っくり返る、それでもそういう船を買うんですよ。

そうしないと若い人が定着してくれない、後継者が育たないわけです。

若い者にも夢を持たせなければ出ていってしまう、とい

う事で、車の2台3台はざらに持つとる。

ま、そういう事で古い家などを残すというのは非常に面倒です。

で、さっぱら私の所では大自然を相手にした保存をやっている、古い物というのも自然の中に含まれますけど、非常に難かしい事だなと思うとります。

今、明治の初期に建てました番屋を是非保存しようと有志の人々が、ま盛んに奉賀帳などを回している所です。

——伏島氏

最近の地域開拓のあり方をみると、単に振興対策というのではなく、住んでいる地域に対する愛情というか信頼というか、誇り、そういうものを持つて貢うのが基本的に一番大事じゃないか、という議論が多くなっているわけです。

その辺で、この斜里町さんのお仕事は地域の人達にも大きなインパクトだったのではないかと思うのですが、官主導の事業でもありますし、町民の方の反応などを教えて頂けましたら。

——高橋氏

行政がやっておるだけに町民の関心が薄いんじゃないかということですけども、これはやはりそういう傾向はあるんです。

私もかつては自然保護運動は一握りの人達だと思ってお

りました。

例えば、海岸の砂丘を守ろうと、知床の自然を守ろうとうことで「青い海と緑を守る会」というのがござりますが、建築資材の砂をどううとする、砂をとったら海岸侵食が起るですから、これは当然だめだと。

そうすると片方は公共事業の資材が足りないんだから里には砂が沢山あるんだから。

で、となるな。となる。そんなようなことで反対賛成が町内でも起きるわけです。

この100m²運動につきましても、地元の者より内地府県のうが非常に多い、参加者1万一千人の内、21.2%が東京都の方で一番多い。

北海道が12.8%、斜里町民が全体に占める割合はというと僅かに3.6%と非常に低いんです。

で、私はこれはね色々分析してみるんですが、斜里の人は周囲が非常に自然そのそのですから、お金を出して守らねばならないんだというふうには余り認識がない。

ところが東京なんかは家を一歩出たってコンクリート、土を踏む事も出来ない。

それに値段もね、坪何十石という所に住んどって、100m²で8千円なら、これはもうお詫しにならない安さだ。

ま、そんな事もあるわけです。

地元の関心が割合に薄い、

これは私、誠に残念な事だと思うわけです。

我々も機会あるごとに、結婚式だとか、一人でも二人でモチーフとして醸金をしておりますが、皆が参加するという事は難しい事ですね。

小樽の運河の事もそうだと恐うんですが、何もない所から出でるのは出ないわけですからね、我々の100m²運動も一つの火種を、こう拡大していくんですね、今に、町民の半分位いは、そういう認識をもつくるんじゃないかと、こう考えています。

——峯山氏

私ども住民運動やっておりますとね、斜里の運動は大変にエニークで非常に関心あつたんです。

で、私はそしこれが住民サイドから出でいたらと考えるんですね。

住民から運動が起きて、行政がそれを組み入れて全国に働きかけていく、そういう形もあると思うんです。

それから、参加された方の対応っていうのはどんななのでしょうか。

——高橋氏

参加された方々というのは金銭的な協力をしてくれてるんですね。

最高額は百万円です。あの一応ですね、1人10口以上の醸出はダメという制限

様になるわけです。

島田市では、周辺の朝霧ヶ瀬の公園とか、松林の公園などと合わせて、交通遺跡の公園として整備しています。

このように、史跡制度も、かなり活用されています。

その他に、建設省の管轄の古都保存法があります。

現在、進められているのは奈良県の明日香村です。

ここでは、生業が立たないで保存だと言っても仕方がない、という事で、いろいろ、やってます。

たとえば、共同集荷場を、作ったり、上下水道を整備したり、又観光客の急の、道路と駐車場。

歴史的な環境と既存の民家を調和させるような工事。

このように、非常に幅広い法律です。

最近になって出来た、伝統文化都市整備事業、これは、国土庁の管轄です。

これの特徴は、伝統的で、地方の文化を体現する様な環境を生かした町づくりをすれば、何に使っても良いという事です。

具体的には、武田市と津和野では資料館。柳川では木道整備。足利と高山では街角の整備をやっています。

たとえば、高山では、補助金を48ヶ所について、バラバラにして使ってています。

これは、今年から条例が変わっています。

水と緑の町づくり、という名前になっています。

つまり、一番大切な、水と緑、それを生かす町づくりをやっていけば、本当に良い町が出来るんだ、と国土庁が考えるようになつたからです。

水と緑に廻路があれば、何でも良いです。あなたたちで考えて下さい。そういう制度です。

それと、建設省の方で、地区詳細計画)というのがあります。

今までの都市計画は、土地利用の用途別色分けとか、道路のネットワークとか、大きなスケールで進められていました。

この計画は、もっと小さい範囲に限ってみて、そこでの特色は何か。それを生かした整備の仕方などなんのか。

たとえば、そこに、市民から愛されている建物が沢山ある場合、今までなら、それらを壊して道路を作ろうと言つてたのを、それらを残して、生かして行く事が、町全体にとって良いんじゃないかな。道路は別のところに作ろうか。

で、これは、正式に、都市計画の中に入れていこうという動きがあります。

今後、再開発とか、区画整理事業が、変わらうだうと言わせてます。

歴史的環境保護事業とは何かという事で、行政の側から考えられているものだけでも

伝達地区制度、古都保存法、水と緑の町づくり、地区詳細計画と、いろいろあるわけです。

それらの最近の傾向の一つは、幅の広がりです。

国土庁の事業については典型的に言えます。

又、愛知県の足助町では、農林の補助金で、地元の農業林業を現代に生かしてこうと展示館を作ったわけです。

本来だと、この使い方は駄目なんですが。

が、変わった役人が一人いて、やった。年寄りも喜んで協力した。

すると、農業に対して自信を失って来たのを、正しい事をやってたんだ、自信を持とうという事になり、全国的に注目されたわけです。

最初、怒っていた農林省も逆に、補助金を追加しようという風になつたわけです。

もう一つの特徴は、時代の広がりです。

従来だと、文化財は、古きや古い程良いとされてましたか、今は、通用しません。

これからは、近代建築だと、文化庁も明言します。

たとえば倉敷。白壁の町。実際にチェックしてみると近代建築が、貴重な文化財として、非常に多く残っています。

歴史の読み直しが、町からわれですか。近代建築と

白壁の戦争の中に取り込んで、町全体の歴史性を上げていこう。

そういう整備の方には移ります。

もう一つ、対象の広がりがあります。

単に建物だけではなく、その周辺のものも見直そう。

川とか、運河。回りの山。伝達地区に指定された場合その中のものに手を加えようとする時には、チェックが入ります。

しかし、それ以外だと、なかなか、むずかしい。

ただ、風致地区に指定するとか、自治体によっては、景観地区を作ったり、建設省では、美観地区を指定しています。

いろんな方法があります。

そして、広がった対象を、どうやって、一つの都市計画の中に、総合的にまとめていくのか、それが、問題なんだと思ひます。

これらの傾向を踏まえて、全国各地の保存事業をみてみると、ずれが感じられます。

一つは、ランク付けの問題です。

ランクの低いものは、残さなくて良いという思想が、行政体の中に今は、まだ、残っている。

それと、歴史をどう捉えるか。近代建築などは軽視して、かと、いう思想。

歴史的史跡は、極めて限られ

ています。ところが、市民の心の根り所とか、愛着を持たれていらるかという事と、それていらる場合があるわけです。

そこで、考えておくべき事は、保有事業を、何の為にやるのかという事です。

文化財と言いますと、歴史的価値があるから、又は、経済振興の為に、たとえば、観光化しようとか。

それと、何が何でも残したい。みんなが好きだから残そう。

あるいは、残す事により、社会組織全体が、まとまるんじゃないかな。

いろんな事から、保存運動が起きています。

一番大切なのは、みんなが好きだから残そうという、一つの感性、心の問題なわけです。

ところが、経済振興とぶつかる事があります。そうすると、計量化できないので、なかなか事業に持て行けないわけです。

ところが、今、一番必要とされているのは、その世界なんです。

そんな中で、行なわれている事は、たとえば、公共建築を作ると時、数%は別にしてあります。それを、みんなから愛着を持たれるようにするための工夫に使うわけです。

又、現在の補助金は、一つのまゝしか見えない。だからいろいろな事業を組み合せ、

一つの事業にしていこう。

たとえば、小樽の場合、運河沿いの立てと道路の問題、文化財の問題、公園の問題、そして町づくりの問題。

考えて行くと、いろんな方面に関わって来ます。それを一つの事業として、まとめ出来るような制度は、残念ながら、ありません。

しかし、そういう事業、一つ一つの事業を組み合わせていけば、ある程度、実現できるわけです。

いろんな制度がありますがかなり、整備されて来ていました。

それともう一つ、組織の問題があります。

誰が保存するのか。

商店会の人たちが、お金を出し合って保存しているという例は、足助町にあります。

しかし、これは、極めて稀なケースです。

普通は、行政がお金を出しいますが、この辺が問題になっています。

かなりの部分、行政が出すにしても、民間からも出し合ってやって行く方法はないだろうか、というのが考えられています。

2年前に、町並み保存財團というのが、発表され、話題になりました。

その半1号が、長野県の塩尻で、現在準備中です。

どういう事かと言うと、町並みを保存する事によって、

食べるようになつたし、余裕も本末転倒。そのお金を使つてアールし、緊急に何か壊れそうになった時に、それを全部投入しよう。

そして、行政体からも出資して貰い、財団法人を作り、みんなの町並みを保存して行こうという考え方です。

この考え方には、広く行き渡って来ています。

九州の久留美彦さんという童話作家の出身地なんです。

ここでは、32年前、日本童話祭というのを、町でやってあります。

そして、童話の里というのを作り、それを核に町づくりをして行こうと。

生業を確保するには、どうすれば良いのか。

一番の財産である自然環境を何とか保存して行こう。

社会的な組織、町内会や野球のチームなど、みんなが仲良くやるには、どんな施設を整備し、作つていけば良いだろう。

これらを、童話の里というものを心の支えにしてやっていこう。

既に、童話の里作り財團というのも動き出しておりま

す。ここには、古い蔵造りの町並みがあるんですか、それを3本柱の一つにして、町と民間とか、つなげて話し合い、新しいタイプの町づくりを進める

ているわけです。

それと、開拓銀行の融資がありますが、民間に対してしないんです。

それが、3年前に越谷市の公共のコミュニティセンターと、民間の商業施設に、融資したという例があります。

これを、町並みに利用するというのには、すぐにまむずかしいと思います。

ただ、開拓銀行の人と話します。

たとえば、小樽の倉庫を買上げて何かをやろうという時、長期的な公共的な融資を考えていこう。

誰が保存するか。誰が維持管理するか。

そういう組織的な問題も、事業の中でも、大切な問題なわけです。

現在の状況を踏まえて、問題点は何か。視点を変えて、話してみたいと思います。

まず、ものを作る時には、壊さなければならぬわけです。

つまり、すべての開拓、建設事業が、保存事業の裏返しだあるという事。

小樽の場合、一番問題になるところだと思います。

どちらが大切かという事になると、心の根り所になると、いうのは、計量化できませんから、非常に不利なわけです。

開拓事業をやる時、そういうものが完全に理を立てていらなか、開拓が先に立つといひ

が、チエックが必要なんですが、小樽については、行政の方にちょっと考えてほしいと見えます。

二つ目は、行政の繩張り争いが、中央レベルであるんです。

予算の分取り合戦です。補助金制度を見直そうという、新しい潮流を乱しているわけです。

たとえば、何かを作る時、良いものを作るには、10%余分にかかる。すると、施工料とすれば、その分減って来るわけです。

減ると、翌年大蔵省から叩かれて減って行く。

そのため、安くても多くの実績を上げる事が中心になるわけです。

これが、各行政体の末端まで、かなり行き渡ります。

オフの問題点は、事業期間が、非常に長い事です。

通常、住宅は40年位、つぶれません。

新しい建物一つの歳に、町並みが台無しになってしまった。すると、40年位は壊れないわけですから、修景計画を立てられないわけです。

それと、急激な開拓は、社会組織を破壊するという事があります。

金沢市の駿河前再開発の例ですが、誰かが病気したというと、お金を持つていつたり、お米を持ちていったり、みんな仲良く、うまくやっている

んですが、再開発でみんなが散り散りになれば、それも出来なくなる。

一体、誰の何の意の開拓なんだ、という事でストップしています。

社会組織を壊したり、その地区の持つ弹性性を失なわせたり、それはなぜか。

急激だからです。計画から事業まで40年、50年かけてやる、そういう体制が、現在はとられていません。

オフの問題点は、財政の問題です。

何時壊れるかわからないものを保存して行くわけですから、緊急事態が発生する事もあるわけです。

ところが、限られた予算の中から、壊れるもの一つに投入する事は出来ないんです。

オフの問題点は、住民組織の問題です。

今までには、壊されようとする事への反対に追われて来たわけです。

これからは、いざ残そうとする時に、お金を集めるとか維持管理するものに変わらなければなりません。

反対運動の中から、新しいものを作る母体が、生まれつつあるという事が現状だと見えます。

6番目の問題点は、都市計画や調査をやる側の問題です。

たとえば、反対する人たちは、何か案を提示する時、専門家の助けを得られるだけの

財力、組織力を持たねばという事です。

逆に言うと、公共の側が、コンサルタントを頼んだならば、同時に反対運動を代表するような専門家に委託して、両方の結果を付き合わせてみると必要だという事です。

そういうものがないと、大層の先生や、ボランティアの人たちがやっているという現状では、全国の問題に、対処しきれないんです。

これらの現在の問題点を踏まえ、今後どうすべきかについて話してみたいと思います。

水辺の環境という事について、具体的な例を挙げてみます。

長崎の中島川。東京江戸川区の親水公園。小金井市の野川。神戸の住吉川。

変わった例として、住吉川があります。

神戸は埋め立てをよくやるわけですが、六甲山の土を削り下へ運ぶんです。

それに利用されたんです。

つまり、ダムを作ったので、水が減って来た。で、河川敷を道路にして一方が下り、一方が上りとしたわけです。

それで、埋め立てが終わりお役目御免になった。

それで、今は遊歩道に使ってあるわけです。

下の方の酒倉の文化、六甲山へ登って行く道、その西側にあそびの街の横浜ひまわり文化施設、それがきつなく

役目を果たしていきます。皮肉な例になりますが、何か失敗しても、何とか後で取り戻しがつくもんだという例です。

東京の親水公園は、かつては、灌漑とか小船の航行に利用されてたりです。

台風や集中豪雨の時には、家屋の浸水の原因になってしまい、

同時に、清流で、洗い場とか、水泳の場でみんなに親しまれていたわけです。

ところが、家庭の雑排水とか、工場廢水など、どぶ川になりました。

そして、下水道施設が完備した。下水道の代わりをしていた水路をどうしようか、という事になったんですね。

普通だと、道路にするんですけど、ここでは、上から、きれいな水を流して川をきれいにした。

そして、水に親しんでみんなが遊べる公園にしようと整備したわけです。

周囲には、木を植え公園や遊園地を作り、そういうのも含めた整備を進めて来ていました。

日本にも、こういう良い例は一杯あります。

海外でも、水辺の開拓といふ事で、一生懸命されている例があります。

代表的なのは、アメリカのジニアコート州のオハイオ州のあります。

ここは、暴雨川で、被害をあちこちに出しておったわけです。

そこで、曲がっていろサンアントニオ川を壊しちゃおうかという話が本にんです。

その時、市民がそんな事はない、立ち上がったわけです。

洪水を抑制するには、他のやり方があるはずだ。横に水路を引いて、そちらの方に水を流そう。

そして、周辺を公園化していくところ。

そういう風にして、成功したわけです。

で、これは単に、利水計画だけでなく、市全体の交通計画、周辺の土地利用計画、それらのものが、かなり縦密にやられたわけです。

これは、小樽の場合、見習うべき例だと鬼います。

少なくとも、態度だけは、見習うべきと鬼います。

変わった例として、アメリカのシアトルのがスワーフパークというのがあります。

ガス製造工場だったんですねが、1956年に、侵われなくなり、廢墟になつたんです。

それを、市が、水に親しみながら遊べる公園にして行こうと考えたわけです。

で、いろんな展示会が出来るスペース、音楽会や演劇にも使えるスペース、そういうものを整備して行くわけです。

その事業は、ずっと続けられています。

もう計画の段階から、事業が始まつて、大分たつわけですが、毎年、少しずつやってるんです。

土壤を改良したり、小さな試みを長期間に渡って続けてるんです。

このよろな試みがない限りは、そのまま残しながら、町を作っていくという事業は、あり得ないという良い例だと鬼います。

小樽にとって参考になると鬼いのは、イギリスの、ウェストビンカレッジ。

これは、文化財の保護教育機関ですが、民間でやってるわけです。

イギリスの場合、歴史的な環境保全をやる時、個人の私的財産を公的財産に移管していくという方が、確立しています。

ナショナルトラストだけではなく、エドワード・ジョン・ス基金とか、ジェイキンス基金とかあるわけです。

民間からのみ金を、公央がもう少し応援してやっていくという事です。

ウェストビンカレッジというのほか、柱時計とか、橋子、民家とかお城の画し方を、お金を持って入させてるわけです。そして、管理技術を教えるんです。

財政的に困窮する部分には、エドワード・ジョン・ス基金を

投入するわけです。

実際に使われてあります建物は、すべて、保存された建物とか、個人が寄附した建物です。

それ①、ウィルダンランド・シンク博物館。やはり、同様のしくみで、博物館機能と、教育機能とをもつています。

この場合は、ジェイキンス基金が投入されています。

たとえば、倉庫を利用して将来、そこに何かを成し上げて行こうという時に、教育機能とか、積極的に人を養成する機能を、市とか道の協力を得ながら進めると良いと思うんです。

そうする事によって、その地区、建物自体が、ますます生きて行くんじゃないか鬼います。

そういう意味で、ウェストビンカレッジの例は、お金の出し方、足りない部分の援助の仕方など、参考になると鬼うわけです。

今後の事業化を考えて行く時に、大切な事は、誰がやつていくか、運動をやる主体、それと、誰がお金を出すのか融資の主体、それと、維持管理して行く時、どうやって帳尻を合わせるかという問題、この三つの問題を解決するようなやり方、公央の事業と民間の懇意を合わせて行くようなやり方を考える必要があるといつて、おっしゃります。一をここで止めておきまして、

皆さんのお意見をお伺いしたいと思います。

司会

それでは討論に入ります。何かご質問、ご意見ございませんか。

森下氏

先程、伝統文化都市環境整備事業のお話をされましたけど、高山の手法をもう少し、詳しくお聞きしたいんですけども。

川端氏

高山は、歴史的な環境がかなり残っている地区と、再開発が進んだ地区と、かなり、混在してゐるわけです。

で、この事業の目的は、各地区に、それぞれふさわしい方法で整備して行く事なわけです。

その時に、個々の建物を整備する方法と、建物の個別にあたる街路を魅力的に仕上げる方法と、技術的には、二つの方法があるわけです。

高山の場合、伝達地区に入つてますので、その地区は、町並み全体の整備は、かなり進んでゐるわけです。

じゃあ、伝達地区だけが、町全体から孤立して良いのかという問題意識があつたわけです。

それは、町角のところなどは、まだ整備してないところばかりで行こうじゃないか。

オフ会-10

そういう発想なんですね。町角、ひとつひとつが市民に愛されるようなものにして行こうと、進められてるんですね。

たとえば、歴史的な所に道路表示がある。30kmとか、一方通行、進入禁止とか。あるいは、看板や幕があつたりする。

たとえ、そこにふさわしくなくとも、公共表示は必要なわけです。

それでは、公共表示が良く見えるように、しかも、町の雰囲気を壊さないようにどうすれば良いか。

舗石が無味乾燥なヤメニトであるのを、町に合うやつに変えて行こう。

人が良く集まる場所なら、市民が憩えるようなベンチを置こう。

あるいは、歩道をちょっと広げよう。

そういう風に、町角町角で問題を洗い出して行ったわけです。

そして、その事業で全部やるという事ではなく、市の事業として本来やらなければならぬ部分に、それを上乗にしてやっとるわけです。

で、48ヶ所やるだけで、町全体の雰囲気が、変わって来ております。

北村

英語、何のために保護するのかといふ話の中には、計量化できないものがあるという

事でしたが、先生は、計量事ができないものに対して、価値みたいなもの、どういう風にお考えですか。

川端氏

自分の家を直す時、隣り近所に迷惑にならないように、という事がありますね。それには、近所が生垣なのに、コンクリートにするのは迷惑だそこまで含めて迷惑にならぬいようにする。それは、計量化できません。

10軒集まつた場合、建築協定というのがあります。これも計量化できません。

たとえば、色彩。こういう色にして行こう。あるいは、屋根の線を揃えよう。生垣でやって行こう。そうすれば、町はきれいになると信じたいか。これも、計量化できません。

じゃあ、そこの持ち主ではない人が、みんなでこういう風にして行こうと、言えないかというと、やっぱり運用するんです。

町全体のために、あるいは一人一人のために残して行こう。これも計量化できません。

計量化できないものにも、いろいろレベルがあるわけです。

で、計量化できないヤメニティといわれるものを残して行こう。あるいは、その中に価値観を見い出す。それが、

感性の世界だと思うんですけどそれが大切だと見ておるわけです。

ところが、計量化ざる道路の方が大切だ、という意見もあるわけです。

それでは、大切なものを残しながら、商業的にペイして行く。残すことによってペイして行く。そうすると、計量化される領域に入るわけです。

そういう、ペイして行く、あるいは、町全体が良くなるそういうものと、計量化されない、みんなが幸せになっていくようなものと、二つを合わせてやって行くのが、本来の事業だと見うんです。特に公的の事業は。

両方をうまく、ドッキングさせるのが、行政マンの手腕だと考えますね。

五十嵐氏

県とか市町村の教育委員会あるいは、教育団体が、保存運動に、どんな風に対応しているのか、関わっているのかその辺のお話、伺いたいんですけど。

川端氏

先程の玖珠町の童話の里。ここ童話祭の所管は教育委員会なんですよ。

そして、童話の里構想も、出て来たのが教育委員会なんですよ。

これは、町全体の基本計画

にあたるわけですが、今、企画の方と教育委員会が、一緒にやっています。

私、この町で、ひとつ感心している事があります。

普通、教育委員会は、社会教育と学校教育と、二つにきれいに分かれています。

ところが、この町は、学校の先生方が、社会教育の方に熱心に働きかけた。それで、うまく行ってるんです。

たとえば、中学校のある先生が、生徒に町の水路について調べさせて、まとめさせた。

又、逆に、公民館の主事が中学生、高校生に、童話祭と一緒に参加しようと呼びかける。

農家の青年たちが、伝統道具で子供の教育を考えて行こうと、子供の遊びを考える会というものを作ると、その取りまとめをやって、学校に呼びかける。

そんな交流があって、この町が、非常に活気づいているわけです。

小樽の場合、町の歴史を子供に知らせるのは、学校の先生だけではなく、一般市民の役目なんですね。

逆に、学校の先生は、町の歴史を教えると同時に、現状はどうなのかな。どういう風になればみんな嬉しいんだろうか。子供の眼から運河を見るといふか。子供は店に店にかけて行く。これがまた楽しいですね」と良いと笑います。

社会教育と学校教育が、相互の交流を持ちながら進める事が、保存運動にとって、重要な事だと考えます。

—北村

小樽の問題をどういう風にご覧になつてゐるか。事業制度や手法にからめてでも結構ですし、政治的な側面を含めてでも結構です。少し、お伺いしたいんですが。

—川端氏

二つ問題があると思つてます。将来の道路のネットワークですね。それと、どういう交通が流れ、こういう交通は流してはいけない、そういう計画を市が持つてゐるか、どうか。

どうも、持つてないようですね。おそらく、どうすれば良いのかと考へておられると思うんです。

その場合、他に方法はないのか。たとえば、山回りバイパスの問題。あるいは、通した時の両側の土地利用の問題ですね。

そういう問題について、スタディというのは、もっとされるべきだったし、今からでも遅くないと思います。するべきだと思います。

これが、一つの問題です。それと、もう一つは倉庫の再利用の問題です。

倉庫業者の方々が、益々し

て来たわけです。老舗として誇りを持ってみると見らわけです。

ですから、再利用の中の一つは、倉庫業者が中心になつて、流通とか、経済とか倉庫業側から見た、ゆのの仕方、展示館とか博物館でも良いです。何かを、やってもらうという事。

今まで維持して来られた人たちに協力してもらい、何かをやってもらうような形。

あさいは、地場産業を振興して行くベースになるものですから、公共体が力を入れ、今までにない新しいものを取り入れて行く。

そうすると、今まで経済価値がないと考えられていたものが、逆に出で来ると思うんです。

そういう形で、倉庫を整備して行くと良いと見えます。

—伏島氏

小樽の倉庫の問題を考えますと、何をするにしても、かなりの事業費コストが、かかると思うわけです。

そして、小樽の市の財政が非常に厳しいという状況の中で、大きな事は一切できないと思うわけです。

そういう事業費コストの問題を、いかに処理するか。具体的な事例がありましたら、お聞かせ願いたいと思います。

—川端氏

やり方は、いろいろあると思います。ただ、すべてにつけて言える事は、金をふんだくつくる、という事なんですね。

たとえば、歴史民族資料館は、文化庁の予算措置でやっているので、取り易いです。

しかも、道と国の両方から補助金が出ます。

ですから、何かをやるという時に、じゃあ、どこを引つけれるか、という事。

道産省には、お金が余っていますし、外郭団体が沢山あります。

まず、そういう団体から、呼び水の金を引き出すわけです。その時は、基本的な構造の修理とか、一部分に止めでおくわけです。実績をまず作るわけです。

そして、次に本省から引き出すわけです。

足助の小沢さんという人、補助金を取つて来る名人なんですね。

風呂敷包み一杯、資料をためて、背負つて役所に乗り込んで行くんですね。すると、迫力に負け、金が出て来るんですね。

こういうお役人がいれば、補助金を取る位、業なわけです。

これは、県を通じてという事になりますが、最終的には中央官庁の役人の心理というのに、運営して乗り込んで来られたら、動くものです。

だから、何かをやる時は、乗っ込んで行って、取つて来られると悪いと思います。

その時は、情報差し上げますから。

—峯山氏

おしゃられる通り、一つ手口ができる事が、大変、大事だと思うんです。

伊藤ていじ先生が、おしゃってましたか、埠頭、横橋運河と、港の三型式が残っているのは、日本では小樽だけです。

港湾の歴史を保存するという形で、助成金を貰えれば、それが引き金になり、行政や倉庫業者の方と、話を持て、運河保存、倉庫保存に取り組めると思うんです。

—川端氏

運輸省港湾局は、旧港をこれからどうしようか、考えているんです。

歴史的なものを残しながらどうやって再生して行くか、という問題意識を持っているんです。

ただ、市と住民が対立していると、ちょっと出しにくいでしょうから、やっぱり、その辺のところを解決しなければなりませんね。

今、峯山さんが言われたような事は、近いうちに、よそを説いて、出で来るだろうと考えています。

同じやるより、早い方が良

いですよ。

— 北村氏

港湾全体を博物館的なものにして、歴史的なものを残しながら、再生していくという形を夢に描いてるんです。

どこかの港で、具体的にやられている所があるんですか。

— 川端氏

愛知県なんですが、計画が立てられています。ただ、事業としては、まだ日本ではやられません。

外国には沢山あります。
ホストンの臨港地帯の1日港の再開発は、非常に参考になると思います。

— 北村氏

なぜ、保存をするのかという点で、アメニティというお話をありました。その中にちらちらと、多数決主義が見えるような気がするんです。

そうだとすれば、結局、計量化されないものを、計量化できる部分でしか捉えない事だと思います。

又、今までやって来た、今から見ると批判されるものもその時は肯じ得るものであった。

とすれば、今保存をやろうとする時、軸を踏む事になり兼ねないと思っています。

そこで、なぜ保存するのか、又、計量化できない軸をどう価値づけていくか、非常に

重要な問題になると見えてます。いかがでしょうか。

— 川端氏

その通りですね。ただ、アメニティを本当に理解するのは、必ずしも難しいですね。しかし、多数決主義ではないと見えうんです。

町並み連盟のやり方で、いろんな地域から、いろんな人たちが集まって、何とかやと言いつながら、作って行った。これは、全く、地から生えて来たものです。

で、小樽を見ますと、遠眺してある部分があるんだけど、逆にそれが良いなと見えうんです。

つまり、昔からの何となく多数決でもない、何となくみんなが集まって、こうやうらかというものと、近代的な運動体が、相互に、フィードバックしながら、段々とやって行く、というのが、これから町づくりに必要だと見えうんです。

地からというのは、倉庫業者の方だと見えうんですが、その辺のところと、今までみなさんがやって来られた事この接点を探り、運動を長期化させ、成功に導いて行かれると良いと思います。

お答えになつてないんですけども。

第4回 歴史的建造物の保存・再生

— 制度的、技術的、経済的な課題をこえて —

講師 広田 基彦 氏
越野 武氏
小島 一郎氏
佐々木興次郎氏

昭和56年6月5日
小樽市労働会館

講師紹介がおわって、

— 越野氏

今、紹介いただきました越野です。

今日の私たちに課せられましたテーマは、歴史的建造物の保存・再生ということで、副題に制度的、技術的、経済的な課題をこえてとあります。

実は、最初は広田さんと私と2人前がのっかっていたんですが、今日になりました4人になりました。

ここに広田氏、越野氏の体験談の中からという話が書いてありますが、広田さんは別として、私はふだん大学で建築の歴史を勉強してるだけで、こういう保存・再生の体験は全くないんです。

それで、もう少し体験を広く集めた方がいいのではないかと、今日さらに小島さん、佐々木さんの2人に急きよ出ていただいたということです。

小島さんはいくつかの建物の再利用を実際に手がけられ

ました。
佐々木さんもやはり古い倉庫を喫茶店に改造するというような経験をおもちです。それから、広田さんは文化財的な建物の保存、修理、補強工事というようなことで、大変技術的な蓄積をおもちです。

それで最初に私が、一般論といいますか総論といいますか、少し序の口みたいなことをしゃべります。

課題にあるような歴史的建造物の保存ということについて少し考えてみたいと思います。

歴史的建築物の保存といいますとすぐ思いつくのは、いわゆる文化財建造物の保存、修理ということです。

こういうことは古くからやられて、いろいろ技術的に蓄積があるわけです。

細部は別として、その原理は大変単純、簡単なことで、いわゆる復元——建物が建った当初の姿に戻していくとい

うことです。

要するに元に戻す。したがって、時には構造的にも、あるいは使い勝手からいっても、いろんな欠陥はあっても元に戻すというようなことをしゃにむにやります。

構造の技術に欠陥があっても、その欠陥があることが歴史的に意味があるという場合もしばしばあります。

例えば幌の道庁赤レンガの修理、これはスレートの屋根に復元されたのですが、復元される前は鉄板ふきに変わっていたんです。

あの場合も大変ムリをして建った時のスレートふきに復元しています。

技術的にいってどちらが安全かというとちょっとわからぬところがありますし、大変お金も苦労もかけてわざわざ復元しました。

しかし、実際はいろんな構造的な補強、修理あるいは設備の改良、そういうことが文化財的な建物でもおこなわれます。

特に、日本の明治の洋風建築の修理というようなときは、道庁の赤レンガもそうですが、構造的な補強が問題になります。

それは、明治の初めに日本が受け入れた洋風建築、その中の石造だとかレンガ造の建物は、日本には地震が多いということで、耐震的な欠陥をもつていたわけです。

何十年たちまして、今それを文化財として保存しようという時には、少なくとも耐震性というようなことで、どうしても構造的に新しくするということが必要な場合がしばしばでできます。

例えば、犬山の明治村に、京都から移されたフランシスコ・ザビエル教会という、外から見ると石造に見える建物があります。

あれは本当は壁はレンガ造で、内部は木造という混合構造だったんです。

移築の時に耐震性のことが問題になりました、レンガの壁は外から見えないために、鉄筋コンクリート造にかえまして新しく作った。

いわゆる様式保存という、形を保存するというようなことをやった。

さらに最近、少し文化財保存の範囲も広まりまして、よくいわれる外観保存が問題になります。

それは、その建物が建っている都市環境を良くしようとすることと、内部は新しく色々な機能に応じて使って、外側は古い姿を残そうということです。

そういう事例として、この5年ほど日本でもいくつか新しい試みがされるようになっています。

その例で一つあげられるのが京都の中京郵便局です。

詳しいことはわかりません

けれども、1番外側のレンガ造の壁だけを残し、中は全く新しい郵便局に作り変えました。

その時に、1番外側のレンガの壁の内側に鉄筋コンクリートを新しく打ち込みました。

壁、床、屋根、全部鉄筋コンクリートで新しく作って、外側の壁だけを残しました。

これはある意味では、日本では初めての体験だったのですして、初体験ゆえのいろいろな苦労があったかと思われます。

例えば、元の建物に新しい建物を建てるになりますから、まず古い建物の内部を全部壊してしまいます。

で、外側のレンガの壁だけが1年近く木コンと裸で建っているというような状態が工事中におきます。

レンガの壁は、全部がちゃんとなってる時は丈夫なんですが、裸にされると大変弱い。

地震なんかに弱いわけです。

工事中にそれをどういうふうに支えていくかという技術的な問題があって、これを担当された方は大変苦労されたということが伝えられてあります。

それからもう一つ、同じ頃に金沢の市立図書館の例があります。

これは、明治末に建ちました専売公社の赤レンガの工場がありました。その敷地に新しい図書館を建てたんです。

その場合に、古い建物を全部壊して新しい建物を建てるのじゃなくて、1つだけ古いその赤レンガの工場を残しまして、そのわきに新館の図書館を建てる。

で、残した工場の方は、1階は集会室と展示室、2階を貴重本のようなものを入れる特別書庫に使う。

そういう改良をやった例です。

やはり似たようなことで、工事中の裸のレンガの壁をどう支えるか。

それから、できあがった躯体を地震にも大丈夫なように補強するために大変苦労された例です。

まあ、大変苦労したためですね、この市立図書館もさっきの京都の中京郵便局も、大変お金がかかっちゃった。

そんなのが、いわゆる文化財的な建物の補強ということです、今我々がやっている例であります。

で、しかし良く考えてみると、歴史的建造物と書いてありますからちょっと固苦しめですけれども、古い建物を保護・再生するというふうに言い換えてみると、実はそういう特別の文化財的、記碑的な建造物に限らず、我々はごく普通に古い建物を保存・修理して何とかかんとか使っているわけです。

例えば、住宅にしたって、そうそうおいそれと新築する

わけにはいがないんですから、何とかかんとか使って、いわゆる維持管理の延長上にそういう保有、修理、再利用をどう普通にやってきたのではなかと思います。

例えば、土台をあげるとか、屋根をふきかえるとか、あるいは設備が古くなるとそれを新しくする。

あるいは、かつて井戸水だったのが水道になったり、くみ取り便所が水洗になったり、その都度いろいろ手を加えて何とかかんとか使ってきました。

で、さらにそれが、單に古い建物があるから使うという以上に、古い建物のいろいろな意味での魅力に注目して積極的に使っていこうというようなことも、やっぱり古くからあつたと思うんです。

最近、とくにそれが強くなってきてるんじゃないかなと思います。

そういう維持管理の延長上にある保有・再生というようなことが、いわば当たり前だつたわけですけれども、この10数年、どうもそれが当たり前でなくなつていています。

逆に、古い建物は人か壊して新築する、クリアランスしてという考え方方が逆に当たり前になつてくる。

というのがこの10数年、日本でいえば高成長期の考え方で、良く考えてみると、むしろこれは特殊な考え方であるという気がします。

しかし、特殊とはいっても、それはいろんな町の大変極端な再開発、壊して新しく建てるこというようなことが実際に盛んに行なわれましたから、そういう町の環境保全というような意味で大変問題をおこしている。

今あらためて、もう少し積極的にそういう古い建物、ごく広い意味での歴史的な建物を保存・再生しようということがでてきたんだと思います。

ちょうど今言いました兩極端、文化財的な建物の保有・再生とごく普通にあう保有との、ちょうどその中間的な保存・再利用ということが、今盛んに問題になつてきている段階だと思つてます。

そういう中間的な保存・再利用の場合には、非常にたくさんある建物、あるいは工場もあれば事務所もあれば住宅もあればというような、非常にいろんな種類の建物を何とか保全していかねばならない。

当然、それは再利用と結びついて考えなくちゃいけない。

その場合、文化財的な建物にお金をかけるように——いわば社会の生産活動の中の特別予算ですね、あの文化財保有といふのは——そういうようなものでやるにはとてもまかないきれない。

それはぼくらの日常生活のための建築物、あるいはいろんな生産活動のための建築物

という、そういうケースにあら程度のつかうないとダメで、経済的なバランスといふか、要するにペイするような再生でなければならぬ。

そういうのがさかんに言われるようになつてきて、事例ちいくつか出て来ました。

日本では有名な倉敷のアイビースクエアがあつたり、あるいはサンフランシスコのキヤナリーのような例があります。

で、僕はそれに付け加える意味で、アメリカのマサチューセッツ州で、だいたい昭和50年前後、5年ぐらい前に数年間にわたれた州内のいろんな建築保全・再利用の事例について説明します。

ここにあがつてある公共建築、商業建築、工場、住宅、その他確か29例ぐらいだと思うんですが、それ以外にマサチューセッツ州では実はもつと大規模な保存・再利用計画をやっています。

例えば、ボストン市では市の中にクインシー・マーケットという、19世紀に建てられた非常に大きな市場があります。

それを保有・再開発して新しく市場として再生させます。

あるいは、波止場のところにある町、街区の大規模な保全・再利用計画などというのが行われてきています。

あるいは、ローウエルという200年ほど前に作られた計

画工業都市で、これもこの數十年、往前になつてしまつたのをほとんど町ぐるみで保全しつつ、再開発、再利用する。

これは工場、運河、川なんかのある大変広い範囲のもので、ちょうど小樽のようなものじゃないかと思うんですねが、そういう大規模なものもあります。

そういうんじゃなくて、ここにあがつてるのはごく普遍の建物を再利用する、という意味であつたるんだそうです。

で、これをみると、わりと多いのが住宅に転用されている。例えば、工場のところをみると、これはほとんど全部がアパート、共同住宅に転用されています。

そういうふうに、ごく普遍の実用的な再利用計画ということがわかれます。

それを支えるのは、いわゆる文化財行政から出くるお金では全然ないわけです。

例えば、州の住宅金融公庫みたいなものだと想うんですが、ちょうど日本の住宅金融公庫ですね、そういうような融資。

あるいは民間投資、銀行融資、それに資産税優遇だと、いろんな公共投資の補助とか融資とかで行われていて、

要するに、住宅政策というようなことと緊密にからんで事業がおこなわれている。

従つて、経済メリットは

つきり打ち出されているわけです。

これがどうしてこんなことになるのか信じられないんですけれども、建築単価、あるいは総事業費の単価といいますか、面積1平方メートルあたりいくらお金がかかるかというのをちょっとあげたんですね。

これは1ドル220円で換算したもので、ずっとご覧になりますと、うす円とかう円、せいぜい高くても9万円ぐらい。

5年前ですから少し違うでしょうけど、ちょっと信じられないほど安いんです。

そこにはいろんな事情があります。日本にすぐあてはまるとは思いませんけれども、とにかくはつきりと経済ベースにのっているということがわかります。

日本では残念ながら、まだそういう事業は非常に美しい。したがって、例えば今日のテーマのようなことを一人の専門家がちゃんと講演できるというほどの専門的な技術体系といいますか、そういうことを知っている専門家はまだ全く育っていないという状況にあると思います。

ごく普遍の保全と文化財の保全とのちょうど中間にあるいろんな保全技術、あるいは保全対策というようなことをこれから日本では探っていくがなくちゃならない。

しかも専門家はいないわけですから、今日のようないろんな意見が寄せ集めで集まってきて、それをわれの体験を生の形で持ち寄ってでも何とかしてそういう中間的なものをみつけ出していかなくてはならない状態にあるんですね。

私は前口上であります。これから少し体験を出していただいたらいいんじゃないかと思います。

三方ながらみてみると、お隣りの小島さんが一番役者風の、真打ち風の感じがしますから(笑)、この方は最後に取つておきまして、僕の話と多少関係するでしょうか、まず広田さんからひとつ自由にお話し願えればと思います。

— 広田 氏 —

私は元々道行の役人でございます。

10年ほど前に役所をやめて設計事務所を自分で経営しております。

で、道行におりました最終の時は、百年記念施設建設事務所長という、つまり百年記念塔を作ったり、開拓記念館を作ったり、道行庁舎を作ったり、赤レンガをいいじく、たりするような事が最後の仕事でした。

で、赤レンガの話をしますしますと、赤レンガは明治21年にできあがってるんです。

明治42年に火災で中がすっ

かり焼けちゃって、そして外側のレンガの壁だけが残った。

その時、このままじゃ階段が木造で危険だとか、階段の位置が真中に集中していて危険だとかいうんで、両側に階段室をレンガで付け足した。

真中にあります塔が、なにしろ木造の上にレンガ造の塔をのっけてるんですから、グラグラして、建ってから8年ぐらいたって明治の28年か29年にはその塔を取っちゃってるんですね。

そういう具合にすっかり形が変わっちゃってたということもありますし、私たちが若い時から聞いてたのは、クラシックの建築としては正統的な様式じゃない、あんなものはダメだという説が非常に多かったんですね。

そんなことであんまり重視をしなかったということがあります。

それで26、7年くらいから30年くらいだったかと思いますが、庁舎を少し増築しながらという話が持ち上がり、たんです。

その時我々はですね、道行の2町画は札幌の大通りなどにデンと座ってて交通の障害にもなってるし、あの赤レンガは取っちゃま、たらどうだと、軽い気持ちでそんなことを言つたことがありました。

そんなことで真剣になって赤レンガを取って、真中になじみの道路をズバンと通して、

その後に庁舎の縁をかいだというようなこともございました。

ある部長は、前庭の両方に池がありますが、その池にピロティが足を踏みこんだような高い建物を作りました。そこから赤レンガが奥の院に対して見える(実)という案を作った人もいました。

いよいよ庁舎を作ろうということになって、私の場合、庁舎建設本部というところに籍をおくことになつたのが昭和37年でしたが、その年は今年のような冷害でございました。庁舎はしばらく見あわせだと。

その代り、おまえさん達はそのまま勉強しておれと。

こういわれて、知事から言われたことは、赤レンガについて、赤レンガを保存するという角度で少し勉強せいと言われたんです。

それで赤レンガのことをいろいろ調べたら、古い写真や何かでてきた。

これはなかなか大事な建物なんだということがやっと認識できました。

そんなことで、道行庁舎の位置は、赤レンガを残してその後ろに作ることになつて今の新庁舎ができましたんです。

赤レンガを残すということが決まって、いよいよ設計にかかる段階になりましたのが、庁舎ができる上がってまもなく

の昭和42年の春ぐらいでしたか。

そこで越野先生にもご参加をいたただくことになったわけです。

その前に、一体赤レンガを残すとしたらどういう問題があるだろうかといふと、これをちゃんと使っていくためにには、新しい建築基準法にひっかかって、あの建物をいじれないんですね。

大規模の修繕工事をやるには、史跡の指定を受けるとか、重要文化財の指定を受けるとかいうことがないと、そういうことをやつてはいけないのです。

新しい法規に全部引っかかるやう。

新しい法規に引っかかるてしまいすると、赤レンガの中には、中京郵便局ですか、これと同じように鉄筋コンクリートでさらに中へ一つ身を入れなければならぬ。

で、そういうことをやると昔の形態はまるで中にについてはなくなり、ちやうということがありますね。

それでいろいろしゃるべき先生方にご相談をしたわけですが、それはどうにももしよがないと、それではとても重要な文化財なんかにならぬよといふお話をしたんです。

で、昭和42年の秋に文化庁の方がこられまして、その時遠藤明久さんと私がいろいろお話をしたんですが、史跡の指定をなんとか受けられない

だらうかなあと。

もともと本庁ってのは、敷地のど真中にあるんです。

それが明治16年にできて、明治12年に焼けちゃったんで

す。
そして、しばらく空地になってたところへ明治19年から21年にかけて今の赤レンガを作った。

その時は、明治13年に手宮かられ鳴に国鉄が走ったんで、北6条通りがなくなっていますね。

それで道庁の敷地は1町減らして4町角になつたんですね。

で、4町角の真中に作ったから、前にあつた札幌本庁とはちょうど半町違うんです。

それで、ちょうど半町違つたところに札幌本庁舎の跡があるはずだと、そういう話がそこまでたんだです。

その時、ちょうど新庁舎の工事を始めていたところで、教育庁というのがちょうど札幌本庁の上に建ておりまして、教育庁の木造が建つ前に道警の庁舎がありました。その前には私が就職したばかりの時に入つた庁舎がありましたり、3度も焼けてるんで

す。
で、3度もものが建つて焼けてるところに、そんな痕跡なんかとてもあるまいと思つていたんですけど、そこの中庭をとにかく掘つていけど。

そういう掘らせたんです。

そしたら驚くべきことに、札幌本庁の基礎がでてきました

です。
巾が36cmか40cmぐらい、厚みが9cmぐらいの板、これはもう腐っておりましたが、その板の木の上にですね、石かのつかって、その上に杭の穴があいてるんで

す。
それから、今度はその教育庁の建物をさっそく解体して、そして高倉新一郎さんを団長にして、そこでの発掘調査をやつたんです。

そうしたら、開拓使札幌本庁の基礎はすらっと全部出ちます。

それで赤レンガを含めて札幌本庁のところぐろ、と、史跡の指定をもらつちゃつたわけです。

史跡の指定をもらつたら、もうこれは赤レンガをどのようないじろうとこちへ勝手になりますね。

そこでいよいよ設計にかかりました。

赤レンガはとにかくものすごく高い建物ですから、このままでは危険だというんで、一番下の階を一半地下の階ですか、そこだけは全部コンクリートの中に入れたんです。

そして各階の床はコンクリートに直しまして、レンガの一面上には臥梁を鉄筋コンクリートでまわす。

そしてタワーの乗つかるところは、盤状のコンクリートを打つて、その上にレンガ造

りのタワーを作る。

それから両方につき出していった階段室も元々はないものなので、それを取つて、そこに行く廊下の部分が全部3階の鉄筋コンクリートの中に入れたわけです。

もし火災等がおきて危険なことになつた時には、その廊下に避げこめるという配慮をしたんぢやない。

しかし、まあいう建物ですから、構造計算にはどこもひらはない。

完全な解析はできないわけです。
まあその辺はある程度まで設計事務所で検討はしたんですけども、まあこれからだといふところでやってしまつたというような経過がござります。

で、金の話をいえば、当時どう億かかるんでありますか。

面積は約1,500坪ありますから、坪あたり20万円ですか。

今の額だと、3倍半ぐら

いになるだらうと思ひます。
あのこう道庁新庁舎も20何万かかるますんで、1,500坪の赤レンガを残して、それを実際に会議室や資料室に使えるならば、新庁舎を作るよりは安くて済んだ。

効果は十分にあつたんぢやないかといったものです。

赤レンガの話をそれくらいにしまして、当地の小樽新聞社ですか。

今、野幌の森林公園、開拓

記念館の付属施設になります
市民公園の中に開拓の村とい
うのを模倣で作ってみり
まして、そこにはもはや7棟
から8棟、明治時代の建物を復
元しています。

その中にもつてくるために、
昭和51年でしたか50年でした
が、この堤町にありました小
樽新聞社の社屋を道がゆすり
受けました。

そして解体をして、野幌に
もつていて、ストックをしておいて、54年にこれを復元
した。

で、構造はどんなものかと
いうと、18cmくらいの札幌軟
石を外側に張りつけた、そ
ういう構造です。

あくまでもこれは木造だと
いえると思います。

木造へ石張りだということ
です。

昔の断面は、梁の下に天井
がくつき、上に床板が張ら
さっている。

上の階の床と下の階の天井
のクリアランスが50cm足らず
です。

で、保存工事の方は、この
ままでは今の法規からみて当然ダメです、いくら開拓の
村というところが治外法権的
なところであろうと、こうい
うものをそのままやさわけにはいかない。

大変危険であるというこ
とで、中に鉄筋コンクリート
を全部入れたわけです。

今言いましたようが50cm足

らずの床と天井のクリアラン
スの中に、鉄筋コンクリート
のスラブを入れて、造りに向
いた上の方につき出た梁を通
して、その上に木造の床をか
けて昔と同じような形を作っ
た。

小屋組み等は産業の材をほ
とんど使った。

外壁の石もかなりの程度在
来の石をはずしてそれを使っ
た。

もう一つ言いますと、建物
を解体した時に、段々基礎の
石をはずしていきましたら、
さらにコンクリートができま
した。

そのコンクリートの下に、
木杭を打った跡がやはり本庄
と同じように穴ぼこになつて
数個ありました。

で、この色内の地区も同様
だと思いますが、運河沿いの
地盤というものがたぶん悪い
んじゃないかと思ってあります。

ただ、今から70年、60年も
前に建てた建物ですから、そ
してあの石造倉庫という重い
建物ですから、何となく相対
的には若干の沈下が起きてく
る。

まあ、それなりにも、てい
るんで、何かちょっとしたシ
ョックを与えると、春、雪で
倒れたような、ああいうこと
にも結びつく。

よく調べてみるとわから
ないことだと思いませんが、そ
んなことを思いました。

小樽新聞、復元にどのくらい
の錢がかったかといいます
と、まず、解体をして収集し
て札幌へもっていって野幌に
ストックするということに、
平米あたり4万円くらい。

今のお金にしまして35%く
らい増だと思います。

それから復元の工事、これ
は昭和54年ですから今のお金
にすると12%ぐらい増えると
思います。

そうやって計算してみます
と、これは坪あたり45万円千
円かかることがあります。

そのうちで、土工事から鉄
筋コンクリートの部分、つい
くのは千万1千円くらい。

石の方は、解体しても、
支給した石材の値段が480
万円といふんですか、それを
除いても3万5千円くらいか
かってる。

これに480万いれると、
もう1万5千円くらいアップ
になりますね。

ですから、コンクリートの
工事よりも外に張った石の部
分の方が余計なんですね。

そのように、石工事とい
うのは大変お金かかるんだと
いうことを一つ頭に入れとい
ていただきたいと思います。

私、今日のために2,3の
石屋に、札幌軟石で今、昔あ
った倉庫のようなものを作ら
うとしたら、サイいくらいで
きるという話をしました。

サイというのは1尺角のこ

とです。

そしたら、わからぬいとい
う答が返ってきたんです。

なぜわからぬいんだとい
うと、石造倉庫というものは、
ちはや15年も20年もやったこ
とがない。

そういうものは今はもうわ
からなくなつてると。

墓石しかわからんという話
です。

そのように、なかなか石と
いうのは札幌軟石でも大変な
ものです。

もちろん小樽新聞は、倉庫
群とはちょっと手がこんであ
りますから、そういう点では
お金もかかったと思いますが、
およそ体ごとおこしてはすべ
てもつくるというようなも
のですから、そんなにたくさん
新しい石材を確保したとい
うことはなかつたと思います。

—越野氏

どうもありがとうございました。
では次、佐々木さんにお話
し願います。

—佐々木氏

どうも、佐々木です。
自分の所は、別に小樽運河
沿いにあるような立派な倉庫
でもございませんし、またあ
の魚籃館のような由緒ある建
物でもないです。

自分がヨーロッパを旅行し
た時にあたためたというか、
茅生えたというか、そういう
ような些細な夢をかなえたよ

うな感じの店なんです。

越野先生からアドバイスを受けまして、動機とか経過ですね、どういう状態の建物にどういふ手を加えたか、あと反省とかをういふことをお話ししたいと思います。

叫兒樓という店を始めた動機は、自分がヨーロッパを旅行した時にパリの運河沿いであるとか、アムステルダムの運河沿いに、たくさん立派な古き建物があるんですね。で、そういう所で若い人達が人形屋さんなりアニティックなり、まあちょっと新しいとこでいえばディスコですね、何かたくさんあったんですね。

それは本当に若い人達が生き生きとそこでいふんなことやってるわけです。

自分は小樽生れなんですが、高校を卒業して小樽がイヤイヤすぐ飛び出していくアラレしてたんですね。

その時にヨーロッパに行ってみて、待てよ、どっかにあつたんじやないか、自分の生れた小樽じゃないかということ。

そこで、いつも立ってもいられないなくて帰って来たわけなんです。

今使ってる倉庫というのは、自分でやっているせいか、すごく古くされて、かといって決してバサバサしていねい、重々しく安心感を与えるようなものなんですね。

まあ、どうしても頑丈な、どしどしたような建物が欲しかったということで、自分も札幌にいた時には今みたいな商店で働いていましたので、自分の些細な夢ということで小樽で一所懸命そういう倉庫を探していました。

自分は古いものが好きで、骨董屋さんと親しくしてたんですけども、その骨董屋さんが小樽に商店替えをするんで倉があくから、お前、前にいってたがどうだ」ということで、さっそく飛びついてお借りしたわけなんです。

そういう店があって、設計屋さんに頼んだから2ヶ月間ひとにかく開店したんですね。

自分が札幌にいた時営業してた店を作った設計屋さんが、自分のアイデアを実際的に図面でひいてくれたんですね。

それから、今度小樽に行きました、自分の友達が材木屋をやってましたんで、とにかくお金がないと、お金なくとも本当に安くやってくれるような大工さんいないか、っていうことで、大工さんまで紹介してくれて。

この材木屋のオヤジさんが、ほとんど原価と同じくらいで貸してくれました。

大工さんの方も、何の保証もないのに、とにかく2年月賦にしてくれといつたら、一言で、じゃ2年月賦だということで月賦にもしてくれました。

間口2間、奥行3間、6坪の小さな店なんですけども、小さいわりにはすごく柱、梁とも太いんですね。

作ってる段階で一番悩んだことは、まず入口の決定なんですね。

ここに平面図がありますが、1階部分で入口が向って右側についてますけれども、これは元来の入口じゃないんですね。カウンターと書いてあるいすの裏側にちょっと区切ってあるところが昔の正式な倉の扉なんですね。

そこから人を出入りするようにならたいと考えたんですけども、今の店の半地下がグラウンドラインから1m20cmぐらい下がってて、1階の床、つまり半地下の天井が人間が立て歩けないような状態だったので、2mまで掘ったんです。

それでそこからの出入りが不可能だったもので、軟石をチエンソーで切りまして現在の所に入口をつけたわけなんです。

それから、トイレの位置の決定と排水ですね。

この倉は、昔、呉服屋さんが大正の末期に作った倉なんですね。

呉服屋さんですので、反物をしましておくと湿気を大嫌います。

それで、床も厚さ約50cmの捨てコンを打ってあります。それから地下1階の床からゲ

ラウンドラインの上約50cmぐらいまでは、一番高いところで30cmのすき広がりの台形で、コンクリートとモルタルのサンドイッチ構造で防水をしてあるわけなんですね。

それを打ち破るのにまず3日ぐらいかかりました。

それから、店の雰囲気作りとしては、2坪の3階建てですごく狭いんで、どうにか空間の広がりをもちたいということで、玄関を入りましてすぐ上まで吹抜にした。

それから、小さいのでワニフロアごとに雰囲気を変えようということ、地下の方は真中に大テーブルを置いて全部で15人座れます。

1階には絶対カウンターをもっていかなきゃダメだということ、厨房とか入ってますんで8人座れます。

2階の方は3人がけのボックスで9席とりまして15人。真中に本當は吹抜をやりたがったんですね。

今は鉄線の入ったガラス戸がうめてあるんですけども、以前は透明ガラスを入れてたんですね。

上を見ると、そこを老人の全部見えるもんで、すりガラスに変えたんですね。

それから、壁の半分までは板を張って、あとの方は柱と柱の間は全部軟石を出してあります。

これは自分がどうしても軟石を見せたいということで、

そういうふうにやってくれました。

まあ一番大事なことなんですかけども、何年たっても変わらない店といふことで、自分の目標は小樽にある「光」っていう喫茶店のような感じをぜひやってみたい。

20年たっても変わらないような店を作つてみたいということで、材料も本当はラウン使用いたくなかったんです。

どうしようもなく材料が集まりませんもんと、ラウンを使いまして。

それも一枚3mくらいの木を切りまして、無理やり合めてポンと柱と柱の間に入れました。

オイルステンを約8回塗りまして、通気性が全然ないもので、一日いれば本当にシンナー中毒にかかる。

25日ぐらいで店を完成しましてやった次第です。

かかった金額の方は、一応18坪、坪だいたい30万かかるて540万円です。

あと、厨房備品だとかそういうのは自分が古いもの集めてたせいで、骨董屋さんで1把ひとつからげの安い値段で買いました。

反省としては、自分が木骨石造好んで好きでたまらなく好きで使つたんですけども、あまりにも建物に水こかれすぎて、建物の性質が全然わからなくて使つたもので、かなりいろんなものが生じた。

まず1つに、軟石ありますて、そして柱がありて壁があります。

そして、昔木柱の表側に壁板を打ちつけたんです。

それで柱と軟石の間に10cmくらいのすき間があるんです。

それがダクトといいまして、換気扇使う時に上から下まですき間を通りまして風がぐんと曲っちゃうんです。

だから、なんば地下でストーブを入れて暖めても、すき間から冷たい風が吹き上げてくるんです。

それから、夏涼しく冬暖かというのは、倉庫として使つてう時はそうなんでしょうけども、中で厨房へ火をたいてますと、それがもう全然反対になります。

そのせいでしょうけども、すかもりがすごいんです。

最初、軟石が鳴いてるみたいだつていう感じで喜んでたんですけども、とてもいやな感じじゃなくて、きました。

ドードーと上から下に軟石を伝えて水が流れます。

それから、軟石の風化が温度差とかすがもりのせいでもちよつと早くね、たよくな気もします。

それから、無理やり穴あけて給水、排水作つたんですけども、やっぱり今の防水の技術を使ってやつても、古いところに塗り管を入れて、まれりから昔と同じように防水し

ても、外から入つてくる水を防げない。

1年に1、2回は半地下がほとんど水びたしになるというような状態になります。

それから、中で火を使うということでお、昔は瓦の上にたま、た雪は自然にとけてなくなりそうなんですが、雪がそのままたま、て下の方が氷状になります。

これもたぶん、屋根に保温材を入れてないせいでようけども、そのまま氷状になつて、春になると瓦の形をした雪がそのまま落っこちてくる(笑)。

あとは、床が薄いせいか、歩く足音がかなりするということ。

そのぐらいが反省点です。ま、今度倉を使う場合は、日光のあるところをどうですか詳しくやってみたい、というのが本音です。

—越野氏

どうもありがとうございます。

では最後に小島さんにお願ひします。

小島さんは大変経験豊富でありますて、こういう再利用のコンサルタントでもやろうかというようなことを言ってるくらいですから、いろいろお話し聞けると思います。

お願いします。

—小島氏

小島でございます。

僕は5年前に仲間と小樽に来て、これまでに運河のそばの建物を2つ改造してます。

今、広田さんが言われた道府の建物の改造のようなプロの話とは全然反対の、要するに素人のやり方っていうが、何にも知らない人がやるとこうなるんだっていう実例を2つお話ししたいと思います。

それで、ともかく小樽に来たいきさつをしゃべると、5年前に来た時は冬で、思ったより建物が立派でびっくりしたという印象があります。

僕ら踊りの仕事で全国まわっていますので、こういう街が全國にあまりないってことは確かです。

それで非常に喜んで改道にとりかかったわけです。

別に運河のそばっていうのが全然意識しなくて、たまたまいに建物が運河のそばにあって、それを借りたということです。

まず、僕ら何やったかっていいますと、踊りやってますので古い古場を作りましたが、もう1つはそこに住む。

古い古場ってのは住む所ですから、古い古して住む所と、もう1つパツと建物見た時に非常に自立つと。

で、この建物は名物になるだろうということで、店をやろうという意見がありまして、小樽の人と協力してやり始め

たわけなんです。

倉庫の長所といふのは目立つといふこと、要するに小樽にしかないっていうことにあります。

短所としては、やっぱり住んだりする場所ではない。

それで、非常に改造しにくいことがあると思います。

僕らの場合は、大きな倉庫はムリでも、まあこれぐらいの倉庫ならできるだろうと。

それで、海猫屋は24坪の広さの3階建です。

叫兒樓さんと違うのは、全部レンガで、木の柱は入っていないことです。

で、とにかくレンガの箱がポンと置いてあって、それに横梁がわたしてあって、床が張ってある。

とにかくただの倉ですから、窓もないし水道もないしがスもなくて、便所もない。

それで、そういうことを全部自分達でやるために、まず何を考えたかっていうと、とにかくお金がないので、これだけの予算内で全部おさえようっていうのがあります。

24坪の3倍ですから72坪になるわけですが、初めはそれを大体300万円ぐらいでおさえてくれと言われたんで、どうしようかってことで、僕ら自分でやりますので人件費がタダにならわけです。

それで、あとは材料をどれだけ安くできるかっていうこ

とでですね、まあ遅ると泥棒になりますので、やっぱり拾ってくるしかないんじやないがってことで。(爆笑)

どこに捨いに行こうかってことで考えまして、いろいろ人に聞いた末に、小樽のいろんな古い家を壊したあと材木とか家具とかが全部天神町のゴミ捨て場に集まるっていう話を聞きました。

それで、トラックを借りてそこに行くと、次から次とトラックがやってきて、ガンガン捨てていくわけです。

で、ものすごく喜びまして(笑)、これでまあ100万くらいは浮くだろうと。

午前中は毎日捨て、午後は建築と。

で、吉い材料ってのは物もけっこういいし、釘抜かなくやいけないとかいうシンドさもありますけど、ちがまないとかそういういい点もすごくあります。それで何とかやったわけです。

具体的には、男4人が1日10時間から12時間ぐらい働きまして、3ヶ月かかりました。

それで、一番シンドかったのは、窓を開けるとかそういう構造的なことになると、僕ら素人なんでよくわからぬんですね。

ここに窓を開けるとちょっと危ないいやないかとか、その辺はもう一つの力こといいうが(笑)、ここに部屋作ればあけちゃえということであけま

した。

で、海猫屋の裏は窓だらけっていう感じになりました。それで、上を仕切って住居にして、2階を古い古場にして、1階を店と。

で、ちょうど1階作るのに1月かかって、それで6月にオープンした。

材料費が相当安くはないってのは、例えば、テープルなんかは、小樽の昔の商店の看板が大きな木でできてありますので、そういうのを使わなくなは、たのを安くもらってきて、切ってニスを塗る。

そういうふうに全部やったわけです。

誰がみてももちろん素人作り、てのはわかることで、ただそういうのも施りものになります。

ですから、僕らとしては店ができるまでいいわということで、いすとかテーブルとかは金ができた時に買い換えるべきで、とにかく作っちゃうっていうことが前提だ、たんです。

それで3ヶ月でとにかくやりました。

そのあと現在も営業しております、ずっとそこの2階でやってきたんですけども、やっぱり小樽です」とやりたいてことがひてきました。

それで、新しい古い古場がほしい。

で、店のならしてる音楽と

かかべんべんかがって、ちよつと踊りの雰囲気でもないというかうになりました。それで近くを探したところ、ちょうどあのころは三棟のショールームになっていた建物があぐ近くにあります。大家さんに話して、三棟が出た時に僕ら見にいって、空いてるので行ったわけです。

それでそこも借りたわけですかけども、家賃は、10回ぐらいたくさんにおねだりして、とにかく自分らで改造するから家賃安くしろってことで。

別にそういう理由はおかしいんですけども(笑)。

本当は広田先生のような方がおられたら一番良かったんですけども、僕の友達を建築の専門家だといって、おたくの建物はものすごくいい建物である。

由緒ある建物で、これは残さなくちゃいけない。

しかしものすごく腐っている。

床の下から天井裏までメナヤクチャで、今これに手を加えないとい非常に大切な文化遺産が失われるからというかうにあってもらって、それで家賃を安くしてもらうということがあります。(笑)。

海猫屋と違うところは、海猫屋は倉を改造して住居にしたけれども、今回は初めてから住居になってるわけです。

それで表側は店になつた。

大正8年に建てられた前堀商店という金物問屋の建物なんですが、ちょうど海猫屋を作る過程と反対ですね。

大体の具体的な数字だけ言つておきますと、相変わらず人件費はタダで、それで8ヶ月かかりました。

改造した坪数は4階建で75坪で、全部で800万円かかりました。

改造した面積は150坪ですから、坪で大体9万円ぐらいの値段です。

なんでこんなに安くできたかといいますと、相変わらず材木なんか捨いに行つたりしたんですけども、相当人件費を、タダっていうことを最大に利用した。

ちょうどこの時は夏で学生が休みだと、それで僕ら踊りの仲間が全国から集まつてしまひ、要するに小樽でこういうことをやるんだと、で、建物作るのはものすごくおもしろいと。(笑)

小樽ってのは北海道でいいところで、泊らしてやるから遊びにこい(笑)というふうに言いましてね。

夏は15人ぐらい男を集めまして、日曜日だけ泳ぎに行つたりして、あとで6日は朝の8時から夜の10時までムチャクヤに働いた(笑)、ということです。

それでもやっぱりできた時はうれしいわけで、そういう意味で彼らもいい勉強になつた(笑)ということを考えてあります。

運河のそばの倉庫を改造するということは僕はもうすぐ積成で、できるだけ協力したいと思ってるわけです。

それで、僕の建築哲学みたいなものをちょっとだけ言つていただきますと、建物を作ること自体がすごくおもしろいことである。

で、場所を持てるといふことがもののすごく強いと申しますか、1つの拠点が具体的にできらるわけですから、持てるだけで何物かである。

僕の具体的なプランは皆さんと違うかも知れませんが、大倉庫っていうのがあるんですけど、何か違うのに2億円ぐらいかかるらしいんです。

僕は金が全然ないんですけども、できればそこを買っていただきたい、劇場にしていただきたい。

大家倉庫ぐらいの広さの倉庫を改造して劇場にすれば、おそらく今、市民会館でやつてる建物の半分ぐらいはできるんじゃないかな。

いろんな街にいろんな市民会館、劇場がありますけれども、そういうふうな建物 자체がおもしろい劇場がある街は日本中にはないわけです。

どうしても、踊り手ですかう舞台っていうふうに考えちますけども、ま、こういうのが僕らの考え方です。

——越野氏

どうもありがとうございます。

このあと、まずここに並んでる4人の中でも、お互いに質問がありましたら。

——広田氏

これぐらいの規模になると、大規模な改修工事をやつたところでの用途を変えたということと、本当は建築の確認申請を出すなきやならないんです。

これから石造倉庫を何とかして保存していくというか、再生するといった方が私は正しいのではないかと思うんですが。

とにかく、道庁赤レンガのようにも重文の指定にならとか、野幌の開拓の村へ持つていいた小樽新聞社だとか手宮駅長官舎だとかは、道庁の赤レンガを除いては人は住まないんです。

ですから、もうもう問題になることもないし、治外法権的になってる部分もありますし、さほひ問題はないわけです。

しかし、小樽の石造倉庫の場合にはこれは何かに使っていかなければならぬ。

何かに使っていくということになると、その用途、それからあの地域の用途地域というのがありまして、どうもうちかがってみると工業地域らしいんですけど、一部には、中央橋から向こう側は準工業地の

かもしれません。

それから準防火地域にもなつてゐるようです。

そうなりますと、建物の用途によつてはみんなひっかかるやうということが起きえます。

そういうことを考えると、必ず行政のチェックを受ける。をうううとやはり相当難しいいろんな問題が出てくるのではないかかなあという気がいたします。

——越野氏

広田先生、この話はまだあとで議論するようにしたいと思うんですけど、今、さしあたりこの魚籃館の改修で法規的に問題になりそうなどころというのはありますか。

——広田氏

魚籃館のこの場所は、いったいどういう地域にならんでしようね。

商業地域ですか、だったら別に問題ない。

——越野氏

3階に住むと問題ですね。

——広田氏

洋舞のけい古場、練習場ですかね、そう問題はないです。

もし工業地域だったらなんかものがダメかといいますと、ホテル、旅館、待合室、料理店、キャバレー、舞踏場、個

室付きの浴場、劇場、映画館、演説または観覧所がダメということになります。

住宅にもなりませんし、非常に限られた範囲になります。

— 小島氏

倉庫で商売ってのはどうなんですか。

— 広田氏

店舗はいいんじゃないですか。

— 越野氏

運河沿い、あるいはもう少し大きめの石造倉庫の話はこれからけし議論しようと思っていますけれども、佐々木さん、何か小さいことで聞いておきたいことがありますか。

— 佐々木氏

今のところ別にないです。

— 越野氏

実はこの1月や2月ほど、私の研究室にも妙な人間が飛びこんできまして、小樽とか札幌の古い建物を使つて映画館にしたいとか、レストランやりたいとか、美術館したいとか、そういう相談にこられる。

さきほど言ったように、そういう希望も、今、大変強くなつてんだろうと思います。

で、それに答えるだけのものが僕に全然ないんですか

ら、いつも往生してしまうんですね。

今日、聞きにこられてる方もいろいろな方がいて、中にはそういう具体的な希望を持っておられる方もあるいはおられるかもしれませんし、いろんな意味で関心をおもちの方がおられますと私は思います。

この4人だけじゃなくて会場におられる方も含めて、いろいろこれから質問やら議論やらしていきたいと思います。

— 堀氏

広田先生に。先ほどの小樽新聞社の復元の費用の点で、RCで4万円かかるとおっしゃったと思うんですけど、あれは坪あたりの単価ですか、それとも平米あたりですか。

— 広田氏

平米です。これは、普通の柱がたつて梁がかかるって基礎があるてという式の、普通のリブタイプのRCの建物では、そういう骨組だけに今でしたら6万円前後かかると思います。

ですから、これは安い方ですね。というのは非常に單純な箱型へ壁式構造なんですね。それでわりといい安上りにできると思います。

— 北村氏

佐々木さんに。さきずがちりがとあっしゃいましたが、すがちりなんですか、結

露なんですか。

本当に屋根の上の雪が溶けて、それが瓦の間からもつてくるわけですか。

— 佐々木氏

いや、そういうことはないんですけども。屋根の雪じやなくて、屋根の雪が溶けて壁に伝わって落ちるんですよ、外側の壁を。

そして冬、夜中寒くなりますとそれが凍りつくんです。それが今度、中に入つてくるんです。

— 広田氏

先ほどの佐々木さんのお話を思い出していたんですけども、瓦屋根がきれいに残ってる倉庫が多いんですね。

で、瓦屋根には非常に傷みやすい、北海道では傷みやすいものなんですね。

ところがきれいに残ってるていうのはなぜだろうか。

私は、中で暖房しない建物つまり倉庫であつて外気温と同じような状態に中がなつてゐる、だから屋根の雪はあまり積極的に溶けない。

そのためには瓦が傷まないんだと思います。

もしこれが暖房し始めると屋根の雪がどんどん溶けて、それが軒先へきて氷堤をつくる。そうすると、そこから雪がもりがけず起きるという現象が現れるだろうと思います。

ですから、瓦れを使う時はもちろん天井の十分な断熱をしなきゃならない。

それから、軟石の厚さが30cmある人ですから暖かさうに見えますが、佐々木さんのお話のように、これは30cmありますても保溫的にはあまり足りにならん。

えれこそ冬寒く、夏熱いといふのは、それが原因だと思います。

特におもしろいと思ったのは、内側に柱をつけて、それには壁をはつて、そして下の暖気をドラフトさせるようにしてるらしいですが、そこから冷たい風がドンドン出てくるといふのは、逆に上昇するよりも冷えて重くなつた空気が下にさがつてくるということが圧倒的にきいちやつてる。

そういう現象で、家の中全体が寒いんではないかなあという気持ちがしました。

— 佐々木氏

広田さんに、小樽新聞社の復元で、在来と保溫工事で、在来の場合は木造石張りですね、保溫工事では木造の部分をコンクリートで上から固めたわけなんですか。

— 広田氏

鉄筋コンクリートの壁しつくいといふんですか、柱のない壁と床のつながつて、そういう箱をまず1つ建てまして、その外側に持つていった

石を全部張ってある、ということです。

——佐々木氏

木造石張りの、木造の部分はないという……

——広田氏

木造の部分はなくなったわけです。そして、内側から見れば昔と同じように見えるが、その中身は木造ではなくて出来てる。

——佐々木氏

それから、京都の中京郵便局と同じ方法で復元したと。

——広田氏

そうです。

——越野氏

少しずつ話を広げてゆきたいと思います。

先ほどから、運河沿いの大きな商業倉庫——石造倉庫の保存に關係してお話を聞いてきてます。

ここにお集まりの方は、小樽の石造倉庫の保存、あるいは再生、再利用などに大変関心があまりかと思います。

小樽の石造倉庫というのがどういうふうになつてゐるのか、ほとんどの方は良くご存知かと思いますが、ちょっと簡単な圖面用意してきましたから、それを張つてながら議論していくたらと思います。

ここに張り出したのは、小樽にある商業倉庫の断面図を簡単に書いたものであります。

中央が10m、80mぐらいで6間、ここに床がありまして、これが木の梁です。だいたい2間半、4m50mぐらい。

これは小樽倉庫株式会社の倉庫の1部の断面図ですが、まあ小樽倉庫に限らず、大体こんなふうになつていいかと思います。

小樽の石造倉庫と普通言いますけれども、広田さんの小樽新聞社の話で出て来たように、建築の構造の考え方からいえば、実は木造なんです。

外側に軟石が張つてあって、その内側に木の柱がたつてゐる。で、屋根も木造で、元々はほとんどが瓦ぶきだったんですけど、一部鉄板に変わつていた。

この力を受けてるのはあつぱら木の柱で、本体は木造だというのが小樽の石造倉庫の姿です。

これが、小樽新聞社のようないい例ではないことはないんですけども、再利用にからめて本格的にやつている経験をつんだ方がいいというのは非常に美しいわけです。

従つて、いわば何にもないわけですね。これから研究課題、それをここではどうしたらいいっていう答はたがん出ないと思うんですけど、いろんな問題がある、あるいはこういうことは必ず持ち出すえなければならぬ、そういうことはいろいろ出てくると思うんです。

そんなことを残りの時間、少し議論していいたらどうかと思います。

先ほど広田さんが話されたように、例えば法規。

日本のいろんな建築關係の

法規1つとっても、とにかくその法規の規定では違法ということになりますから、いろんな問題も出てくるといふようなことを含んでいろいろわけです。

それで、これをどういうふうに使つていつたらいいか、あるいはその時どういうふうに補強なり改造なり、あるいはこれまででも使えるとか、そういうことが元来問題でありまして、そういうことにちゃんと経験をつんだ人間がいれば、別にこんな議論をする前にちゃんと初めにしゃべれるわけです。

実際に、小樽新聞社のような例はないことはないんですけども、再利用にからめて本格的にやつている経験をつんだ方がいいというのは非常に美しいわけです。

従つて、いわば何にもないわけですね。これから研究課題、それをここではどうしたらいいっていう答はたがん出ないと思うんですけど、いろんな問題がある、あるいはこういうことは必ず持ち出すえなければならぬ、そういうことはいろいろ出てくると思うんです。

そんなことを残りの時間、少し議論していいたらどうかと思います。

先ほど、法規のことを広田さんからしゃべり始めましたから、もう少し補足してくれてくれ、こうです。

——広田氏

さつきも申しましたように、全体的に準防火地域がかつていて、それと用途地域が工業地域であるとすると、さつき、たよだな建物は建ててはいけないことになっている。

何に使うかということを、まずその辺から模索しなけりやいかんのじやないか。

店舗のようなもので、500m²までのものでしたら、これは特殊建築物という扱いを受けないですむ。

そうすると比較的楽なんですか、そういう店舗等で、大家倉庫みたいに、あるいは大同倉庫みたいに巨大なやつは別にして、その他のものはどのくらいの大きさがあるかなあと思ってるんです。

は、まことにわかりませんが、間口が6間とか8間ぐらい、奥行も12、13間ぐらいのものが多いのではないかなあという感じはしております。

そんなことで、70坪位にあっても230m²ですか、500m²あるものはめったにない。

だから、そこに書かれてる程度のものであれば、店舗にはこうの例はなくなる。

もし店舗にするんだと、準防火地域がかかるりますから、簡易耐火構造という構造制限がかかる。

そうすると、どうすればいいかというと、外壁がたまたま駅石積みで、耐火的には非常にしっかりしてるので、こ

れを行政の方が耐火構造だといふ場合に認めてくれれば、あとは隣からの延焼のある部分を、屋根を防火構造にするということをやれば、あとは上の方は金屬板がいい。

野地板も木毛板ぐらいでよさそうだ。

そんなことであれば、きかめて樂になるという気はいたします。

ただ、さっきもちょっとかくれましたが、基礎が杭打ちであった。その杭のまとは、今はもうみんな穴になっちゃってる。でなんとなく不同沈下もおきている。

あるいは、大体どこでかい石を外側に使ってはありますか、屋根の荷重や何かを支えてありますのが内側の木造でして、その木造が傷んでますと、外側の石はどうやら自立はしますが、大きな地震でも起きると逆に木造の負担になる。

荷重になってかかってくるというようなことがありますから、構造計算をチェックし直すというようなことになると、これは木造ではとてもダメだという話が出てまいります。

恒久的に、本当にしっかりした建物にしていこうというならば、私はいったんバラして、そして鉄骨を立てることがあるいは鉄筋でたてて外側に軟石を張りつけるというのが一番手堅い方法だろうと思います。

が、そういうことをやりまと、それこそ小樽市に負担がかかっちゃう、かなりお金かかるということになります。

本当にもっと、用途を決めておいて、建物の大きさを決めて、法規的にどういう所が問題になるかということを、一つ一つ検討しなければいけない。

——越野氏

あまり一般的な話をしてもダメで、例えばこんな場合には使ったらどうかというのがあれば、それに対して、構造的にこうしたらいいとか、法規的には違反だとか、そういうふうに多くわかつてくる。

おそらく建築家、専門家の方は大体そんなふうにあ考えにねるんだと思いますが、具体的に話を進めていきたいと思います。

佐々木さんね、例えばこんなように倉庫を使いたいというようなことを、無責任といいですからパートとあげてみてくれない。

こんな場合にはしたら使えるないかなというようだ……

——佐々木氏

今、現実に倉庫の中では鉄工所だとか、そういうものを営業して、溶接したり切ったり曲げたりしてるんですけども、もっと工芸的なもの——小樽工芸センターですか、ま

ず、まあいうものを持って来てまして、高さがありますから中2階みたいなものを作りまして、工芸品を作ってる作業を見られるようだ、2階に回り廊下なんかあって、その中にユーピーでも立ち飲みしながら、ピールでも飲みながら、そういう作業を見れるようだクラフトセンターなんか、本当は上げるだけじゃなくて、現実に作っていきたいなあとは思っております。

——越野氏

小島さんなんかどうですか。先ほどは劇場の話をしましたが。

——小島氏

これだけたくさんある所ですから、一つだけ借りるっていうのが手堅いと思うんです。

街ぐるみで保有っていうよう

に、全部を博物館的にする。今ある博物館を運河のそばに移してくる、そして図書館ここに移す、劇場もある、それに佐々木さんの言われた工房もある。

何というか、小樽の文化というものが集まってるわけですね。

今、文学館とか美術館もビルの中にありますが、そういうものもここにもってきて、ここに来れば小樽のことは大体わかるというふうにしたらいいんじゃないかと思います。

——越野氏

広田さんね、今、仮りに広田さんの事務所にクラフトセンター、博物館、文学館、図書館、それから劇場とか、相談でも受けたとします。

すぐま、先に出てくるような問題で、こうしたらしいといふ提案、こんなものがあるとかお話しいただきたいんですが、何がいいかしら。

劇場がやっぱり最高の問題問題になりすぎるとかしら。

——広田氏

劇場は問題ですね。私も法規じゃないもんですから自信がちよつとないんですが、とにかくダメとはっきり書いてあるのはダメなんだと思います。

もう一度言い直しますけども、工業地域内に建築してはならない建物は、ホテルキタは旅館、待合、料理店、ヤバレー、舞踊場その他これに類するもの、個室付きの浴場兼にかかる公衆浴場、劇場、映画館、演芸場、または観覧場、学校、病院とこうなるわけです。

何かやりたいものは皆ダメみたいな感じには、ちゃうんですよ。

——佐々木氏

工業地域ですか。準工業地域ではないですか。

——森下氏

小樽倉庫までは準工業地域

で、それから北の方は工業地域です。

— 広田氏

私、この間、このために運河をちょっと歩いてみたんです。

で、その時思ったのは、1つは運河が湾曲していて、そしてピスタに当っている。

それと、日本の古い街並みにはよくあることですが、白壁の腰がなまこ壁とか板張りである倉庫がずっと建ち並んでいるというやつは、北海道にはあまりないんです。

それがここにある。

その建築的なおもしろさは、倉庫1つ1つでは何をおもしろくない、あまり凝った建物があるわけではない。

小樽には、たまたま大家倉庫のように立派なものもありますけれども、その他の倉庫は大したことはない。

そういうものが軒を接して、三角の妻をずっと並べている、それが見過せるというところに、私は運河沿いの町並の良さというものがあるんだと思うんです。

それをいいじくって、中を開引きしてみたり、その間引きしたところに何か別の、全く異種の建物が建ってみたり、倉庫の外壁に窓をやたらあけてみたり、というようなことをし始めたと、本当に良かったものがすっかりとんでしまいやしないかという気がちよ

うとしてるんです。

そういうことからいうと、全部が同じものではなくてもいいけども、かなり接近して建ってるという感じの倉庫群が2棟なり8棟なりあって、空閑地があよっとあってというぐらいになってると思うんです。

これも運河全体の1,300mにわたってやったら大変な投資になるし、そこに一体何をやるかというと、さらに大変なことになる。

そういうことからいうと、運河がずっと連続して湾曲してるというところは割愛をして、残念だけれども、あの立派な博物館付近にしづかて、500mぐらゐの運河と倉庫を再現してはどうかと。

その方が、ずっと実現性がありそうな気がしてるんです。

— 森下氏

逆にですね、例えは劇場を作るとあるとすれば、それが建てられるような用途地域に変更すればできるわけですね。ですから、その可能性があるかどうかっていうのが一つの課題にならうと思うんです。

あと、今回の研究講座の第1回目で越野氏が、あの方いろいろと商業的には建物をずい分建てられてるんですけども、その方の目から見て、例えは小樽倉庫くらいの大規模なものでレストランにすれば経済

的にも十分ペイするんじゃないかというようなことをお話ししてくれたんですけども、現在の用途地域その他指定で、レストランというのはどうなんでしょうか。

— 広田氏

あの料理店っていうやつですか(笑)。

僕はダメだろうと判断します。大きなやつ、てのは500m²をこえたりしたら、とっても石造倉庫のままで一石造の中に木造がある今までというのはできないんじゃないでしょうか。

— 北村氏

小樽倉庫っていうのは、真中に事務所棟が建ってまして、1番倉、2番倉、て名前がついてまして、もともと中庭にあった、たような部分にも屋根をかけて倉にしたりしてますけども、パッと見れば1つのものなんですが、それを何とか6つもののに分割するという方法はないですか。

— 越野氏

広田さん、今500m²というものは一敷地内ですか。

— 広田氏

もちろんそうです。

— 越野氏

防火区画で分けることはできるんですか。

— 広田氏

防火区画で分けるっていうのは困るんじゃないですか。

建物の面積でいいですかね。もしされを500m²以下にしようと思うなら、チヨン切れればいいだけのことですね。

ものを小さくしてしまうわけなんです。

— 越野氏

今的小樽倉庫に関していうと、例えば6間の、1番大きなので20間ほど、120坪。

— 広田氏

それならいいんですよ。それが2面に分かれてるわけですよ、ですから、1つ1つのものにすればいいんです。

そういう具合に敷地を分けたらどうかとダメですが、ただその敷地が今決めた建ぺい率を、分けてもオーバーするんじゃないまた問題になるでしょうね。

— 森本氏

去年の運河講座で、旭川の五十嵐さんがみえまして、あの運河地域を手工業の町にしたらどうかということを、ガラス工芸とか、今言われている手工業を全部もってきいたらすばらしい町になるという構想をおっしゃられたんです。

今、いろいろなお話しを聞いてますと、工業地域、準工業地域、それからその中に文化施設がどう調和していくか、

それから、中には市場を作りたいという人もおりますので、そういうもののいっさいが、あの地域はどう調和できるものなのか、できなーいもののか、もしわかれりでしたら。

— 広田氏

手工業みたいなもののは、たやすく工業地域のままでなると思います。それから店舗ですね。

そういうチ工業の工場で作ったものを売るような、店舗のようなものも可能だと思います。

この辺になりますと、小樽市の怒口がどういう答えをだすかね。

私がここで言ってても、いやをんなのはダメだ、と言うかもしだいので、私はそれを市への建築指導課の人を入れて話しあってみるべきだと思いませんよ。

それから、先ほどの森下さんの話の中で思つたのは、全域にわたるような大きなことじゃなくて、半分なり三分之一なり考えて、そしてその地域を公園化するとか、その中に倉庫群がある、博物館もある、そういうことをエッキ言つたんだです。

工業地域を變える。それを500mにわたった旭橋のあたりから一番奥までですね、あの地域を限って全部を工業地域からはずして、そして公園のようなものにして、中にあ

る建物にそれで人が住んで、手工業やるのもいいでしょうし、店舗やるのも料理店もいいでしょう。

博物館まで含めて、もういきれいな地域にしてしまう。

— 越野氏

いろいろ法規的な問題も現状ではありますし、小樽市も現在運河公園構想というのを出してるということは、当然用途地域の指定変更がなければできないことですから、基本的には現行の指定地域で考えてもしようがないことなんだと思います。

あの地域が用途地域に指定された時から現在まで、ずい分変わってるはずですし、将来計画が打ち出されれば、それに応じて当然考えていくということだと思うんです。

— 石塚氏

先ほど広田さんの方で、非常に大胆なご提案があつたんですねけれども、広田さんはお仕事が物をとったり持ってくるのが頭にこびりついで、しゃりんじやないかという気がするんです。

小島さんの話、興次郎さんとの話、合わせてみると、移築とか、あるいは非常に手をかけてしがりした形で建物を再利用するといふのは、小樽にはちょっとそぐわないんじゃないかな。

例えば京都の中京郵便局の

話を越野先生からうかがいましたけど、あと私の知ってる範囲では大阪中の島で日銀をやはり同じような形で外壁を保存するといふことで大工事をやっておりまして、何がそういうことがやれるのは、開拓の村もそうですが、規模の大きな京都市とか、大阪府ですか、あと北海道であるとか、力のあるところがバーンとやるような感じの種類の再利用じゃないかと思うわけです。

小樽の場合は、歴史的な経緯を含めて、何かこれから新しい動きを作り出すなければいけない。

そういうバイタリティを必要としている町だと思うんですけども、そして財産が歴史的な遺産としてあるわけです。

その中で小島さんのように、あの手この手を使って、あと手弁当で再利用するとか。

そうすると、小樽の今もっと市民の力でも、十分に遺産を現地で保存する、再利用するとかができるんじゃないかな。

小樽新聞社の例のよう、移築費用もあわせると坪50万円以上かかるといふのはできないわけですから、現地での手この手を使いつつ、行政の方にはちょっと片目ぐらいつぶっていただかないといふ感じですか(笑)。

そういう形で一丸としてや

れば、小島さん、興次郎さん、あるいはここに出席されてる方、ひいては小樽の市民の方々が夢に描いている、小樽は全国に誇れる遺産を生かした町だと言えるような町が、初めてできるんじやないか。

あまり固苦しく考え始めると、何か出来ないことすぐめで、小樽の町に分不相応な考え方になるんじやないかなどいう気がするんです。

— 越野氏

僕も最初に言ったように、古い建物の保存・再生っていうのは、ものすごくいろんな範囲のいろんな考え方があつて然りなんですが。

今のお話の中では、そういうればケリラ的なのものがなければダメだとおっしゃったけど、それだけでもないんですね。

一方では、主要な倉庫は指定文化財にしてきっちり残すというのも絶対必要だと思うんです。

全部と同じことやろうと思うと全然何にもできない。いくつかはちゃんとやる、いくつかはケリラ的にやっていく、そういういわば多面戦術を考えていくべきだと思うんです。

— 広田氏

中京郵便局、野幌の開拓の村、それに明治村にしても、ずい分お金をかけてやってる

わけですが、それはきちんとした復元をやろうと、ほかが構造的にも安心のいけるものとすることを考えるからそういうふんにしてね。

レンガの壁にボンボン穴をあけて窓にしたという、それは今後は何でもなくとも、いつか大きな地震がきた時に、そのことが元になつて建物が崩壊するということはないで

すから、結露やすかもりの問題があこるというはエネルギーの非常にムダな消費をやってるはずなんです。

そういうことも気にして作るべきだと思うんです。

建築基準法はオールマイティではありませんけれども、構造的な安全性とか防災上の安全性とかいうものの最低を決めてものを考えてるわけですが、そういう精神を忘れるることはできない。

手作りは結構だと思いますが、キッチンとした建築の指導者のもとに手作りはおやりにならべきだと思います。

ことに石造倉庫は、基礎の杭がんてもへはもうすっかり腐ってるだううと思います。

構造的にはよく吟味しないと、本当にいつどういうことが起ころか。

この冬倒壊したというような危険は、常にはらんでいると考えたまやならないんじやないでしょうか。

——越野氏

高くつくというのが大変問題なんですけれども、その辺の分かれ目の1つは、同じようなものを今の技術で全く新しく作った時にかかるお金との比較になると思うんです。

新しいものを新築した費用と、それにいわば見あうかどうかです。

例えば石造倉庫を使ってマーケットを作る、あるいは展示場を作る。

そういうような時に、1つは新築ということが考えられるわけですけども、その新築費用とのフリ合いかと思います。

それ以上バカみたいにかかるんだと困る。新築と同じかそれ以下ということであれば、十分可能性が開けてくる。

——広田氏

さつきのマサチューセッツのあの安さは、私はどうも異常だと思いますね。

暖房、電気、水洗便所、えうい、衛生器具、排水等を一応整えると、今ですと10万から15万円では常識だと思います。

それをいくら安くやろうとしても、4万や4万になつたりはしないんじやないかと思います。

そういうことからいふと、アメリカの例は設備費にも満たないようなものでできてる。どうもどこか變な人ではな

がなと、今だに眉毛につけます。

——越野氏

それは僕にも全然わからぬことなんとして、それこそ現地へ行つて調査してこないといかんない。

——北村氏

今日のサブテーマに關連して、今まで体験談や制度的な話、技術的なお話をうかがってきましたけれども、最後にあたって、その誤題をこえていただきたいという気がしました。

広田さんでいらしゃれば野幌であるとか赤レンガであるとか、せせらういうものを残さうとするのか。残すことに何の意味があるのか。

あるいは、越野さん、広田さん、佐々木さん、小島さんにして、小樽運河のみの近辺の街並みへの良さを評価されまわけですが、それは一体どういう意味の評価なのかな。

いわば、その哲学に近いようなもの、そういうった部分のものが、経済的、技術的、制度的な制約をどうニーズしていくかれるのか。

そこでは、どちらが安い高いという問題だけで決着がつけられる問題なのか、制度の中で何が出来るかということだけの問題なのか、あるいは技術的に難しいからおきらめる、易しい方法を遺ぶという

ことで、建築であるとか都市であるとか風景であるとかいうものを決定していいといふのか、というところを非常に疑問に思うわけです。

ある面、小島さんの、この建物は人目をひく、名物になるだろうということや、佐々木さんの、自分はとにかく好きなんだということにも何らかの手がかりがあるのかも知れません。

今、世の中、高度経済成長から低成長経済、あるいはひょっとするとゼロ成長経済へ移行しようとしている中で求められているものは、制度的、技術的、経済的課題をこえる何かあるのか。

それは美意識なのか何なのか、いまだ漠にはよくわからないんですけども、そこいら辺の問題を少しお話しいただけたらうと思います。

——越野氏

おっしゃる理論でいえば、僕の方は道に誤解してまして、だけども制度や技術が保存するしないを決定するというかうには全く考えてないわけでして、保存・再生するための制度にどういうことがありうるか、どういう問題があるかをはっきりさせよ。

そういうことが今日のテーマだと僕は了解してるのであります。

ただ道に今の話を聞いていて、少なくとも建築家、いわ

ば専門家の側に、例えば技術17をとつても、いくつもまだ課題があるんではないかと僕は思っています。

先ほど広田さんの話で、法規の精神ということを話されて、何かやる時にはそういうことを考えなくちゃいけないし、その場合に当然建築家なり技術者が相談に乗らなければいけない。

そういう時に正確に答えられる技術を、一般に建築家は持っているっていうか、そういう技術体系が多めともできてるという状態にはない。

それから、少なくとも技術者や建築家の側でいえば、問題にはるんじやないかと思っています。

—小島氏

僕なんかの考え方とは、倉庫を借りよう、どこ借りようが、そこで何をやるかっていうのが一番大事なわけです。

僕は、いい建物はけい古場にしたいと思いますけども、何かやりたいってことが一番大事であって、だから僕は建物と人とくらべれば絶対人だけっていう考え方なんですね。

運河の倉庫が1つ残らずなくなっちゃって、まあ人間は滅びないっていうか、そういう考え方でやってるつもりなんです。

ですから、具体的には何か借りるっていう話かあって、そういうことで広田さんなり

越野さんなりがしゃべるのは当然だと思うんですよ。

えこひをういうふうに聞かれるのは、ちょっとジャンルが違うんじゃないかな。

かえて僕の方から主催者の方に聞きたいようなことなんだよね。

—越野氏

最初におことわりしましたように、まとまりがとうていつかないことがとも思います。今、最後に出たやりとりぐらいをさしあたりの結びということにして、ひとまずこの辺で閉会にしたいと思います。

第5回 風景の創造

—社会と文化の再建をめざして—

昭和56年6月20日
於小樽市労働会館

機的生命体であると捉える自然観、というのを私は勉強してきたんです。

専門的には、18世紀のドイツの啓蒙家ヘルダーという人があります。

ヘルダーの思想を勉強しておりましたと、クリマという言葉が表わされる思想が出てきます。

英語でclimat(気候)。クリマというと、もう少し広く、風土とか環境を指します。

ヘルダーはそれを非常に重視するわけです。

人間をつくるのはクリマである。気候を含めた風土性といつていいかと鬼います。

自然の中に働く有機的な力である、というのです。

きれいに花が咲く。それは種の中に予め備わった力があつて、その力が次第に發揮されて花となつて咲くんだ。

宇宙のあらゆる所にそういう風な力があって、そういう自然の内奥で偉大く造形力が、人間をも、被造物の中でもかよう精巧な、見事な生き物に上げたんだ。

そういう考え方、これは、ゲーテにもありますと、その

講師紹介が終わって、

—花崎氏

ご紹介に預りました花崎昇平です。

私も良く小樽に参ります、今日も少し早く家を出て、運河の方を見て、それからここに伺った次第です。

小樽運河の問題には、段々後の方で触れさせて頂きたいと思います。

少し迂遠な所から、私が関心を持ち続けてきました、人間の生き方、思想、そういう所から、お話をさせて頂きたいと思います。

私はドイツ哲學を勉強しまして、中でも自然観に強い関心を持って参りました。

資本主義的な近代の始まる初期には、自然観についてのせめぎ合い、争いがあったわけですね。

一つは機械論的自然観、例えば時計じかけのようないく間に自然を見たてて分析し法則を見していく、後に隆盛になり、近代自然科学を養ってきた自然観。

これに対して、左くさいとされてきたんですが、有機的自然観、自然全体が一つの有

喫のドイツでは非常に有力な一つの考え方であったわけです。

自然というのには、ある神的な力、人格神ではないが、神的な力が働いて、非常に調和のある物に造り上げられていく。

人間の思考力もそういうものに吸ってつくられた。

だから人間は人間性を完成する事で自然の造形力を讃美し、そのために働くなければならぬ。

そういう考え方につながっていくわけです。

この思想の中には、人間の理性と感情、知恵と情、を切り離さないで一つの調和したものとして見る。人間を丸ごと見るという考え方があつたようになります。

その中では、哲學も単に論理を辿るのではなく、人間の趣味、美的感覚を大事にしておりました。

人間の鬼性、行動、感性、この三つが、風土の中で生きる習性、習慣の中で養われ、その結果として自然に流れ出てくる快さ、そういうものとして「趣味」の重要さを非常に強調したわけです。

その後、学問の分化と共にそつした統一性は失われがちになつてまいります。

ただし、予定調和の思想は世俗化して、結果、弁証法的唯物論へつながります。

こういう思想がヘーゲルを

通つて、18と19との歴史を通してマルクスへ伝えられます。

マルクスは自然を私有化するマイナス面を非常に鋭く指摘するわけです。

対象を私有して初めて所有の実感を得る。

自然を生活手段として私有した時に、それじゃあ何を目的としているか、私有財産を持つ事自体が目的になつてゐる。

そういう風に私有財産といふものは、我々をひどく離かにする。

だから、私有化しなくても所有するという感覺を取り戻すために私は、私有財産を否定しなければならぬ。というのが若い喫のマルクスの考え方ですね。

より高度の所有意識にかかる事によって、はじめて人間が完全に解放される。所有から自由になつてはじめて、本来的な美の感覺が取り戻せるんじやないか、と。

後には、個人的所有を取り戻すためにこそ公共の財産は公共の所有に、と、個人的所有的持つ意味を再確認する思想へと成熟していくわけですが、それにしても、基本的な筋は変わつてない、と思ひます。

近代が矛盾を孕んでくる、それを批判する、そういう自然観の一つの側面を、今述べたわけですが、こうした

有機的自然観は最近、自然科學の発達の中からも見直されてきています。

一つのシステムとして環境を捉えるという考え方には、明らかに有機的自然観につながるものを持っています。

まあ、そんな事を勉強してきたわけで、機械論的自然観に対する非機械的自然観の脈絡を辿ってきた、そういう關係で、環境問題に対する私の基礎的な関心というのにはあつたといえます。

もう一つ、環境問題と係わるようになつた契機は、現実との触れ合い、取り分け住民運動との触れ合いの中で沢山の事を教わりました。

それは、私が71年に北大を辞めて、只の浪人になつて、人生の大転換にぶち当つた。

40才になる喫ですね。丁度この22日で50才になつて了うんでですが、私は東京生まれで、北海道は「仮の宿」という氣もあつたんですけど、何となく北海道に住みたい、で、もう少しちゃんと見て知りたいという気を起こしまして、色々な所へ行ってみたわけです。

半年ばかり、そうして歩いているうちに、期せずして伊達で火薬の問題にぶつかって係わりを持つようになつたわけです。

伊達を基軸として考えて、今度は三里塚に人ごとなづね思いを持つ事が出来ますし、水俣とか沖縄とか段々、自ら

向いてきますし、足も運ぶようになりました。

ま、そういう現実との接觸との中で、住民が守ろうとしているものと、それを変えようとしているものの対立の深さ、その中に含まれている問題の重要さ、という事を教えられたわけです。

大体、その二つの流れがありまして、風景という事、と自分の思想なり生き方とを結びつけて考える、という事をし始めたわけなんですね。

風景という言葉は、この小樽運河研究講座の中でも何人の方々が使ってらしゃいますが、私も大事な言葉として使っています。

私が風景という事に気がつき始めたのにちは、幾つかの素材があります。

一つは三里塚で、もう十数年前ですが、座談会を本にしました「壊死する風景」という本がございました。

そこで、20代の三里塚の農民たちが色々な話をしているんですね。

それは非常に豊かな思想的契機を含んでいます。丁度この運河講座の記録と同じように面白いものですが、中でもとりわけ、シマさんという人が言つてゐる事が大事なんですね。

「ここに住みついだ何千人の一切が土の下に権力によつて埋め込まれ、ちゃうわけだからな、絶対そうはさせないぞってところが、今の恰

を克えていいるたつた一つのものだつて感じだな」

空港の政治的位置づけが、どうこうというんじやなくて、それが唯一のものだつていうんですね。

「俺等にとつて郷土、ていうのは守るもんじやねえ。土地だつてそうだ。守るなんてそんな軽いもんじやねえって気がするんだよ」

と云うわけです。

そこには、百姓の恨みがこもつてゐる。守るなんていえない程に、重たいものが詰み合つてゐるんだ。

このような議論がそこではされて、その中で、色々な説が、例えば、お墓の説が出てくるんですね。

「大体、お前、ここならよ先に天神のお墓が待つてゐるとかつていう事があつて、あの高川所で見つかるわ。とかよ年寄りがよ、そう云うべ、それもねえもの」

つまり自分達の住んでいる所にお墓がある、お墓が待つてゐるとか、そこで見つかるとがですね、そういうところに風景の意味を置いているんですね。

「一人の百姓が抹殺されてバニザイって、政府のいう歴史ができる。バニザイ、バニザイ、て歴史が流れしていく。政府にとつてのバニザイ。歴史はバニザイしたまま流れていってるんだ」

日本が空の玄関として一番

機が飛び立つていく。

で、一人一人の百姓が全部抹殺されてしまう。
それが絶対に口惜しいんだというんでですね。

「開拓の歴史、百姓の歴史、俺達自身が大事に受け渡していってよ、さらに俺自身が、腹にしっかり持つていかなくちゃ」

政治とは、いつもそういう事を明らかにしない、そういう構造になつてゐるんだと云うんですね。

で、それに対して異議を唱えたい。

そのような言葉で風景が語られてゐるわけですね。

で、風景の変え方にも二つあると言ふんですね「みんなで開墾して農地にしたら風景は変わるわけだよ、滑走路が出来るのと、麦が出るのとじゃエライ違ひだ。空港とか何とかよ、全然、人間じゃあめえよ。一つの欲が変えた風景だからな。それと、本当の人間が変えた風景は違う」

こういう答えに私は大変大事な事を教えられたようになります。

で、繰り返しシマさんがいうのは歴史なんですね。

歴史を負うて生きている。歴史というのは、そこで悩んだり悩み合つたり、泣いたり喜んだり、それら全体を含んだ歴史であつて、それが風景を作つてゐるんだと。

そういう考え方には三里塚だ

けのものではない。

木俣を石井道子さんが書かれた中で、やはり非常に深い意味を持つ、たものとして、風景というものが語られてゐるわけですね。

彼女の言葉で言えば「下層民」ですね。

下層の民が百年位の単位でゆうゆうたる歴史の中で生きていく。

そういう人達の情念が織り込まれたものとして、木俣の風景というものが語られてゐるわけですね。

そういうものが一番深い所で人々の感性を形作る。そう言ってもいいと思うんです。

3番目に私は、さつき申しました伊達の、特に有珠という沢の漁師達と海との闘わり合い、という所で風景というものの変化に自覚させられました。

ここに、有珠ミノルさんという外科のお医者さんがおりまして、殆んど全生涯を投げ盡すような形で運動をされてゐる。すけれども、彼の生き方を、私は、自分の風景を持った生き方である、という風に見たわけですね。

自分の風景を持った生き方というのがあると鬼うんです。

身の回りの、歴史を含んだ自然や人との接がありを生活の中に積極的、自覚的に取り込んで生きていく。

自分と他者との境い目が溶けていって、水がしみ込むよ

うに自分が広がつていて、他人とか環境とかに自分の延長を感じて生き方。

こういうものこそ、あらまほしい、豊かな生き方だと感じるよう特に、この安保以降の10年に、なつたんですね。

もう一つ「風景」を考える時に、フランス・ファン、アルジェリア人ですが、彼の思想「橋の思想」というものも各地の住民運動の中でも、繰り返し語られ、生かされてきた思想だったと思ひます。

そのさわりの部分を読んでみます。

「一つの橋の建設が、もしそこには働く人々の意識を豊かにしないものなら、橋は建設されぬ方が良い。

市民は徒歩通り泳ぐか、渡し舟にのるかして川を渡れば良い。

橋は空からひつて湧くものであつてはならない。

社会の全景に、機械じかけの神によつて押しつけられるものであつてはならない。

そうでではなくて、市民の筋肉と頭脳から生まれるものだ。

成程おそらくは、技師や建築家が必要になるだろう。

それも時に一人残らず外人であるかも知れない。だがその場合にはも、市民の砂漠の如き頭脳に技術が浸透し、その橋が細部においても全体としても市民によって考へ直され、計画され、引き受けられるようにすべきなのさ。

市民は橋を戦物にすべきなのだ。この時初めて一切が可能になる」

「どううんとすね、で、それに先立つ所では、

「後進国において重要な事は、白人の人間が考へ、決定する事ではない。

たとえ2倍、3倍の時間をかけてようとも、全体が理解し決定する事が重要な事である事を経験は証明している。

実際、説明に要した時間、働くものを人間化するのに失なれた時間があるとしてもういう時間は、ことを成し遂げる過程を取り戻されると書いた。

人は何處へ行くのが、何故そこへ行くのか、を知らねばならない。

と書いています。

こういう所に、大衆の政治化、市民の政治的自覚の次元を大切にする。彼の思想が表われていると思ひます。

アルジェリアは當時、フランスの植民地だったわけですが、

その当時、フランス人にヒトて原住人は人間じゃなく、自然の背景の一部にすぎないか、だと彼は云うんですね。

植民地支配者はヒトて自然というものは敵意に満ちたものである、た。

マラリア蚊。未開墾地。風土病。こうしたものと同じレベルで原住民を捉えていた。

かかる強情な自然全体を屈服させた時に、植民地化が成

功するわけです。

未開墾地を横切る鉄道。沿地の干涸。原住人の政治的經濟的排斥。つまり黒人は人間としての存在を認められないわけです。

立っている木と同じ、物と同じ、マラリア蚊と同じ、そういう風にして開拓を行なわれるのがオニ世界の実情です。

それをひっくり返すには、橋は、橋として便利であるから必要なのはなく、市民が市民として自らの人間化、に向かって奉仕する時にのみ橋は必要なんだ、として、開拓に対する思想のひっくり返しをしたのが、フランス・ファン

ンという人です。

「橋の思想」のフランスと

アルジェリアの関係は、実は

明治百年の日本と北海道にも

あつたのではないしょうか。

先住民たるアイヌの人々

はフランス・ファンのいう非

存在化されて来たのではなくか

、だと云うべきか。

そのような思いを、私は非常に深く持つわけですが、

「橋の思想」は、生活の實

という事と深く結びついてく

るんですね。

どういう生活が、人間化さ

れた生活と言えるのか、ただ

利便とか効用とかを超える視

点、価値観があるんだという

事を教えてくれている、と思

うわけです。

こうして「風景」という事

を考えながら、実際にも色ん

な事をやってきました。

伊達火薬の強行着工の時、機動隊がきて、ブルドーザーがニラ畑を掘り起こしていく。

それを、そこに長年住んできたアイヌの人達は、自分の皮膚をかきむしられる、なんな痛みを受けて止めているんですね。

そういう事に感觸を受けた事もあります。

伊達火薬の運動の中で、電気料金の一部不払いの運動を札幌でやりまして、暫く電気を止められた事もあります。

電気のない生活をする、これは或る意味で非常にいい経験でした。

というのには、共に困る仲間

というのが見えてくるんです。

そこで一戸毎の生活の様が外れて、生活の交流が深まってくるんですね。

それに便利さが減るという事は、その分、生活にかける労働時間が増える事だ、そんな事も分かってくる。

統括権を使えないという事は、自分の手で洗わなければならぬといふ事ですね。

そういう事が見て来て中で、身体の問題、食物の問題、そういう身近な問題にも関心が深まつていき、より敏感になっていくわけですが、

で、マッサージや、針を覚えたリ、み産も自分達の仲間で学習して、自分達の手で産む。

そういう共同性が開けてく

う。

少數ですかども、そういう事がやられてくる。

去年、札幌で少數のブルーブラスけど、小さな祭りをやりました。

その中で「地域」に対する関心が非常に深まってきたんですね。

仲間ご議論していると一人が言っています。

「札幌なんて地域といえるのか。近代化され拡散してしまって到底まとまりを持つて自分達が生きる地域とは見えない。」

それに対して「いや、我々は地域になるんだ。地域とは与えられてそこに在るというのではない。すぐれて人と人との関係の中に生まれるものなんだ。そういう関係を作り出していく、我々は地域になる」という事が大事だ」という議論が出てくるわけです。

そういう意味で私は、風景を作る、という事はすぐれて人の問題であろう、と考えております。

私は思ふんとすけれども、豊かな生き方というのには、良い反対を持った事だ。

しかもそれが、相手の死水をとるか、といつに葬式を出してもらうか、という事まで含まれてつき合いをするためには、或る種の定義性というようなものが、なければどうすいと思ふんです。

それから、世代間をどうやって受け渡していくか、まあ伝統とか文化の問題に結びつくと思うんです。

それは、今の、小樽の運河と石造倉庫群を保存しようという運動、これは過去10年程を通しての、切実な、非常に大事な運動だと思いますが、もし仮に、今の人達によって守られたとしても、受け継ぐ世代が育たなかったら、今までの保存が終わって不了。

そういう意味で、世代間をどう受け渡していくか。

もう二つ、人のつながりの中で、「風景の創造」が考えられなければならないという風に考えてます。

先日来、この小樽運河の保存運動の資料を読んで参りました。

感じた事は、住民運動と科学との関わり、という問題でここには非常に示唆されるものが多いなと思いました。

運河と石造倉庫群を守る住民運動が起きて、それを自分達のものにするために色々な角度から捉えかえそうとする。

一つの地域の、非常に個性を持つた具体的がある。その個性とは何か。それを支えてきた歴史とは。と、具体的に色々な角度から光を当てる。

その場合、科学と住民運動がもつ関わり方というものは、二つのやり方があると思うんです。

一つは、でき合いの科学をもってきて、それで解説して終わるというやり方。

もう一つは、科学する名義そのもののガリバ樽運河との関わりの中での変化を余儀なくされるという風なやり方、この二つがあると思うんです。

でき合いの科学が済ませるという方は、特殊、具体的な事例をも一般的法則に帰納させてしまう、あくまで科学のパラダイムは変えない。

具体的な接近の仕方としては、新しい着想を実験して、それを己れの業績にするとかですね、己れの研究論文の材料にするために、そういう形で関わってくる。

頂いた資料の中の、北大飯田研究室の「小樽運河とその周辺地区環境整備構想」を見て、たいぶ笑ってしまったんですが、こういうものは見ていて恥かしいんですね。

自分の側が変わることを徹底もないやり方。コニサルテントのやり方ですね。

そうでほないやり方というものは、小樽運河なり、石造倉庫群、或いは、地域というものを生かすために、自分の持つ、部分的知、を注ぎ込んで肥やしにするようなり方。

そこでそれを守ろうとする人達の肥やしになる、そこに共感を持って染み込んでいくそういう意味で美ねが生きる。

そういうやり方で住民運動

と科学が結びつく時には、具体的な事物の持つ深さを掘り下げる事も出来るし、また新しい考え方の方を示唆すると思うんですね。

知の在り方というものの二つのタイプを、フランスの人類学者のレヴィ・ストロースといふ人が云ってるんです。

一つは、一般的な法則を発見する科学的な知の在り方。

もう一つは、先住民が持っている神話、ストーリーという形で存在する知。

現代文明社会でいえば、機械工業生産のようなやり方と曰曜大工であるような器用仕事をいう國に、レヴィ・ストロースは云ってるわけです。

あり合わせの材料を使って自分に必要なものをそこを作る、手の器用さを生かして。

そういうものとして知が活用されるやり方が、ずっと古い歴史の中にあって、それが我々の感性の基礎を形成する。

そういうものとしても一つの知がある、という考え方だと思っています。

そういう知の在り方というものが、分析一辺倒の西欧科学のこれまでの在り方への反省として出てきている。

住民が運動を始めて、科学が必要とされる時には、そういう知、そういう科学が必要とされるんですね。

そういうものの一つの実例がこの運河研究講座の中で、

様々な形で実験され始めている、と感じました。

そんな風に住民運動というのは、一つの具体的な目標を持ちながら、そこから、より深い文化、文明の問題にまで派生していく、という事が幾つかの例を通して、私の強調したい所なんです。

その視点から捉え直すと、小樽の運動にも問題点はまだ含まれている。

市側とのコミュニケーションができない。運動の側からいえば理事者を説得することが難しい、という事が再三いわれておりますね。

何故できないか。そこには、一朝一夕には改まらない歴史的な枠組みがあり、住民と行政との関係が規定されているんじゃないかなと思います。

北海道開拓百年といわれるわけですが、内国植民地としての歴史、経済的な収奪を行なう場所としての北海道、先住民たるアイヌの人々も収奪すべき資源の一部がしかないわけです。

そこには市民社会なり、そこから根ざした文化の蓄積というものが非常に薄い、という事がいえると思うんですけど。

それが、開拓のイデオロギーに對して、威嚇をもって挑戦し得るものになつてない。

そして、そういう伝統というものを欲するならば、先住民が、アカイヌの人々の文

第五回 - 10

化、それを切斷してきた事、そういう事にも溯っていかなければならぬ。

今は風景の擁護者たらんとしているわけですが、先住民にとつての風景の破壊者でもある、そういう重層的な構造がやはりあるんではなかろうか。

そうした時に、何故、小樽運河を保存するのか、どういう意味があるのか、という問い合わせに、謙虚で、それ故に説得力のある掘り起こしができることではないだろうかと思ひます。

こうした事も踏まえたうえで、やはりだけども守りたい、つまり僕は運河が壊されて、あそこの大車線の悪い道路ができる事に絶対反対です。

保有したい。

何故、そういうても良いのだろか、そこを考えてみたくなります。

言葉にすると軽くなつて了うんですが、人間の創り出しに美があそこに感じられる、と思うんです。

建築当時にそういう美を感じたかというと、ちょっと違うと思ひますが、経済的な効用から相対的に自由になつたと云いますか、ちょっと距離が出てきた。

それは、時代遅れになつたという事の持つもう一つの意味ですが、そういう事がそれを美と感じさせる一つの契機になつてゐんだ、と思うんで

すね。

ブルーノ・タウトが「美とは目的のない合目的性である」と言つてゐるのですが、つまり、直接の目的はない。しかしそこにはある目的があつて統一されている。そういう感じを人間に与えるものが美であるという事ですが、そういう事は確かにある、と思うんですね。

それから、これも大事な事だと思つてゐるのですが、果して、札幌の駅前通りのビルが古くなつたら美になるだろうか。

どうもどうはならないのではないか。

そこには、手づくりの味わいといひますか、素材に対して人間の加工が従属している関係。それが人間に親しみを感じさせ、美を感じさせるのではないか。

それは、その当時、石造倉庫をどんどん作らなければならぬので、手に入り易い札幌軟石を使つた。という或る限られたあり合わせ性がですね、かえて我々にとつての趣味を満足させるものになつてゐるのではないか、と思うんです。

それから、ある事物が愛着の対象になるためには、どうやら、三世代という時間の流れが必要なのではないでしょうか。

初代はそれを直接の効用のために使う。

二代目はそこから脱却した

い、否定したいわけです。

三代目といふのは、自分の直接前の世代を否定して、初代に対して自己同一性を感じる気持ちになり易い。

そういう意味で、今の時代といふのは、小樽の倉庫群にとって、それを守るという意識を我々に引き起こすようなそういう役割を持っています。

そこのところにやつぱり歴史を負う、という事が関わっているように思ひます。

あちこち、少し狭く広がつた路になつてしまひましたか色んな地域へ行つたり、そこでの人の生き方から学んだりして思う事は、こういう運動にとって、当り前の事ですが本当に大事なのは、人だとう事です。

市民として共同の社会との小樽を築き、伝えていく、という地の上で、はじめて運河を保存するという模様が浮かび上つてくるわけです。

そういう人たちのためだけにければ、観光用というのではなくて、飽きられる。

もの珍しく思われて、無責任に「いいね」といわれて、飽きて捨てられる。そういうものがしかないと思ひます。

だから、歴史を負うて伝統を創りながら生きようとする人々がある限りにおいて、風景、というのも生きるんだ、と思つてゐます。

そのためには、と今、

私が考えていますのは、旅の契機ですね。

自分たちが根を下すという事と同じ位の重要さを持って、旅をする。

これが、自分の地域をもう一遍、価値として捉え直す契機になるわけです。

あちこちへ行って人と出会い、形のよい蓄積を体につけて帰つてくる、をうする事で自分達の場の運動が豊かなものになります。

自分達の市民の社会を創り上げていく、その中心には友達関係を充実させるという事を考えて、そういうもののとして地域を創り、自分の風景を持った生き方を目指したい。

だいたい、そんなような事を考えております。

— 司会

どうも有難うございました。今のお話しご何かご質問、ご意見などございましたら、まだ40分程、時間がござりますので。

— 北村氏

運河を守る運動を、かれこれ4年間やってきたわけですが、僕自身の中でもよく整理できぬ問題として、運河は一体、他者なのか、という風な事があるわけです。

運河への権言権、正統な発言権を持つ要件としては、一般には、そこに居住、あるいは勤務する人、というのが狭い方で、広くみても、小樽市民といった事が云われます。

オホカ - 12

果してそうだとすれば、ほとんどの物理的距離離の問題に矮少化されてしまう、そういうもののはない所に権力の根柢を持ちたい、という風な所で運河を単なる対象物以上の物として捉えなければならぬいのでは、と思うわけです。

また、感性を基盤とすらならば、それをこうして運河構造を開くという間にロジックの世界が展開していく事との間に本来的な矛盾があるのではないかとも思ひます。

又、今のお話を伺いましたように、運動が人が大事である、それは分るんですが運河それ自体の尊厳といったものも、人間の恣意が計られるのか、といった疑問もありわけです。

— 花崎氏

柴谷篤宏さんという、もう長いことオーストラリアに住んでいらっしゃる方が、日本にたまに帰ってきて時に「自分は10何年来オーストラリアに住んできて、今では、オーストラリアの自然に所有された」という感じです」と云っていたんです。

そういう感覚っていうのがありますと思っています。

自分が運河に所有される、客体化する以前にそういう感覚があって、それが基礎になるのではないでしょうか。

マルクスが面白い事を云っています。自然は人間の非有機的な肉体である、といふん

です。

非有機的肉体という言葉でマルクスが表現しようとした何か、これは柴谷氏の感覚と非常に近いような気がします。そういう感覚が、本来、人間の基盤にあつたのに、近代の開発の進むと共に、消え失なわれていく。

ある人が、「今、住民運動が盛んで、伝統文化の保存が叫ばれているのと、開発によって單に地域が変わるだけではなくて、民衆が生きてきた基層の文化が変えられつつあって、そこで生きてきた自分が壊されてしまうという危機感があるからだ」と云われています。

僕もそう思います。

ですから、極端にいうと、運河はあなた自身だ、という感覚を積極的に取り戻す、という風に云えると思います。

それを大事にしながら、論理化するという所では、即ち的的なものをもう一度自覚された形で取り戻す事にならないかと考えますか。

— 北村氏

感性で捉えたものを論理化する、本当にそうならば良いのですが、論理の演算に適する部位だけを抜いてしまってそれを全体と認識してしまう結果になるのではないか。

単なる概念意味は科学的知よりも良く全体を捉え得るかも知れないが、晴れの場ではそれを擰り出せないが故に

また、論理の世界に頼ろうとする、そういう不安なのですね。

— 花崎氏

これは、充分に答える事はできませんが、説得と何かという問題かと思ひます。

一番良い説得というのを、理屈で負かす事ではなく「あいつの云つてる事は、俺が前から感じていた事と同じなんだ」という気持ちが動く時、相手の心の導線に沿われる、という事だと思います。

そういう、情と理の両方備わった説得の言葉、というものを、住民運動が獲得しなければならないと切実に思ひます。

そうなって始めて、文化をも踏まえた論理にT字、と思ひますね。

— 会場から

先生のお話の住民運動の例では、次産業者が多いように思いますが、小樽では都市住民なわけですか。

— 花崎氏

我々のこれから都市社会での結びつき、市民的な連帯のあり方というのを、名前に多様な、いわば個に環元されかかっている者達が共同の場を創出する。

共同して何かをやる事によってお互いに漫透し合える関係をつくっていく。

そういう反人社会を目的意識的に都市の中でもつくっていけるだろう、と思ひます。

— 山口氏

小樽の場合、道路も人の生

活もすべて海につながるよう出来ていたわけですね。

それが横方向の道路によつて分断されるダメージというのほほ非常に大きいんですね。

道路を作るよりも、北逃がみた方が良い、という事は誰にでも感じられる事だ、と僕は思っています。

ああいう場所に花なんか咲いて、人が樂しそうにしたりしてますと、オープニスペースで誰も邪魔しないわけですから、人は行くわけです。

現にあそこが人が集まり得る、休み得る場所だって事を漸く、まわりの人も分つてくれ始めているわけです。

でも、市が道路を作るのに理屈があるわけです。

もちろん、市の講論の道筋と、僕らの感性の道筋とは全然ちがうわけです。

ただ僕は、これが必然か否か含むまいわけでも絶対にないと思うんです。

僕らは、彼らの土俵に入していく事によって、彼らの論理をくつがえさう、という事を始めたわけです。

例えば僕らは運河は小樽の重要な観光資源だと主張しています。

それから、港湾中心の流通経済だけでは小樽を救う道にはならない、という事も主張してきたんだです。そういう事は充分にええ事なんですね。

彼らの用意した資料をキチニヒ眺めれば、そういう結論し

か出てこんわけです。

古い町並みが何故価値があるのかを説明する前に、古い町並みは、少なくとも僕ら、心が安まると思うし、一般的にこそいろいろものの価値は云わ山でいろわけです。

そういう価値が現に片方にあって、しかも金銭的価値にも置き換える可能なんですね。

住民と行政が一体となって向こう20年、30年を長期的に選ぶとる事を考えれば、僕は小樽、こぞういう試行錯誤をやり得る町だと思うんです。

—花崎氏

どうですね、そういう可能性は10年前よりは、ずっと拡大してきていると思います。

開拓する経済の論理というのではなく短期的な視野しかもってないんですね。

経済を年率7%ずつ上げていくと10年ごとに3倍になります。つまり10年たつと投資した固定資本を減価償却して更新できることですね。

だから開拓する側にとっては、10年毎に風景をすっかり変えていくのが、一番効率がいいんですね。

結果がどうか別にして、10年単位で、設備を更新するような発想しかできないわけです。

だから、今の方の云われた長期的視野の中では、経済圏も含めた市民合意を得る、これは大事なことですね。

又、伝成長になつたおかげ

で、そういう事が可能な審議が広がってきたんじゃないかなと想いますね。

—北村氏

今のお話にあつた、対応の道筋と、もう一つの道筋の問題なんですが、そもそも基盤の違うもので“すけれど、上手く合意形成に導く方法というものはあります”でしょうか。

—花崎氏

とても難しい、僕は成功しなくてはなりません。

いわゆる都市民の議会市民主主義の中で上手く行く方法というのには良く分らないし、馬鹿な“いけない”。

難しい問題ですね。

—司会

本日はどうも有難うございました。

第6回 地域での試み

—小樽を生きる場として—

講師 浅原千代治氏
佐々木謙二氏
喜一郎氏
渡辺真一郎氏
中山 和夫氏

昭和58年6月25日
小樽市労働会館

講師紹介が終わって

—浅原氏

とつ始めと“いのち”は、ひがなか語れにくいいびすね。それには生まれ育つてずっと大阪に住んでいたもんびすから。おとし小樽にきたんですけど、言葉が大阪弁が標準語だと“つ感じでしゃべりますので、これからへん場合は後で通訳しますんでご質問くださいね”と思ひます。

小樽におとし来たんですけど、113んな人に聞かれると“いのち”とは、なんであんた北海道に来たんですよか、とか何でまた北海道の中の小樽を走るんだですかとか、よう聞かれん上ですが、さくばらんに申しますと、まず夢が申します。どんな夢かと申しますと、ぼくは大阪にすと住んでいたんで、カラスを始めたのも大阪なんです。といのちの家は生まれながらのガラス屋とれて育ったわけなんですが、大阪といつところは大豪暑いところが、夏だと30℃といのちが毎日熱くわけですね。ご

—中山氏

今年の冬は何十年振りかの雪だったということなんですが、その時に小樽の街を私なりに撮ってみたといのちが（これから上映する）映画です。非常にイメージ的な部分が多いためですが、ひとつ見ていただけたらと思います。

それで、今回邊河講座といたことですので、邊河ももちろん出てきますし、よく見ていたいだきたいのは、港とのオーバーラップになつていてころです。昔、現在石造倉庫群になつていて、そこが直接の港になったといのち過去があつたと“いのち”とお聞きしましたが、そのあたりを見ていただければ、昔の繁榮、今の繁榮と“いのち”とじやなくて、ひとつの残す意識があつんじやないかなと思うつもりですから、そのあたりを注意深く見ていただけたらと思います。

⑦映画「タックミー」（中山和夫氏制作）上映。

< 30 分 >

桶屋がもつかるふうに、何か出来るんやないかとぼくは考えていました。

それと、もうひとつなんでもうけれども、札幌に恵業専門学校、専修学校いうものが来年から来年に開校の予定なんです。その専修学校の中にガラス工芸というものとひとつ入れようやないかといふ話がありましてばくのところにも話をかけています。それは悲しいかな札幌に本校を置くんですけど、それでも、ぼくはその部分、学校のガラス工芸科といふのを小樽に引っ張ってきてこようかな、と思ったりしました。

そういうものをつけ加えて小樽の良さをいろんな人にちに理解してもらおうやないかと思います。

力が及ばないんですけども、国でご招待して下さります。近く美術館とか展覧会の時には、できるだけ小樽の話を北海道へ話を長くつけ加えましてやっているつもりなんです。

もうサレみながら、小樽を認識していきながら、いろんな方々に知りたいだときつてあります。

—落合

落と申します。

私がこの小樽の街にかかりつけた最初は、11年前に大学をやめてから、この街に勤務するようになります。住んだわけです。

結婚して子供ができるて、あきるのパターンで小樽に住むことになります。日本中いろいろ住んでみましたが、この街は住みやすい街だと思います。

運河と直接つながるかどうかわかりませんが、7月7日に私、店を開けるかもしれません。私のもうた15分はなるべく私の店の宣伝に費したい。

ぼくの留学してヨーロッパといつのは、小さない国の連合のようがるものにして、日本で言えば、フランス県、イギリス県、イタリア県のようなよせ集めなんですね。地理的にすごく近いです。そういう街をぼくのような、あまり錢のない人間が放浪したしまして、ちょっとした街のおもしろいものを見たいな、と思うわけです。

それで超高级ホテルのレストランには入れないで、かつての、街のレストランに入りました。

そこに入つて食べますと、日本で意識してくるようなレストランのメニューはないんですね。まあ、スペゲティとかハンバーグとかがありますて、あとは実は何もない。そういうにレストランは殆どないです。向こうのレストランですと酒ですね。ワインもその土地の長い歴史をもつたスペシャリティといふか、特産料理がありまして、そういうものを組み合わせた

これが、という感じではなくて、自然発生的な感じでどこもやっています。

ぼくはもういう店をつくってみたいな、と思っています。それが7月に、店の準備をするに当たっていろいろ歩き回ったわけです。

帰ってきてすぐだと思うんですが、北大の趙野先生の書いた新聞のコラムを読みました。読んだ限りでは、石造りの倉庫群といつのは簡単に使えるように書いてありましたか、あ、ちこち当たってみましたけれど、とても高かったです。

私、そんなにお金の用意がないんです。土地付きで億だとか、せりせい9000万円ですね。そういう物件ばかりなので、これじゃレストランできません。

それで、私はすぐに始めるつもりでしたので、もう一つの方向で、最初の夢は半分くらい捨てて、街のまん中でやろうと思いました。

今、花園銀座街に48坪の場所を確保しました。店の特徴、キャラクフレーズを一言で言うと「又流の本物」というが、又流とは何をさすのかといふと、マキシム・ド・パリだとかなんとかいう、食べればすぐに2万も3万もあるようなメニュー体感はとらない。みんな小樽の普通の店の値段と同じにします。

もうひと大事なことは、レス

トランの経営者が、使う材料を自分で調達するといつ理由をつくらなくてはいけない。

店ひ出すものは全部自分でやる。そのへんのレストランでやるような、引きあいのハンバーグ買ってきて、引きあいのデミソースかけて、引きあいのつけものを添え、最後は引きあいのアイスクリームをして、もういうことじやおもしろくな。

それからもう一奥持微を言いますと、ワインですね。

私は北海道ワイン時代に、がどうづくりから始めたんです。実際に工場でワインをつくってラベルをつけて、貼ってといふとこまで習いましたんで、できたらそのワインを売りにすると考えたんです。

さらには、せっかくの小樽のワインですから、みなさんに安く供給したりと。ねから終わる、たワインジやビン代もかかりますし、どうしても高くならないですね。

ですから、グラスで飲めるように「樽輸送」というんでいますが、18Lの大玉な単位で輸送して、すべてワインセラーかワインラスで直接売るんです。それを買つて飲むよりサレ安くなる。

向こうのレストランはどこでもそうですが、飲みものにはあまりお金は取らないです。

要するに安く提供するのが

レストランの仕事だと思いま
す。

オープンの時は宣伝もかね
まして、コックにスペイン人
をよんでワイワイやろうと思
っています。

皆さんの真摯な運動をぼく
はよくわからぬまま測面もあり
ますが、ぼくはやはり、市民
運動というのは、こんなふう
にみんなでワイワイやるとい
うのか、そういう要素がなり
とおもれろくなないと思います。

私の知らないポート・フェ
スティバルと運河講座の動き
は、表裏一体をなしていふと
思っています。

ですから、できたらポート
・フェスティバルにも参加さ
せてもらおうと思います。
それと、ポートとは關係な
く、9月からには、池田町
の焼き直しになるかも知れな
いんですが、牛のまる焼きが
んか企画してワイン工場の
近くの芝生でワインまつりの
ようなものを作りたいと思つ
ています。

それから提案があるのですが、朝市なんかやったらいつ
かしまうかな。日曜の朝、い
わゆる青空日曜市、そういう
のやまとまた違った市民運動
の棟ができて、市民さんらん
の場になつておもれろいと思
うのですがね。

場所はですね、北環の場合
は名都市の市役所前の広場が
です。青果市場から模やりが入

るかも知れませんが、そんな
のはどうとでもできますから
ね。

— 渡辺氏

渡辺です。

先ほど版画協会の事務局長
といふように紹介されました
が、版画協会といふのは戦後
すぐにできまして、今、金子
誠二さんが中心になってすす
めている組織です。

去年、小樽版画協会といふ
名前で活動を始めた時に、金
子さんから青年となんかつけ
ないで、同じ版画をやってい
くんではないか、川樽版画協会
と名乗ってやりなさい、とい
われ、一本化したわけです。
事務局長と正式に替えられ
ているのはなくて、私が一
番好きで、作品もそんなに作
てないのに、川樽とニコニコ
す。

版画協会は去年の8月につ
くりました。青年版画協会の
ことを中心に報告したいと思
います。

今、メンバーが一人いるん
ですけれども、みんなそれを
シルクです。シルク・スク
リーンといふのは、勝手版に
ちょっとものはえたようなも
ので、今日の運河講座のポス
ターもシルクでやっています。

あのようないポスターとと
ちに、それそれ個別に作品とみ
なさん作ってまして、川樽が
は今、6年前に大々的に広ま
りました。

ぼくは小樽に来てから初め
てシルクを知りまして、興味
を持って、それから付き合つ
て作っているのですがけれども
簡単にできるんで、ぜひ皆さ
んにやっていただければ、
面白いなと思います。

今、7人いますが、ほとん
どが20代の後半なんですね。

これから川樽でやっていく
ことに關しては、とりたてて
この川樽といふ場所に意味と
見つけているところだと思います
なく、単に川樽に生活してい
るから、川樽を活動の場とし
てこりと川樽のが正解のよう
な気がするのです。

作品を作っている方はそれ
をもうだと思うのですが、
場所よりも自分が何とや
るのかと川樽のことの方が先決
のよう気がするんです。

やりやすい場所、やりにく
い場所といふものがあって、
川樽の場合はやりやすい場所
じゃないかなと思います。

去年の4月に設立して、11
月に美術館で作品展をやって、
今年の1月にまた、産業会館
の版画バザールといふのをや
ったんです。この後に、個人
展とかを札幌とかでやって、
今年の11月には第2回目の作
品展をやりたいなと思っています。

それと、シルクに興味を持
って、おぼえたいう人が
かなり出てきてるのを、教室
をつくって、今、ニコニコ、
月曜日と水曜日に山田町に3

階建てのビルを借りたんです。
1階をギャラリーかアトリエ
にして、2階は今、人が住ん
でいるんですけど、東松照明の
写真部の事務局の一部に使わ
れています。

そういう形で共同のアトリ
エを今年の4月に借りまして
そこで個人でできたり大きな
作品とかみんなで時間を使
いくりして頑張りましたと思
います。

やはり、場所がひきまとそ
れなりに活動の場が広がります
で、今までシルク習った
と言つても個人の家でなかなか
か教えることができないんで
す。シンナーをかなり多量に
使うもんと、大家さんが川樽
を使いませんでね。

今はかなり自由にアトリエ
で作品をつくってます。

これからどうやって川樽の
中で活動していくのかといふ
ことは、本当に川樽に生活の
場を求めて、そこでの生活しな
がら作品を作っていく、それ
は東京とか川樽のすぐ近くに
ある札幌とか川樽、それ
ぞれの文化といふものがあり、
日本の場合は、とくに版画の
場合、シルクの場合、やっぱ
り東京が中心になります。

ぼくたちは、東京になら
のとは言わないですが、川樽
でやれることをこれからはや
っていこうと。それがぼくた
ちが一番やりやすスタイル
を作つていくのが一番いいん
じやないかなと今は思つて

ます。

小樽版画協会といふ歴史がある年もあるような名前を看板にレテレしまうと、それなりに大変だなと思ふ時もあるのですけれども、金子さんとか、一原エンとかが自由にやりなさいとかなり囁く自分で見てくっていますので、大方やぶれになるかも知れぬけれど、面白くやりたいなと思っています。

ヶ月に美術館で空間を一つ作っていって、それが一つの作品になれば」ということを考えています。

ぼく自身のことでは、地に上映企画をやっていまして、小樽の中で自主制作映画を発表する場を作ってきたいたいと思っています。

今のこところ又カ月に1回くらいなんですが、8ミリ、16ミリ、ほとんど劇場でやることはないのですがけれども、もういう、ほとんど作家といふのは、東京を中心なんですがどちら、ソウル8ミリ、16ミリのDVDを作っている方の作品と上映していきますが、

映画といふのは観て楽しむという感覚がかなり日常化していきますが、観るのと同じに、作る、なおかつ批判を、批評するという3位一体がやはり、本当の映画のスタイルなんじやないかな、と思いま

す。

小樽でも何人か映画をつくっている方が出はじめています

しは、そういう意味でも、その中のから小樽らしい感覚の映画ができることを、今期待してます。ぼくは発表の場をつくることが、今ひとつ仕事じゃないかなと。

あまり観たことがないから関心がないのか、札幌の10分ヘビーライクが、動員数が少ないのですが、映画館で観る映画とかテレビとか、またちがった感覚をもつた方がたくさんいらっしゃいまして、札幌なんかでも、作品を作る人が出てきまして、ぜひ何かの機会に、自主制作映画といふものをご覧になってほしいなと思います。

——佐々木氏

佐々木です。

小樽に現代美術館を作りたいか、という、まあいろいろ友だちとも話して合ったんですけども、いかにも突然子がなうことにして…。

美術館といふのは、普通、公の機関がつくろといふのが普通で、日本の場合、私立の美術館の場合、よほどお金持にといえば石橋正之などのように。あるいは、県立美術館、都立美術館のような公立の大規模組織がつくるとか…。

我々が小樽に住み、主体的に動いて、はたしてそのような美術館を作ることが可能かどうか、ずいぶん前から考えてみました。

美術館を作るための1131

3条件を考えたときに、基本的には4つ位あるのではないかと思います。

新たに美術館を作るといふことになると、それだけでも、30億かかるてしまうので個人的にはとてもできない。すでにある建物を美術館に転用できないか。

私は最初、札幌だと考えていたのですが、札幌では無理で、友だちである川樽在住の彫刻家である佐渡さんの方から小樽に1111建物がある。もしかしたら、間接的に我々が使えるのではないかと112ことを見せてもらつたんですね。

私達がねらつてるのは「大泉倉庫」なんですが、建物 자체、美術館として機能を發揮できるような規模を持っています。

簡単に建物を借りるといふことができるのは思わないんですけど、最初は冗談で我々が借りることができないか話をしたんです。

よくよく話をすると、今年か来年あたり、岩葉倉庫とこにては使えなくなるといふことです。それを聞いたもんですかから、大泉さんと交渉してみたわけです。

あそこにはバイパスが通って倉庫として機能しなくなると大家さんも言ってましたが、113113な問題もありまして簡単にはいかない。建物としては美術館に適しているのではないかと思うのですが、單

純に建物だけを確保したらすぐ美術館にできるといつものでもない。やはり作品の収集、保存と112ものが問題になる。

それから美術館の維持・管理、誰がいつにやるのか、そういう人員も確保しなければならない。我々は美術家ではありませんけれど維持・管理の方まではなかなかでききれない。

せっかく作っても1年・2年でだめになつてしまうようだと、何のために美術館を作つたのかわからなくなる。

そのための美術館を維持していくための資金の問題もありますし…。

それらの条件をクリア一しなければ美術館をつくることはできない。

その他に細かい条件としては、法律的な問題があります。現在あのへんは公共地域になつて、法律条例からも美術館としては使えない。そのようないくつかの機会に、そのへんの改正をやってもらわなければならぬわけです。

まあ113113見てまとめたんですが、小樽倉庫とか大家倉庫のようないくつかの倉庫がなきやりかんに思つわけです。

113113倉庫の場合、大きすぎてしまうと無理なんじやないか、大家倉庫の場合800m²といふことで、道立近代美術館の三分の一か半分くらいあります。我々がやっていく上

でちようどいいんじやないかなと思ひます。

作品の収集に関してはすぐれども、従来的に、どういう作品を叢めるのかといふことのごく問題があるのです。美術館といふと、いわゆる名画を叢めることを発想するか、あるいはその地方の作家、小樽市内なら小樽在住の作家とか、そこを活動していた作家の作品を集めると、どうぞ発想とするのですけれども、どうじやなくして、もつと東京とか、あるいは関西の作家でもいいですけれども、どうぞ作家の作品を叢めたい。とくに転がるが集めるわけですが、交渉できる相手、現代美術を中心にして集めたりが思ひます。

まあ、ご承知の方もいると思ひますが、現代作家展といふのがありますて、私たちがやつてこりよといふ点で叢めやすいことがあります。

維持・管理といふことを先ほど言いましたが、これは美術館の運営の仕方にかかる問題だと思ひます。

他にもいろいろのことがあります。例えば、作品の販売、各種の公演会をやるとか、そんなことで運営資金を調達して、維持・管理にあたつていく。それで何とかやっていけるんじやないかなと思ひます。

そのことについて、小樽市の教育事務長さんともお話し

したりもしました。いろいろな問題がありますが、もししかしたら可能性があるのではないかなどって運動してゐんですけれども。

ネットになつて、いろいろこの一つは、小樽の住民が、意識を高揚させなければ、ちょっとできなないんじやないかなと、どう気がれてきたんですが。

まことに美術館を作りなさい、作りなさいと、なんばっつても、小樽の住民がとうとうものを審査しない限り、ちょっと実現しないんじやないかなと正直なところ思ひますけど。

今日、参加している皆さんに果たしてそういうものが小樽にあつた方がいいか、逆に知りたいなと思ひます。

なかなか、どうすることを小樽の皆さん方に話す機会もないものですから。

—司会

どうもありがとうございます。それで今日は今日の講座に参加した皆さんからのご質問やご意見をいただきたいと思います。

—会場から

佐々木先生にお聞きしたいのですが、先生は美術館を作くのが目的なのか、いい作品を叢めてお客様とひつぱつとくるのか。どちらなんですか。

—佐々木氏

ぼくは両方だと思います。つまり、どういうことがと言ひますと、やはり観る人がなければならないし、観る人は成り立たないし、観る人がいれば作品は叢められる。いい作品であるかどうかというのは誰かが判断しなければならない。価値判断ですね。

ここでぼくが言っているのは現代美術に限らずするといふのを叢めるとための基準、ある程度の目標といふか、現代美術であれば叢められるんじやないかな、で、観る側の目標でいうか、どういうものがはっきり出てくるんじやないかな。

我々が叢める精神、観る側の目標みたりなもの、どうすることだと思つんです。

—会場から

美術を理解するっていふのも必ずかしりですよね。たとえば、ミレーですね、あれを1億か2億の金で買ってきて、市の美術館のどこかにバーンと置くわけですよね。それだけでもお客様さんは叢まるわけですよね。だからぼくはそういうやり方もあらんじやないかなと思うわけです。大蔵倉庫を買収したから、すごく資金がかかるわけですよね。先生がひとりおしゃつても無理だし、市役所でもおそらくできないと思います。

—佐々木氏

たしかには、そういうことはあるんです。寶物語じゃないかというか、どうやらいろいろむずかしいことはあるんですが、今年いっぱいから来年までか、はつきりしないんですけど、大家さんと話をして、営業倉庫の問題や…。

だからぼくたちが主導してどういうふうにやらなくことはならないとか、こういう案があるからとか…いろいろ提案してきたいなと思っています。

それは1年、2年、と言いますけれど、明日、明後日つづく話になります。

ですからそのいろいろな段階で働きかけても先のことだからわからないってこともあらんですかけれども、市役所の方でも調査中だと言ひますんじ…。

そんなに先の話ではなくて、まず「いくらが展示空間として採用する」のが、もっとも適切やないかなどと、こういう風に考えてる人は沢山いるんじやないかと思うんですが。

—会場から

たしかにこゆすのはもったいないですが、市役所あたりが何とかひきなーものでしょかね。

—佐々木氏

ですからそういうことだと

思ひうんひですが、ただ具体性がなければいけないね。

教育長さんとお話ししたんですけど、具体的に何をしなければ」という話がなければ、ただやみくもに保存するよりうことはできない、ですから商業的な目的であれば技術としては非常に応援しにくいけれど、文化的な活動であれば何とかなるんじゃないかなと思うんですね。

日本では美術館っていつも最初から実験館っていう見方をしますしそう。

たとえば20億とか30億とかの作品を全部と集めて、次の日からすぐ開館する。これはひとつの方針かも知れないけれども、もっと別のやり方もあるんじやないか。

ニューヨーク近代美術館なんかは、最初は版画から集めたって聞いてますね。それを50年かけてあれだけの作品を収集したって、で、ぼくたちはお金はないけれども、やはり時間をかけてじっくり作ればいいものができますんだと思つし。

いろんな人の協力も必要ですし、具体的に考えていかなければいけないこともありますから、たぶくは可能性があると思うし、可能性があるんならやっていきたい。

司会

佐々木さんがお話しになつた美術館というのは、たゞ

へん素晴らしい構想で、ぜひ実現していただきたいと思つます。

今回の瀧河講座は「どのように小樽瀧河の再生をすすめるか」をテーマに行なっているのですが、石造倉庫の再利用といふことを大きな柱に講師の方をお選びしたわけです。

先ほどの落先生のお話の中にもありましたように、石造倉庫をレストランに改造したいけれども高くて手が出なかつたということですが、その辺のところを、もう少し具体的にお聞きしたいと思うのですが。

落氏

ヨーロッパのレストランはみな300年とか400年とかだった中で開いています。

食事をするときは完全に落ちついに雰囲気の中で食べれば一番おいしいですね。

小樽でやるとしたら、越野先生の文章にもありましたが、あちこち見ますと、小樽は地下室のない街ですからね。向こうは地下室とか穴ぐらとかがありますが、小樽には倉庫があるんだなとヒントがわきました。まず千秋庵の社長の建物、どこどこの建物がいいと言つても実際使ってなりますよね。それを使わせてくれと言つたら、お金いくらだつていうから、月これくらいしか出せないと言つたら、家賃どうこうではなく、ぼく自身

この又階を活かしたいと、丁寧にことわりられましたね。

ぼくの予算も、さきごみだけじゃひとつもくすせなくって、やはり今度は一番はじつこの紙屋さんが空いたから、じゃあって行きませた。

新聞にも出てましたが、9000万くらいの価値があるんだそ

うです。
ぼくに言わせれば建物はこっちが無理して使ってやろうというのに話が全然合いませんし、9000万円なんて金はどういたいし、借りることもできぬ

それでもう石造りの倉庫にはこだわらずということで今のところを探してたんですね。

まあ、はたから見てご協議するんなら、しない方がいいと、意見もあるかも知れないですが、ぼくはあくまでもやりたのはレストランで、石造倉庫ではないかったですから。

会場から石原氏

講師の方、かなり具体的に提案して下さったんですが、版画協会の方は、活動はあっしゃって下さったんですが、私たちが今、お聞きしたいのは、小樽をうまく生かそうといふことなんですね。瀧河と含めて。それをどのように結びつけていくのですか。たとえばクラフトセンターをおつくりになるとか。

瀧河氏

直接、ものをつくるのに場所はどこでもいいって気があるんひす。だからとり立てて版画をつくること、今までこうは直接結びつけてないの。

会場から石原氏

それが結びつけられるんじやないかなと思ったんひ。

ガラスの方だったか、その方も考えなければならぬんじやないかと思うのですが。

歴史のある版画をやってるところをもつとうまくP.R.するとか、金をとれるふうな金のことを言つたら何ですか。それがなければ焼きもしない。せっかくの財産を何とかならないかなと思ったんであります。他にもガラスの方の浅草さんと結びつけるとか、小樽の宝として結びつけることがひきがいのかなと思うのですが。

瀧河氏

状況に応じたものを何とか使らなきゃ。今までいたとえば文化の場合と言えば、東京が中心で、もとをただせばアメリカだっていうような。何でも東京中心に動いてきたことに對して、今のところは小樽で作品をつくっていくつづつことだけに根ざしていきましたと思つてゐるわけです。

小樽らしいものに結びつくかどうかということはわかりません。

ものを作っていくときに、
たしかにつくりやすい環境、
つくりにくく環境があつて小
樽はつくりやすいと思ひます
が。

——会場から石原氏
せっかく小樽の宝物がある
のに。運河の倉庫も活かすつ
ていうのも同じよう活かす
ことができないのかな。
あれば、うかがいに。

——会場から
次につづつていいですか。
浅原先生にお聞きしにいん
ですが、こつきのクラフトセ
ンターの3億円の話をくわしく
お話しして下さい。

——浅原氏
ぼく、正直に言ひますと、
小樽に来た目的といふと、も
う6年前に小樽を初めて知つ
たんですけども、運河の倉
庫やガラス工場をしたらどや
といふ話をあつたんです。

実際に第一の人が調査にあ
たって下さつて、フタバ倉庫
とかいろいろなところを見たん
です。なんでもしなかったかとい
ふと同じことなんです。み
んな。非常に高かったといふ
こともあります。そして場所
が広すぎるといふこともあります。

それで今、正直に思ひます
けれど、宣伝媒体だけを考え
ると、おそらくグラス・スタ
ジオは緑町にあるより運河に

あつた方がやも、ともうかると思
います。

何で緑町に固執するのかとい
ふと、本当に運河の倉庫を
ガラス工場に利用して、逆に
運河のためにいいのかどうか。
これは住んでみて初めてわかつ
たんひ。

運河をみびさん方が残さう
と、倉庫を何とかしようとリ
アスるわけですね。じゃあ逆
の質問ができればですね、ど
うり、た形で残すのかといふ
ことです。

ぼくは、やはり先人たちが
血と汗の結晶として、あつた
運河をつくり、小樽の街が
栄えてきたといふことが非常
に貴重な財産だと思ひます。
ひんたんにつづくこともない
と思います。だけどもそれを利用
して何がせえといわれても、それが果して運河のためになら
にならぬか、倉庫のためにな
らぬかといつたら運河だと
いふ気がするのです。

さつま話をしましてクラフト
センターの話をなんですがれども、正直言つて、さつま流し
た程度の話なんです。

まったく何にもあれから1
回だけ会合がありまして、皆
さん方へご意見を伺つたりとい
ふとことにして。ぼくも出席
させていただだつて、クラフト
センター設立の下書きとしました。

実際ぼくがしたといふのは、エリアとして考えたん
です。

小樽のまちもエリアなんです。
場所だけじゃないと思う
んです。

そこの中には公園もあり、
1階をヤラリーにしたり、
2階は集会場のやうなものを
つくり、3階は文化施設のよ
うなものを持つて、など、
まあ考えています。

これは一つの考え方なんですが、中にひとつ円形の
ものをつくりたいと思つんで
す。

ギャラリーが1階で、2階
はひとつの通路でもあり、3
階にもつていいのはもう少し
大きい、100人なんか集まり
話ができる部屋をもちたつ。
4階は宿泊室にしにいひます。
6階ぐらゐには、展望室兼レ
ストランと思つんります。

箱根に「雕刻の森美術館」
といふのがあるんやけど、そ
んなふうな感じでエリアとし
て。

小樽の運河とか倉庫群とか
いうものを、ほっとく手はない
と思います。あれはあれひ
お客様と一緒につける要素が
あると思うし、あのままひき
こいだといふ気がします。

それでとにかくそこは港のところ

に美術館ができるなり、レスト
ランができるなり、どうなこ
とになつていけば、どこから
繁華街をここで天狗山までお
客をゾロゾロ——といふよう
にぼくは考ふわけです。

こまびら構想の話をすると
市役所の人たちはギョッヒ

莺っこ、國からの金じやとう
てい足らんといふことになる
んであんまり大きくなはしないか
ったんぢやね。

まあ、そんなふうなことを
考えていいます。

——司会

中山さんにお伺いしたいん
ですけれども、さきほど上映
して下さった映画のことなん
ですが、小樽運河の映画をと
ろうと思ったきっかけは何だ
ったんですか。

——中山氏

ぼくの場合、最初は映画を
とるということではなくて、
何度か小樽に来てまして、ス
チール写真をとったんですね。
もう少ししたら、みんなドズ
のように臭いふうなどころで
も、油があつたり反射する
と写ったとききれいなんです
よね。このことにちよ、とび
っくりしました。

これももつとみんなに知
つもらえる方法がないんだ
うかといふことがきっかけにな
ったわけです。

遠くからでも運河を写しに
来くる人がかなりいるんです
ね。たまたま他のところで映
画をとる機会があつたんで
すから、とり始めたわけです。

もつとふれてほしいといふ
ことでのタイトルをつけた
わけで、もつと知つてほし
といふことがあります。

札幌ひ番、メガネ尾エレ

った所が、今ピューティサロンになつてゐる所です。

これは倉庫を改造して、中をまつ白くしてディスコをかけているわけですかよね。音がもれないとことか、やはり駅名といふものの良さを活かしていふという気がしました。

玉子ほど渡辺さんちでござられたんですが、倉庫を利用することでしたら、ちょうど中がま、暗ですからね。四大時中映画をやっていられるんじやないかな。

さて、値段が高いとか言つましたが、なんとかやれるものなら小樽ひ文化的な面で根ざせたら、といふのがぼくの夢です。

——会場から峰山氏

ありがとうございました。私がなかなか皆さんとお会いする機会がなかったので、今日はすごく力強く感じたんです。

もう何年か前になりますけれど、運河や倉庫の再生について考えたんです。

まず美術館にしたらどうかとか、ガラス工芸をやったらどうかとか、食べ物のセンターみたいのにしたらどうかとか、樽太館にしたらどうかとか、郷土館にしたらどうかとか、どんなことを考えたんか。何年か前に。

そうしたら、みなさんの中から、同じような言ふべき

きましたので、時間をかけていろいろ中でこういう話をされてましたといふのは素晴らしいことだと思いました。

動きが出てきたヒトニアニヒは可能性に一步近づいたヒトニアニヒはなかと思つています。

美術館はあそこにありましたけど、倉庫の中にあきたら良かったですね。

今日は非常に具体的な提案がありましたので、やはりそれを踏み台にしてそれをどう市民に訴えて実らせたい方策をみんな考えていました。

一つ成功させたい。それが誕生してくんた」という気がします。

どう具体化せよかといふことにみんなさんが動きかけて実らせてしまいなと思います。

やはり今日のような機会を通して連帯できるところでは連帯しながら一步前進していく工夫をしていただきたいなと思います。

——会場から北村氏

いろんな活動とか事業とかをなさっていらっしゃるみなさんですが、何ごとも天の時、地の利、人の和といふのが必要だと思つています。

浅原さんとのところも、北一硝子の浅原エンがある程度築き上げてきたガラスのおみやげというナームにのつてゐる。言つてみれば天の時だと思う

んですね。

美術館構想でも、もういつ時とか、状況とか、いろいろなものに左右されると思うんですけど。

この運河講座を実行してさした方も、今この時期に再造倉庫の再利用を柱にすえようといふことには、小樽に運河といふ社会問題あればこそなんですね。

現実に今、かたや道路をひきたといふ人がいて、かたや残したいといふ人がいて、その中で、俗悪な折衷案で事を運ぼうとする行政があつて、といふふうにぼくはどちらもわけです。

こういう時にあたって運河講座に出てきていただけてお話しをうががつていいわけですが、お一人かお二人にそのへんの心境をおうかがひしたいと思うわけです。

——浅原氏

すじくむずかしい問題で、返答に困ります。ただ小樽の住民権をもつてゐる一人として代表的なことは、ないかなつて気がするんです。

ぼくは小樽に住んでみて、白が墨かつけられる感じがすごく強いけれど。

どうでもええんやないかと、ぼくは小樽に住んでいて、小樽が好きなんです。

なんとかしたいくと思ってる。別に黒でも白でもええんやないか、どつちでも。

それとも一つ、ぼく自身が運河の横の倉庫に移るかと云ふと、早く教らんのです。

なぜか金がないんです。いろんな所に行く行ってるけど実際、ぼくお金稼いでいるところどこやと思つます

ぼく小樽で稼ぐより、小樽で個展やつこはいりんですけれど、グラス・スタジオで作品並べて売るよりも大阪なり東京なりで個展やつこ方が売れるんぢやない。

こういう状況の中で、ぼく小樽で運河にかかるれしまあか。ぼく今のところはまだたくひきない。

だからその問題について意見を求められたり、どういう動きをするんや高柳れても、強意念ながら、ぼく傍観するよりどうしようもないんじやないかなつて気がします。

ぼくはグラス・スタジオとして30人ほどの人間食つしていなあかん。その方が先決です。

だから正直言、乙今日ここへ来てお話を聞いてまいり、食社に帰つて風呂敷をひんで、なんか元に行つた方がええんとちがうかなといふくらい金にはたかいへんのです。といふことでお客さに来て下さい。

——落氏

ぼくも大たい同じ意見ですけれど、埋めたてに聞してはやはり運河を残した方がいいと思ってます。

そういうふうな心情でやって
いるわけですよ。

全くなくなってしまう。これは名前がなくなりてしまうよう気がするわけです。

だから、開発とか新陳代謝
といふのは必要だから、時代
に即応しにような意識もみ
まわし…。

小樽といふ街は海と山に囲
まれて、非常にコンパクトに
なっており、道路をつくる場
合でも、山側が海側しかない。
まん中に作るわけにはいかな
い。

やはり海、こいつとどうレ
乙もあそこれがない。もつと
お金があれば海の中に直接橋
をつくっこやる。もしも小樽
といふものの大目に考えてい
るならどうするのも止むを
得ないという気がします。

だからレベルといふことと
考えてみると、こういうところは音がちがうんだと。保存
することと開発することとは
小樽の場合はちがうレベルの
問題なんだといふ認識を持た
なければならぬんだと思いま
す。

たとえば美術関係ですが、
最初ぼくが詰め合った時に、
バイパスが造ってもいいんじ
やないかという意見がありま
したよ。ただ、もうもう運動が
あって残したいといふ人の熱
意が込み込みならぬ。

小樽は、愁だ"けじやだめで
すよ。ぼくたちも心情的には
倉庫を美術館にする運動をす
る過程においては、やはりあ
そこは残しておいてほし。

小樽自身をひとつ観光都市
にして、この街では産業は
起こさない方がいいんではない
かと思いまます。

自分の子孫の生活しやすい
ように、へんな公害出す企業
をもっこくるよりは、もしくは
へんな煙をはき出す企業を
もっこくるよりは観光都市にな
ってしまった方が自分の理
想とはなれぬるものにならん
ひないかな。

それで一部公害河が活かせ
ることができるればそれでいい
んじゃないかな。

— 渡辺氏

ぼくはオーナーのパート。
フェスティバルを組織して実
行委員長になりました。その後
オーナーの運河講座の実行専
員をやりました。

立場としてははつきりして
います。ぼくは運河を残して
小樽のまちづくりの基礎にし
ていただきたいと思って運動にか
かわっています。

— 佐渡氏

実は20年くらい小樽を離れ
てたんですね。正直言ってこ
っちに来て運河をどう思うか
と言われても答えようがなか
ったんですよ。とにかく考え
てみたこともなかつたですね。
ひとつ、さっきここが映画
を観て、実になつかしいなど
いう気がして、センチメンタ
ルなことしか言えなかんだけ
れども、運河も風景をつくっ

て川手一部だといふ考え方と、
そういう個人的な考え方といふ
のはすごくあります。

まあそれ以上に入ることは考
えてないです。という立場
と云ふて言われても、やはり
風景としてはみた方がいい
いなと思いますね。

— 中山氏

さっき渡辺さん言われた
ように、白黒つけるといふ感
じが非常に多いなと感じて
ます。

正直言て残念だなと思つ
ています。できる限り残す方
向ひを進めていきたいと思つ
ています。また、今まで私
作ったような映画でもどうな
んですが、アピールがもつと
他の都市に対するなか、たん
じやないかなと思いますね。

もっと宣伝といふのに力を
入れていけばいいんじやない
かなと思いますね。

小樽に毎月1回くらい飲み
に行こうかね、といふ人もれ
幅にはいるわけですから、
ういう握りあいをしてもいいけ
ばいいんじやないかなと思いま
すね。

— 佐藤本氏

小樽を象徴するものは何か
と僕なんか考えると、たとえ
ば日銀があるとか、それ以上
に運河といふものが一番だと
いう気がするんです。

つまり、それを埋め立て
しまうと、小樽ってイメージが

第7回 総括討論会

昭和56年6月29日
小樽市労働会館

——司会

それでは只今より始めたい
と思います。

顔なじみになった方が殆んどなんですが、まず自己紹介から始めたいと思いますのでよろしくお願ひします。

私は今回の運河講座実行委員の一人で、夢の街づくり実行委の平田と申します。

——峯山氏

小樽運河を守る会の峯山と申します。

——佐々木氏

この春から「ふいえすた小樽」という雑誌に参加させて頂いてます佐々木です。

——樺野氏

私は税理士の樺野といいます。9年前に室蘭から小樽にやつて來たんです。

その時は僕の代さえ小樽がもってくれればいいと考えてたんですが、息子が今度大学生になったんですね、で、私の後を繼ぐと言ったのですから、これは私の代だけで小樽が終ったう困るなと思いましてね。

私は保存には反対なんですが、賛成の方も意見をきいて立場は違っても、将来の小樽を良くするにはどうしたう良いか、ということを考えてみ

たいと思って参加しました。

——石塚氏

札幌で数員をやっておりま
す、運河を守る会の一員として
参加しております、石塚です。

——長南氏

今回初めて参加させて頂だ
きました、大同倉庫に勤めて
おります長南と申します。

——江川氏

前小樽で繊維の卸しの会社
に勤めております江川です。

——中山氏

中山です、この前、映画を見
て頂きましたが、運河だけは何とか残していくたい、
出来るだけの協力はしていき
たいと思ってます。

——伏島氏

札幌の伏島と申します。
エセックというコンサルタント会社に勤務しています。
参加させて頂きました、色々な面で大変勉強になったと思
っています。

——佐藤氏

佐藤と申します。家庭の主婦ですが、小樽川柳社の同人で編集委員をしております。

昨年の7月号で運河のこと
を少し書きましたし、前から
関心がありましたので今回出

オフ会 -2

させて頂だきました。

— 北村氏

今回の記録を担当しております、運河を守る会の北村です。

— 坂本氏

坂本和雄といいます。職業は造園業を営なむ父の手伝いをしております。

記録のほうを担当させて頂いております。

— 渡辺氏

渡辺と申します。前回話しましたように小樽版画協会に所属しております。

— 柳田氏

今は神戸に住んでるんですけど、都市計画とか建築の仕事をしております、運河を守る会の柳田です。

— 五十嵐氏

縁小学校に勤めております五十嵐です。

二度の強行採決で、もう残念で残念でたまりません。

今度の講座では1回欠席しちゃったんですが、出て良かったと思ってます。

— 北村氏

私は運河を守る会の北村です。

— 庄部氏

庄部と申します、どうぞよろしく。

— 中島氏

旅行に来て、長期滞在しているんです、色々な方とめぐり会えて本当に良かったと思っています。

中島と申します。

— 青藤氏

夢の街づくり実行委員会とふれました小樽をやっている青藤友美恵と申します。

— 司会

それでは討論に入りたいと思いますが、今回の講座をふり返ってということで森下さんの方からお願ひしたいと思ひます。

— 森下氏

まず最初に、今回の講座はどういう狙いで行なわれたかということですが、大きなテーマとしては小樽の町づくりを今後どうしていくのが良いか、中でも、どのように運河の再生を進めるか、その一つの具体的な課題ともいえる、石造倉庫の再利用に焦点をしづってみました。

では何故、石造倉庫の再利用にしづったか。

皆さんご存知と思いますが先頃の市議会で公有水面埋め立ての採択が強行されたわけですが、その背景の一つとして、今年度から始まりました倉庫近代化事業との関連があるのではないか、ということがあつたわけです。

小樽が経済的に低迷してゐる、そこを脱却しようとして倉庫近代化事業と道路建設などが連動して進んでいます。

低迷しているという状況の中で、やはり、経済至上の論理といいますか、そういうものが非常に働いて歴史的環境を危うくさせているのではな

いかと考へるわけです。

とするならば歴史的環境の保存を実現していくには、経済との調和が一つの大きな課題となってくるわけです。

そこを考慮した時に、石造倉庫の再利用、商業的つまり經濟的な調和を考えながら再利用していく、という事が具体的な現実的な課題であると考えたわけです。

というわけで、石造倉庫再利用に関して様々な角度からその可能性を探ってみよう、というのが今回の講座の狙いだったわけです。

ということで今迄6回を聞いてきたわけですが、討論のテーマとして今日は3つ用意してきました。

最初は石造倉庫の再利用についてです。

今迄の講座を聞いての感想でも結構ですし、色々なご意見を出して頂だきたいと思います。

二番目としては、ご存知のように6月26日の市議会で強行採決されて、市段階での行政手続きは終ったわけです、この状況の中で、運河保存を拠点とした小樽の町づくり運動を今後どのように展開していったらよいか、という事について討論して頂だきたいと思います。

三番目としては、この小樽運河研究講座を今後どのような方向で行なつていったら良いか、という事です。

以上三点を実行委員会としては討論して頂だきたいと思ひます。

— 司会

討論に入るのですが、その前に、後からいらした方に自己紹介をお願いします。

— 青木氏

どうも遅くなりまして。土木部次長の青木でございます。

担当しております仕事に直接かかわりがあるものですから、参考にさせてもらいたいという事で参加させて頂だいてます。

— 森本氏

どうも今晚は、絵をかいている森本です。

この運河を守るという事に関わって、色々な事を考えさせられておりますし、何かとて人生の中の有意義な時を今、過しているような気がしています。

— 司会

それでは討論に入ります。フリーな形でディスカッションしたいと思いますので、ご意見のある方はどんどん出して下さい。

— 北村氏

石造倉庫の再利用という問題を今回のテーマにされたのは多分、市として、実際の動向をそつであるし、あれは残るんだからと、何度か私どもに向っておっしゃっている、で、残るんだから再利用を、という事でテーマにされたと

思うんですけども、どうもここ最近の問題をずっとたどつてみますと、実は石造倉庫は残らないんじゃないか、と心配しているんです。

というのは、市側は、いずれ説得するとおっしゃりながらも、私有物には手はつけられないという考え方があるんですね。

これでは、市の説得の効果には期待できそうもない、そんな気がするものですから、残るんだから再利用を、の一步前に、どうすれば残せるのかを考える必要があると思うんです。

——森下氏

市の計画に沿って道路建設が進めば石造倉庫だって残らない、というのは全くその通りだと思うんです。

ですから逆にね、石造倉庫の再利用こそ運河保存につながると僕らは考えたわけです。

先程も申しましたが、倉庫業者はあの地区から撤退して勝納ふ頭へ集団移転しようとしているわけです。

あの地区に大規模な道路をひく事で起るであろう新しい土地利用に期待して、勝納へ移るはずみをつけようとしているわけです。

では、道路が出来る以前に経済的な条件を満たした再利用例、それを具体的に示すことが可能なならば、ひとつすると道路建設の要求を鎮める事も出来るのではないか、そ

う考えたわけです。

——五十嵐氏

あの26日の結果でね、一番残念なのは、私、教員なものですから、小樽の町の移り変りや港のことなどは小学校の3年生で勉強するんです。

フィールドワークといいますか、運河沿いをずっと歩いて、で、運河の幅が40m、あそこに船がついて、荷上げされて、といった話が子供達には一層良く分って勉強になるんですよね。

それが水面の幅が半分になり6車線の道路がついて、船もいなくなっちゃったらどうやって子供達に教えていいけるかなア、と考えるとそこが残念で残念でしょうがないんです。

それと、オフ回でしたでしょうかこの講座の、初めて聞いてびっくりしたんですが、

美術館とかガラス工芸とかレストランとかね、素晴らしいなあと思ったんですが、工業指定地区になっていて、良いなと思うものは全部ダメではないかと、そのあたり何かちょっと分ったら面白いなと思いました。

——司会

えーと、石塚さん。

——石塚氏

いや、そういう、小樽の港湾地区の用途地域指定や、どういう活動が現状の中で許されるかという問題は、お隣りに市役所の方がいらっしゃる

ので、お伺いするのが筋だと思いますが。

——青木氏

それでは、私も専門の所管でないので一般的なことですけど、都市計画の中の要素としては、道路、公園、下水道、都市施設としてはこの3つ位ではないかと思うんですね。

その他に今の用途地域という指定をしているわけです。

つまり、工業地域とか住宅地域とか、商業とかですね。

たとえば住宅地域にはガスタンクのような危険なものは建てられない、といった規制をしているわけです。

これは全市的な見地から小樽の町づくりの上で、どの地区はどう利用したら良いかという事で設定されているわけです。

運河地区は小樽倉庫のある辺は準工業地区で、小樽倉庫と大家倉庫との中間位から運河の北端までが工業地区に指定されています。

それと同時に臨港地区というアミをかかっている。

そうすると、今問題の石造倉庫の再利用にも色々と規制がされるわけです。

で、色々伺っていますが、皆さんのお考えに合うような土地利用ということですと、商業地区とか近隣商業地区とかに指定を変更すれば良いわけです。

これは絶対的に変えられないものではない、という事は

いえるわけです。

——山口氏

僕らも色々へをしたらと提案をしてきたわけですが、市の環境整備構想ですね、あれを見ると、特に守宮寄りの方ですが、ショッピングゾーンとして設定されているわけでしょう。

当然、あの構想を実現されるためにも、商業地区への変更はされるお考えなわけですね。

——青木氏

いや、そういう事じゃないんです。

先程いいましたのは一般論として指定変更は不可能ではないということで、今、市が作っている環境整備計画の考え方方は現況の枠内での環境整備という事です。

——森下氏

北浜にですね、新博物館を建設と、ありましたけれど、工業地域の中で出来るんですか。

——青木氏

たしかですね、可能だという考え方でしたね。

——森下氏

いや、規制対象に入ってるんじゃないですか。

——森本氏

あのほう、佐々木さんの、大家倉庫を美術館にっていう話、あれは引っかかるんですね。

——石塚氏

ええ、かかるんです。

ですから守る会としても、道路にすべきか環境を残すべきかという議論だけじゃなくて、あの地区をどう見直していくかということが重要な課題だと問題提起して来たわけです。

——山口氏

手続きは複雑ですか。

——青木氏

手続き上は別にね、小樽市で決めりやいい事ですから。

ただね、全市的な問題ですから相當に議論のある所ですからね、そう単純に変更は出きないでしょうね。

——山口氏

今の倉庫業の方々は勝納へ58年をめどに移るという現実があるわけでしょう。

当然あの地区は、空き屋になったり所有者が變っていったり、そういう転換期にあるわけですよ。

じやあどういう業種が進出するかというと、小樽は三次産業が圧倒的なわけですよ。

そういう中小の商店が立地するにしても、市の環境整備構想が実現なったとしてもですね、工業地域という人の寄りにくくあみの中では立地は難しいという事は常識的に云えるわけでしょう。

外部の人間にとつての魅力ある、極端に云つて了えれば、観光資源として生かしきつておらない、宝の持ち腐れだと思つし、あの地区はそういう風に再開発していくべきじゃ

ないかと。

民間の先行投資なんかがあり得るようですね、市の方でも用途地区の変更なんかを是非とも検討して頂だきたいと僕ら思うんですよ。

——椎野氏

あの私ね、あの倉庫といふのは市のものでなければならない、私有物なんですね。

それを我々がなんぼ議論したってね、やっぱりちょっとねおかしい感じがあるんだよね。

私たち中央ライオンズで市の分庁舎に美術館作ったんです、でも5百円のお金を集めるのにたいした苦労したんです。たった5百円ですね。

だから大家倉庫を買って美術館をなんていっても、買える筈ないんです。

唱えてさえいれば何とかなる、只で何でもやって貰える、そういう発想のような気がするんです。

市長を動かして国を動かすとか、それをやらない市長ならどう返るとかするなんなら、話は別ですがね。

私は昭和20年から3年間この経験にいましてね、しばらくぶりで小樽に帰つて来て、も何も変つてないんですよ。

それは昔はなつかしい、だけ変つていないことが、反面嬉しいの反面淋しかったですよ。

小樽はね、何かこう、政治

の力が弱いような感じがするんです。

——石塚氏

花崎翠平さんがオフ会で、地域を離れて、或いは他の地域から見た時に初めて地域の良さを再発見できる、というお話をされたんですが、その後のオフ会で、地域での試み、で実践してゐる方やその他の小樽での動向を見ると全たくそういう顔ぶれなんですね。

何かそういう視点を持った人達が何かやりたい、という動きが今おきているというのだが、ここ数年の間の小樽のすごく特徴的なことだと思うんです。

それが何かちょっと空回りしているといいますか、小樽で長く生活されている方々との間で、うまく結びついていない。

何かそういう所をうまく結びつけていく気運というのがないのだろうか、今回の講座を通してその辺が非常に関心をひかれたところなんです。

——椎野氏

守る会では何かそういう働きかけはしてゐるんですか。

——峯山氏

小樽倉庫などには現地保存の要請をしてきてます。

たしかに私有財産なんですがね、私たちが町並み保存という立場で考えていますことは、町並みはみんなのもの、という考え方が一つあるわけ

なんですね。

私有財産ではあっても、それが町並みを形成した時はみんなのもの、と捉へて、小樽倉庫さんなんかにもお詫していいるんですね。

もう永年働き抜いてきた倉庫なんですから、單に売つて金にしようというのではなくて、もう一つ次元を高く、小樽全体に還元する、という考え方ですね。

——椎野氏

いや会長さん、それは甘いんだなア、甘いわ。

何かおねだりしてゐる感じですね、僕は好きじゃない。

——峯山氏

ですけどね、伝統的建造物群の指定を受けますと国や道から補助金もあるわけですから、そういう手立てはあるのですから、ただおねだりというのではなくてね。

——柳田氏

基本的に日本は資本主義の国ですから土地建物の私有は認められて財産権があるわけですけど、町というの人は人々が協力しあつて生活していく場なわけですね。

そういう人と人との和といつものが上手くいってる町が良い町になっていくんだし、その一つの表われが、個々人の持つてゐる建物の並びが町並みという形で捉えられるのではないかと思うわけです。

ところが小樽は経済的に落ちて、そんな事がきつとる

どころじゃない、自分が食つてくのが精一杯だと。

まあそういうところで、和というものが実に生まれずらいベースになってる。

行政が強い指導力で引っ張っていく必要があるわけですが、これが全然できていないわけですね。

こうした中で僕らが云つてゐる事は、まさに高望みなわけですけども、正しい事だと思うし、言い続けていくしかないんじゃないかと思うわけです。

まともな事を云つとるのにそれが上手く対応を結ばない。

そこに様々な問題点があるわけで、市の方にも参加して頂だいて勉強し続けていく必要がある、と僕は考へているわけです。

——中山氏

最近ですね、道あたりでは苫東開発にもう少し力を重点的に入れるべきではないかといわれてましてね、まださだ石狩湾新港が本格的に始動するの難しい、というような意見も出てきてるわけです。

ですから、北海道の日本海側の港としての小樽港の重要性というのは、地元の人も、そつと見直していいと思うんです。

それと、都市の再開発事業というのは、課税されないと非常に特典が与えられた形でできるわけです。

ですからね、線引きの問題

をもう少し考へる必要があるという気がしてならないんですね。

日本の中で、北海道じゃないですが、実際に工業地域から商業地域への変更をした所を私知っていますしね。

研究していく必要は十分にあると思いますね。

——司会

今後の事を考へる材料として、行政や議会の現在の状況を簡単に説明して頂だきたいと思います。

——筆山氏

ご報告いたします。

5月28日、総覧が終った時点で保存の意見書を市内から1600通、市外から400余通、合計2091通を提出してございました。

市長さんはその2091通の意見書を9種類に分けて、それらは運河地区整備構想に盛り込んであるんだから、とあっさりと片づけていらっしゃいました。

6月26日の経済委員会になりました、社会党からは環境アセスメントに関して7項目の質問がありましたが、私たちにしてみれば、どうも納得のいかない返答でしかありませんでした。

共産党からは平面図についての不備な点がるる出されました。

測量年月日がおかしい。実測をしていないふしがある。所有者名などに17箇所まちが

いがある。許容誤差30cmなのに2m60cmもの誤差が放置されている。

私たち傍聴しておりましてそんなことだったのかと非常に驚ろきを持ちました。

全たく納得のいかないままに数の論理で押し切られてしましました。

公有水面埋め立ての行政手続きは小樽市段階ではすべて終ったわけで、おそらくすぐに運輸省へ提出されることでしょう。

しかし、総監査類の中にも納得のいかない点がございましたし、市議会で提起された数々の疑問点、2091通の市民からの意見書の処理の仕方にしましても、私どもにとりましては納得のいかないことはあります。

運河保存を市民に更にアピールしていくかなければならぬと考えておりますが、これから先、どう運動に取り組んでいくかという事を今、守る会の中で話し合っているところなんです。

そういう状況なんですが、この講座にいらした方々がどう捉えてらっしゃるか、ご意見を伺いたいと思いますし、出来るならば、是非、戦力として加わって頂ければ大変私は有難いと思います。

——司会

できれば守る会以外の方に

ご癡言を頂だければと思いますが。

——長南氏

倉庫業といつてもですね、昔の中小の業者20社くらいが集まって作ったのがうちの大同倉庫ですかね、後の者は建物を借りて大同の看板で仕事をしてるっていうだけなんですよ。

まあ、会社の云い訳するわけではないんですが、結局我々は借りてるだけだから、自分の建物だったら雪下しもするけど、3月だからもう溶けてしまうっていう風な……

倉庫自体でいえば、昔の船から荷物がついでいく奴ですからね、やはりリフトの回転とか機械荷役でいけばちょっと無理ですよね。

大型トラックが中に乗り入れて荷捌きできる倉庫に変わっていくんじゃないですかやっぱり。

運河大事だ、倉庫大事だっていっても我々はそこで生活していかなければ、会社がなければどうしてもいいわけですね、石造倉庫とか愛着持つのはいいけれど、やはり生活基盤となれば違うんじゃないかと思いますね。

小樽へ来て大学へ入って、9年になりますけど、ちょくちょく手習から運河沿いの倉庫を歩いたりしたんですが、ついに2、3年前から臨港線に接がるようになって、運河沿いも、けっこう車がひんば

んに来るんですね、近道だと思って。信男ないですぐら。

前でしたら写生の人も写真の人も一一杯きてましたけどね、臨港線できる前、5、6年前でしたら、あの辺歩いてもね良い場所でしたけれどもね。

もう駐車場みたいにまわりみんなでしてるし、実際に臨港線できて車は多いし、やはりちょっと観光する人でも何でもくじけるんじゃないですかね、のんびり歩くどこで良いどこであってね、あそこ。

—青木氏

ちょっと要請じみた事をお話ししていきたいんです。

この運動ね、行政側の中でも実ったと思うんですね。

守る会の運動は町づくりの運動だと、それはその通りですし結構だと思うんです。

ただ、小樽の町づくり運動として臨港線の建設促進というのが一方にあるわけです。

従ってね、行政としては道路の建設と、運河や倉庫の保全と、まあ一所懸命にやっているわけですわね。

ですからね、道路はダメというんじゃないなくて、今、市の方でいる、道路建設と運河地区環境整備計画とをうまく調和させる、という観点から行政側と手を握り合ふ、一口で云えば条件闘争に切り換えてね、守る会も夢街も行政と手を握り合って、新しい町づくりを進めていく。これは本

当は、しかるべき事じゃないかと思ってるんですが。

—峯山氏

みなさん一一杯言いたいだろうと思いませんけど、私から。

私たちの考えはね、本当に良い小樽にしたい、ところが行政は、道路も造れば運河も残すという形で、結局私たちにしてみれば運河が残ったとは全然考えられない形なんですね。

道路はダメ、とは言ってない、代案を提示してきてるわけです。

行政は、両方を勘案したとおっしゃるが、私たちには納得がいかないままにここ起きてしまったんですね。

もっと私たちの意図する所を汲んで頂ければ良いんですけどね。

—山口氏

僕もね運河については青木さんの言う事をうのみにはできないわけです。

何故、道路がいるかについても、僕らを説得して頂だける論理の展開はなかったんです実際の話。

ただ、環境整備構想というのは前にはなかったわけですね。

この運動があって、行政と色々と議論を重ねてきた中で、小樽の歴史的町並みというのを、双方で評価した、そういう意味で、一つの僕らの意を汲み取って頂いた、といえると思うんです。

たとえば色内通りにしても、倉庫群にしても、小樽市を僕らも残したいとお互いに云つてゐるわけですから、そういう部分では僕たちも行政と一体となって、検索し合って、上部行政に官民一体で陳情するとかできると思うんです。

それもね、ただ議論するだけじゃなくて、たとえば市長さんから百十円ポケットマネーを出して貢って、部長さんなら20万とか、で僕らも1万円と分出し合って基金を作つて、オホセクターを作つて事業化していく。

こういう事は充分にできるんだと思うんですね。

そういう事でなら僕らはやぶさかでないし、なんぼでも協力させて頂きたいと思うんです。

—椎野氏

守る会の見解なんですか。

—山口氏

会の中では結論というわけではないですがね、これは、やっぱり行政と民間が一体となって、全国に、上部の行政に働きかけていかないかんと思うわけです。

—椎野氏

ちょっと遅いのね。

—山口氏

それは僕もそう思います。

ただね、僕らから云えはですね、歴史的町並みの価値っていうものを僕らが10くらい認識してるとすれば、市側は5くらいしかしてない。

観光予算ひとつとってもですね、微々たるさんですよ。

そういう風に対応は遅れどるんです、非常に。

ただね、これは市にケチつけるわけじゃないですよ、僕らは今迄全然してこながつた事をし始めた、という事を評価しとるんです。

それにですね、こういう事は単に行政にやれ、やれって云つても駄目だと思うんですよ。

やっぱり、住民の中からやりたいという声が沢山上ってこなきゃいけんわけです。

—青木氏

さっきの発言と関連するんですが、どうでしょうね、市の立てた「小樽運河とその周辺地区環境整備計画」を今後のこの講座でテーマにとり上げるのは。

道路と環境の整備は両立しないと再三おっしゃるけど、そうではなくて、調和させる方策を探ってみるという道があると思うんですよ。

それに実施設計はこれから問題ですから、具体的に、街路樹をどうするとか、街路灯は、プロムナードのフロアは何を使うか、そういう事はこれから問題なわけです。

道路と環境を調和させる道を探る、そういう観点から市の環境整備計画を議論して、研究してみたら。

—峯山氏

よく検討させて頂だきたい

と思ひます。
——青木氏

その時にはね、先程から議論になっている、倉庫の再利用の問題、用途地域の問題、こういう事だってね、市の担当の専門家を呼んできて議論をする。

これは僕は価値があると思うんですよ。

——筆山氏

いや、まだね、道路が通るとは思っていないのですからね。

——青木氏

そんなんね。たとえばね、今度の講会で問題になった不備の問題ね、末端の問題ですよ僕らに云わせりや。

目的達成のためにには手段を選ばずっていうんであれば、それも結構ですけども。

——山口氏

いや、僕らはそんな事いってないですって。

——植野氏

ちょっと待って下さいね。観光が来ないっていうけど一番駄目なのは道路の整備が悪いわけですよ。

町並みが変わるっていうのがありますけどね、まず車の通す道を造らなきゃなんないというのが根本的な問題だと思うんですよね。

——柳田氏

その観光と交通の問題、大事だと思うんですよ。

観光課の人と話してみると小樽の文学館、すごく良い所

にあるんだけど駐車場がないから駄目だと云うんですね。

修学旅行とか何かでバスで来るでしょう、文学館を見せててもバスを停める場所がないから駄目だ、もうどうしようもないんだと云うんですね。

しかし基本的に車社会に対応していこうという考え方には行政も考え方を直さないかんと思うんですよね。

逆にそういうのを武器にしていかなければ。

何れにしても、街を美しくするにはとか、魅力的にしていくにはとかいう事は始まつたばっかなんですよね。

だから、そういう風な議論される場が待てる、という事が町づくりにとって大事だと思うわけです。

ですから先程の青木さんの提案も大変すばらしいと思ひます。

それも、よくある行政の説明会というのじゃなく、行政の方から研究講座の中に入ってきてこれられるという事ですから大変良いご提案だ、と思うわけです。

——司会

時間は過ぎたんですが、まだ喋ってない方では是非という方がありましたら。

——佐藤氏

よろしいですか、私は本当に初めてこの講座に参加させて頂だいて、7回とも休まずに出席したんです。

あの、私、転勤族で、小樽に8年住んでいます。これだけこういう事で運河保存の方々が一所懸命やってるっていうの、正直な所、初めて分ったんです。

運河を守る会のP尺不足といつたら語弊があるかも分りませんが。

それで、私の感じた所では小樽に生まれて育った方が余りに無関心じゃないかな、と思うんです。

むしろ転勤族とか、一度離れた方がすごく一所懸命にやってらしてね。

だから、もう少し、一般の方たちにどうやって漫透させるか、という事を考えなければいけないんでは、と感じました。

——北村氏

主に、今後の研究講座の方、について発言したいんですけど、今日の話では、青木次長さんがお見えのせいもあるでしょうけれど、運動者が運動に基いて発言する、そういう傾向がちょっと強すぎると思うんです。

研究講座っていうのを開く時には、きっと議論に、先入観を排して、hattai真理はどこにあるか、を目指すべきだと思うんです。

つまり、運河を残す事が本当に良い事なのか、そこを議論してこそ講座なのだと思うわけです。

倉庫は私有財産であるから

ここで議論するのはおかしいというお話をありました。現行の法規の中でも、私有財産より重要なものとして公共の福祉の上位性を定められているわけです。

市民全体の善、につながる場合には私権を制限する事も認められているわけです。

ではいったい、運河というものがそこにあてはまるものなのか、どうなのか、そこを議論すべきと思うわけです。

その意味では今回の講座は全体を通して技術的な問題に終始してしまったという気がするんです。

佐々木さんでしたでしきうか、大家倉庫を美術館にという夢のある大変いいお話をしましたが、ご自身が言っておられた通り、それは、美術館が欲しいという市民の意思がなければ話にならないわけです。

大家倉庫をどうしようか、じゃあ美術館にしよう、というのはおかしい。

美術館が欲しい、じゃあどこに造ろうか、でなければ本物ではないと思うんです。

一般市民にアプローチするためにも、再利用の手法を云々するのではなく、まず、運河や倉庫を残すことにはどんな価値があるのか、を探求すべきだと思うわけです。

先程の青木さんのご提案、非常に良い事だと思うわけです。

市は半分埋めて運河だと

いい、僕らは半分埋めたら運河でなくなるという。

運動ならば、そこで声を大きくするとかすればいいのかと知れませんが、講座では、一体この差はどういう事なのか、そこを極めよう、という風に取り組むべきではないかと思います。

—司会

今日のまとめという事にはならないんですが、全国的にみても、歴史的環境の保全を軸とした町づくり運動というのは最近の10年、そういう新しい、守りの状態だと思うんです。

小樽もまさにそういう所にあるわけとして、積み重ねていく事が一番大切なんだと思うわけです。

で、まだまだ知り得ていな部分が多いし、やっぱりこうした町づくりを考えていくためには知識とか、情報を知らないくてはいけない。

そういう勉強の場、情報交換できる場として、この研究講座を続けていきたいと思いますし、出来るだけ多くの市民の皆さんに参画して頂だいて、一人一人が、具体的な課題を一つ一つ明きらかにして、こう積み重ねていく事、それが大切なんじゃないかという事で、まとめにかえさせて頂きたいと思います。

最後に青山代表から一言。

—青山氏

今日は大変長時間にわたっ

て有難うございました。

今回の講座では、行政からも、反対の意見の方もご出席下さって話し合えた事が、大変良かったと思ってます。

こういう風に、また皆さんに集まって頂だいて、私たちの小樽の問題なのだから、という事で、お話し合いができる、そういう機会を是非また作りたいと思っております。

どうぞ、お懲りにならずにご出席下さって、みんなで知恵を出し合って良い町にして行きたいと思います。

本当に有難うございました。

第3回 小樽運河研究講座 を終えて

● 今回の講座の位置づけ

今回の講座は、「どのように小樽運河の再生をすすめるか」をテーマに、運河再生の柱の一つである石造倉庫の保全・再利用に焦点をしづけておこないました。その背景には、オ1に、石造倉庫をはじめとする、小樽における歴史的建造物保全の機運の高まりがあります。市民の側からはすでに、運河保存運動をつうじて、市内に現存する歴史的建造物保全の声が上がっていました。その声を受けて、市行政でも最近ようやく保全対策を講じることが検討されています。こうした機運を受けとめる開かれた場が必要です。

オ2に、保全の期待とはうらはらに、現実の動きとしては歴史的建造物の喪失が進んでいるという危機的な状況にあり、保全が現実的かつ緊急的な課題となってきたことがあります。昨年は寿原邸、青山邸が、今年に入りからは運河沿いの石造倉庫2棟が相次いで姿を消し、さらには市立図書館も取り壊しが決定していたことは、現存する多くの歴史的建造物が同じ運命をたどるかもしれないことを示す警鐘として受けとめねばなりません。とくに、運河沿いの石造倉庫群は、今年度からスタートした倉庫業近代化事業に伴い、スクランプ化の動きが懸念されます。こうした緊急の課題にこたえる討論の場が必要です。

オ3に、歴史的建造物の喪失の原因が、根本的には小樽の経済力の低下にあるという状況分析があります。もし、石造倉庫の保全・再利用 — それも商業的な施設として再利用でき、低迷する経済への新しい刺激剤となれば、小樽における環境保全と経済の隘路を突破する糸口になる可能性があります。そ

れがひいては、運河保存の実現への一つの道を開いてくれるのではないかという期待が、今回のテーマには込められているのです。

● 具体的な目標と内容

このような位置づけをふまえて、今回の講座は、石造倉庫の保全・再利用の実践課題と、その課題解決の道をさぐることを目標としました。

実践課題として、次の3点を設定しました。

① 保全・再利用を誰(どこ)がやるか — 主体の可能性

保全・再利用を実現するにあたって、それを誰(どこ)がやるのかという問題は、最も基本的な課題です。公共の手でやるのか、民間の力でやるのか、あるいは両者が協力してやるのか、いろいろなケースが考えられます。今回は、地元小樽で工芸、美術、喫茶、レストランなどの経済活動や文化活動を行い、活動の拠点を歴史的建造物に求めている若者たちに、その可能性をさぐってみました。

→オ6回「地域での試み—小樽を生きる場としてー」

② 保全・再利用のために、どういう手立てが考えられるか

— 事業化の方法

保全・再利用の主体があつたとして、実現するためにはどういう事業がありうるか、またその事業をどのように進めていくかが今重要な課題となります。公共事業の可能性を全国各地、諸外国の事例から、民間の手による事業の可能性を神戸・北野地区の事例から、公共、民間両者の事業の可能性を日本のトラスト運動として有名な知床の土地買い上げ運動の事例から、それぞれさぐってみました。

→オ3回「町並み保存事業—事業化の手法をさぐるー」

オ1回「にぎわいの広場の創造—保存と経済の調和をめざしてー」

オ2回「土地買い上げ運動の展開—知床の環境保護に学ぶー」

③ 保全・再利用に際してどういう問題があるか — 問題点の整理とその解決策

一般に、歴史的建造物の保全・再利用には、建物を新築する場合とくらべて法制度上の制約の厳しさ、建築技術上の難しさ、多額の費用の必要など、多くの困難な問題があります。小樽の石造倉庫の実状に照らしながら、保全・再利用の様々な問題点の整理とその解決の方向を、道開拓の村へ移築された歴史的建造物の保存工事の事例と、地元小樽でおこなわれた再利用の実践例からさぐってみました。

→オ4回「歴史的建造物の保存・再生—制度的、技術的、経済的な課題をえてー」

実践的な課題の検討だけでなく、環境問題全般にわたる理論的な検討もあわせておこないました。

→オ5回「風景の創造—社会と文化の再建をめざしてー」

● 総括と今後の課題

歴史的建造物および歴史的町並みの保全・再生は、うるおいのあるやたかな都市環境をつくる上で、全国共通の一つの重要な課題です。しかしながら、一部の地域をのぞいて、なかなか実現までに至っていないのが現状です。それほど困難な課題なのです。それは、この課題がまちづくりの中心的な役割を担うものとして注目をあびるようになってから、まだ20年ほどしかたっておらず、まだまだ研究、実践の蓄積が足りないからだと思います。現在は、保全・再生をめぐる問題点を整理

し、それを解決するための課題をあきらかにし、実践へとむすびつけていく積み重ねの時期にあるといえます。

小樽の歴史的建造物、中でも石造倉庫の保全・再利用にテーマをしづらりこんだ今回の研究講座も、このような積み重ねの第一歩を踏み出したものとして考えたいと思います。具体的な目標に掲げた保全・再利用の主体の可能性、事業化の可能性などについて、即実践につながるような成果は得られなかつたわけですが、今回の講座を契機として、市民一人一人がこの問題について主体的に考え方、行動し、より発展させていくことが最も重要なことだと思います。

今回のテーマに関する当面の課題として、市行政、石造倉庫所有者、保存団体、一般市民、研究者、専門家が一同に会し、それぞれの立場から保全・再利用上の問題点をあきらかにし、その解決の手立てについて議論を重ね、知恵を出し合うことがぜひとも必要だと思います。関係する人々が意見をたたかわせないかぎり、発展、創造は望むべくもありません。そのような発展、創造の場として、この研究講座が機能することを切望してやみません。

将来的には、本講座を主催している私達自身が、石造倉庫の保全・再利用を含め、ひろく小樽のまちづくりに関するテーマについて学習、研究を積み重ね、その成果をもとに議論の場が設定できるまで力量を高めていくことを意志表示し、總括と今後の課題としたいと思います。

昭和56年7月 記

小樽運河研究講座実行委員会

※今回の記録の発刊が大幅に遅れたことをお詫びします。

—昭和58年7月—